

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第84集

榛名平・坪の内遺跡群

HARU NA HIRA

榛名平遺跡

第Ⅲ分冊
古代律令編

長野県佐久市根岸榛名平遺跡発掘調査報告書

2001. 3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第84集

榛名平・坪の内遺跡群

HARU NA HIRA

榛名平遺跡

第Ⅲ分冊
古代律令編

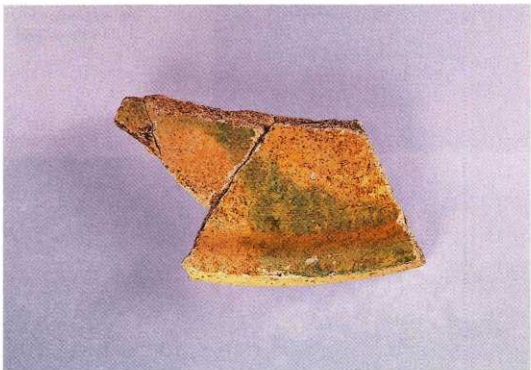
長野県佐久市根岸榛名平遺跡発掘調査報告書

2001. 3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会



榛名平遺跡全景 後方は礪科山麓、遺跡周辺では刈り入れ間近の水田が広がる



ⅡH12号住居址出土「奈良三彩蓋」



上右 須恵器蓋「大井」刻書
上左 遺跡現場説明会風景
中央 ⅡH28号住居址カマド
下 少年考古学教室風景

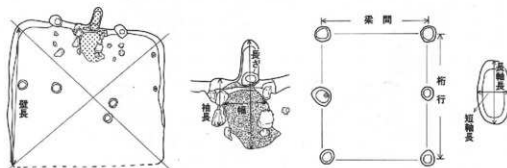


凡例

- 1、第Ⅲ分冊は奈良・平安時代の遺構・遺物を取り上げた。
- 2、遺構の略記号は、住居址(H)・掘立柱建物址(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)である。
- 3、挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
 竪穴住居址・掘立柱建物址1/80 カマド1/40 土坑1/60 土器1/4 石器1/3
- 4、遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
- 5、土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
- 6、遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。
- 7、調査区グリッドは公共座標に従い、間隔は4×4mに設定した。グリッドの名称は北西コーナー杭を基準とする。
- 8、住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、カマド部分は測定値より除外してある。
- 9、遺構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。遺構記号の前のローマ数字は地区名を表す。
- 10、挿図中のスクリーン・トーンは以下のことを示す。



- 11、各遺構の計測は下の凡例に従った。



目次

巻頭カラー図版

凡例

第Ⅰ章 榛名平遺跡における奈良・平安時代の概要

第1節 概要	1
--------	---

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址	3
-----------	---

第2節 掘立柱建物址及び柵列	110
----------------	-----

第3節 土坑	125
--------	-----

第4節 特殊遺構

①方形区画溝	150
--------	-----

②小鍛冶遺構	153
--------	-----

③土墳墓	157
------	-----

第5節 溝状遺構	158
----------	-----

第6節 ビット	166
---------	-----

第7節 遺構外出土遺物	169
-------------	-----

第Ⅲ章 考察

第1節 奈良・平安時代の土器について	183
--------------------	-----

写真図版

図版目次

第1図 I区奈良・平安時代遺構全体図	2	第20図 I H34号住居址出土遺物実測図	17
第2図 I H10号住居址実測図	3	第21図 I H36号住居址及び出土遺物実測図	18
第3図 I H10号住居址出土遺物実測図	4	第22図 I H37号住居址実測図	18
第4図 I H20号住居址実測図	5	第23図 I H38号住居址実測図	19
第5図 I H21号住居址実測図	6	第24図 I H38号住居址出土遺物実測図	20
第6図 I H21号住居址出土遺物実測図	7	第25図 I H40号住居址実測図	21
第7図 I H24号住居址実測図	8	第26図 I H40号住居址出土遺物実測図	22
第8図 I H24号住居址出土遺物実測図	9	第27図 I H41号住居址実測図	23
第9図 I H25号住居址実測図	10	第28図 I H41号住居址出土遺物実測図①	24
第10図 I H25号住居址出土遺物実測図	10	第29図 I H41号住居址出土遺物実測図②	25
第11図 I H30号住居址出土遺物実測図	11	第30図 I H42・43号住居址実測図	27
第12図 I H30号住居址実測図	12	第31図 II区奈良・平安時代遺構全体図	28
第13図 I H31号住居址出土遺物実測図	13	第32図 II H1号住居址実測図	29
第14図 I H31号住居址実測図	13	第33図 II H1号住居址出土遺物実測図	30
第15図 I H32号住居址実測図	14	第34図 II H2号住居址実測図	31
第16図 I H32号住居址出土遺物実測図	15	第35図 II H2号住居址出土遺物実測図	32
第17図 I H33号住居址実測図	16	第36図 II H3号住居址実測図	33
第18図 I H33号住居址出土遺物実測図	16	第37図 II H3号住居址出土遺物実測図	34
第19図 I H34号住居址実測図	17	第38図 II H4号住居址実測図	36

目 次

第39回	ⅡH 4号住居址出土遺物実測図①	36	第100回	ⅡH24号住居址出土遺物実測図①	88
第40回	ⅡH 4号住居址出土遺物実測図②	37	第101回	ⅡH24号住居址出土遺物実測図②	89
第41回	ⅡH 5号住居址実測図	37	第102回	ⅡH27号住居址及び出土遺物実測図	91
第42回	ⅡH 5号住居址出土遺物実測図	38	第103回	ⅡH28号住居址実測図	92
第43回	ⅡH 6号住居址出土遺物実測図	38	第104回	ⅡH28号住居址カマド実測図	93
第44回	ⅡH 6号住居址実測図	39	第105回	ⅡH28号住居址出土遺物実測図①	94
第45回	ⅡH 7号住居址実測図	40	第106回	ⅡH28号住居址出土遺物実測図②	95
第46回	ⅡH 7号住居址出土遺物実測図	41	第107回	ⅡH31号住居址及び出土遺物実測図	97
第47回	ⅡH 8号住居址実測図	42	第108回	ⅡH32号住居址及び出土遺物実測図	98
第48回	ⅡH 8号住居址出土遺物実測図	43	第109回	ⅡH44号住居址実測図	99
第49回	ⅡH 9号住居址実測図	44	第110回	ⅡH44号住居址出土遺物実測図	100
第50回	ⅡH 9号住居址出土遺物実測図	44	第111回	ⅡH 1号住居址実測図	101
第51回	ⅡH11号住居址実測図	45	第112回	ⅡH 1号住居址出土遺物実測図	102
第52回	ⅡH11号住居址出土遺物実測図	45	第113回	ⅡH 2号住居址実測図	103
第53回	ⅡH12号住居址カマド実測図	46	第114回	ⅡH 2号住居址出土遺物実測図	103
第54回	ⅡH12号住居址実測図	47	第115回	ⅡH 3号住居址実測図	104
第55回	ⅡH12号住居址出土遺物実測図	48	第116回	ⅡH 3号住居址出土遺物実測図	105
第56回	ⅡH13号住居址実測図	50	第117回	ⅡH 4号住居址実測図	106
第57回	ⅡH13号住居址出土遺物実測図	51	第118回	ⅡH 4号住居址出土遺物実測図	107
第58回	ⅡH14号住居址実測図	52	第119回	ⅡH 9号住居址実測図	108
第59回	ⅡH14号住居址出土遺物実測図①	53	第120回	ⅡH17号住居址実測図	109
第60回	ⅡH14号住居址出土遺物実測図②	54	第121回	ⅡH 9号住居址出土遺物実測図	109
第61回	ⅡH15号住居址実測図	55	第122回	ⅠF3-4-6号・ⅡF3号掘立柱建物址実測図	111
第62回	ⅡH15号住居址出土遺物実測図	56	第123回	ⅡF 2号・ⅡF 3号掘立柱建物址実測図	113
第63回	ⅡH17号住居址実測図	57	第124回	ⅡF 4号掘立柱建物址実測図	114
第64回	ⅡH17号住居址出土遺物実測図	58	第125回	ⅡF 5号掘立柱建物址実測図	115
第65回	ⅡH19号住居址実測図	59	第126回	ⅡF 8号・ⅡF11号掘立柱建物址実測図	116
第66回	ⅡH19号住居址出土遺物実測図	60	第127回	ⅡF 9号掘立柱建物址実測図	118
第67回	ⅡH20号住居址実測図	61	第128回	ⅡF10号・ⅡF12号掘立柱建物址実測図	119
第68回	ⅡH20号住居址出土遺物実測図	61	第129回	Ⅰ 1・2・3・4号・Ⅱ 1号欄列実測図	121
第69回	ⅡH22号住居址実測図	63	第130回	Ⅱ 2・3号欄列実測図	122
第70回	ⅡH22号住居址出土遺物実測図	64	第131回	ⅠD14-19-25-28号 ⅡD1-2-7号土坑実測図	126
第71回	ⅡH23号住居址出土遺物実測図	65	第132回	ⅡD 8・9・10・11・12・13号土坑実測図	128
第72回	ⅡH23号住居址実測図	66	第133回	ⅡD16-20-21-26号土坑実測図	129
第73回	ⅡH24号住居址実測図	67	第134回	ⅡD28-29-31-33-42-43-44-84号土坑実測図	130
第74回	ⅡH24号住居址出土遺物実測図	67	第135回	ⅡD70-73-85-116-121-127号 ⅡD 7・12-31号土坑実測図	134
第75回	Ⅱ区奈良・平安時代遺構全体図	68	第136回	ⅡD10-20-32-54-87-88号土坑実測図	136
第76回	ⅡH 6号住居址実測図	69	第137回	ⅡD 1・3号土坑実測図	137
第77回	ⅡH 6号住居址出土遺物実測図	69	第138回	ⅠD 5・8-13-21-22-23-24-25-27号土坑実測図	139
第78回	ⅡH 7号住居址実測図	70	第139回	ⅡD25-43-45-49-50-51-64-65号土坑実測図	141
第79回	ⅡH 7号住居址出土遺物実測図	71	第140回	ⅡD66-67-68-75-81-86号土坑実測図	143
第80回	ⅡH 8号住居址実測図	72	第141回	ⅡD82-83-84-85-91-92-97-98-33号土坑実測図	145
第81回	ⅡH 9号住居址実測図	73	第142回	ⅡD5-37-38-41号 ⅡD115-129号土坑実測図	146
第82回	ⅡH 9号住居址出土遺物実測図	74	第143回	Ⅰ～Ⅱ区土坑出土遺物実測図	148
第83回	ⅡH10号住居址実測図	75	第144回	ⅡM 9号溝状遺構実測図	150
第84回	ⅡH10号住居址出土遺物実測図	76	第145回	ⅡM 9号溝状遺構出土遺物実測図	151
第85回	ⅡH11号住居址実測図	77	第146回	ⅡH18号住居址実測図	154
第86回	ⅡH12号住居址実測図	78	第147回	ⅡH18号住居址出土遺物実測図①	155
第87回	ⅡH12号住居址出土遺物実測図	78	第148回	ⅡH18号住居址出土遺物実測図②	156
第88回	ⅡH14号住居址実測図	79	第149回	ⅡD24号土坑実測図	157
第89回	ⅡH15号住居址出土遺物実測図	80	第150回	ⅠM 5-11号溝状遺構実測図	159
第90回	ⅡH15号住居址実測図	80	第151回	ⅠM 4-12号 ⅡM 1号溝状遺構実測図	161
第91回	ⅡH16号住居址実測図	81	第152回	ⅡM 6・7号溝状遺構実測図	162
第92回	ⅡH17号住居址実測図	82	第153回	ⅡM13-45号溝状遺構実測図	164
第93回	ⅡH17号住居址出土遺物実測図	82	第154回	ⅡM31号溝状遺構出土遺物実測図	165
第94回	ⅡH19号住居址実測図	83	第155回	Z区ピット群実測図	167
第95回	ⅡH20号住居址実測図	84	第156回	ピット出土遺物実測図	168
第96回	ⅡH20号住居址出土遺物実測図	84	第157回	遺構外出土遺物実測図(灰桶南側)	169
第97回	ⅡH21・23号住居址実測図	85	第158回	遺構外出土遺物実測図(須志原①)	170
第98回	ⅡH24号住居址実測図	87	第159回	遺構外出土遺物実測図(須志原②)	171
第99回	ⅡH24号住居址カマド実測図	88			

図 版 目 次

第160図 遺構外出土遺物実測図(須恵器③).....172	第165図 埴名平Ⅰ期の土器様相.....185
第161図 遺構外出土遺物実測図(須恵器④).....173	第166図 埴名平Ⅱ期の土器様相.....185
第162図 遺構外出土遺物実測図(須恵器⑤).....174	第167図 埴名平Ⅲ期の土器様相.....186
第163図 遺構外出土遺物実測図(土師器).....175	第168図 埴名平Ⅳ期の土器様相.....187
第164図 遺構外出土遺物実測図(石製品).....176	第169図 埴名平Ⅴ期の土器様相.....188

付 表 目 次

第1表 I H10号住居址出土遺物観察表.....4	第33表 II H24号住居址出土遺物観察表.....67
第2表 I H21号住居址出土遺物観察表.....7	第34表 II H 6号住居址出土遺物観察表.....70
第3表 I H24号住居址出土遺物観察表.....9	第35表 II H 7号住居址出土遺物観察表.....71
第4表 I H25号住居址出土遺物観察表.....11	第36表 II H 9号住居址出土遺物観察表.....74
第5表 I H30号住居址出土遺物観察表.....12	第37表 II H10号住居址出土遺物観察表.....76
第6表 I H31号住居址出土遺物観察表.....13	第38表 II H12号住居址出土遺物観察表.....79
第7表 I H32号住居址出土遺物観察表.....15	第39表 II H15号住居址出土遺物観察表.....81
第8表 I H33号住居址出土遺物観察表.....16	第40表 II H17号住居址出土遺物観察表.....83
第9表 I H34号住居址出土遺物観察表.....17	第41表 II H20号住居址出土遺物観察表.....84
第10表 I H36号住居址出土遺物観察表.....19	第42表 II H24号住居址出土遺物観察表.....90
第11表 I H38号住居址出土遺物観察表.....20	第43表 II H27号住居址出土遺物観察表.....91
第12表 I H40号住居址出土遺物観察表.....22	第44表 II H28号住居址出土遺物観察表.....96
第13表 I H41号住居址出土遺物観察表.....25	第45表 II H31号住居址出土遺物観察表.....98
第14表 II H 1号住居址出土遺物観察表.....30	第46表 II H44号住居址出土遺物観察表.....100
第15表 II H 2号住居址出土遺物観察表.....32	第47表 IV H 1号住居址出土遺物観察表.....102
第16表 II H 3号住居址出土遺物観察表.....32	第48表 IV H 2号住居址出土遺物観察表.....104
第17表 II H 4号住居址出土遺物観察表.....36	第49表 IV H 3号住居址出土遺物観察表.....105
第18表 II H 5号住居址出土遺物観察表.....38	第50表 IV H 4号住居址出土遺物観察表.....107
第19表 II H 6号住居址出土遺物観察表.....39	第51表 I—Ⅷ区土坑出土遺物観察表.....149
第20表 II H 7号住居址出土遺物観察表.....41	第52表 II M 9号溝状遺構出土遺物観察表.....152
第21表 II H 8号住居址出土遺物観察表.....43	第53表 II H18号住居址出土遺物観察表.....155
第22表 II H 9号住居址出土遺物観察表.....44	第54表 II M 6号溝状遺構出土遺物観察表.....163
第23表 II H11号住居址出土遺物観察表.....46	第55表 II M31号溝状遺構出土遺物観察表.....165
第24表 II H12号住居址出土遺物観察表.....49	第56表 ビット出土遺物観察表.....168
第25表 II H13号住居址出土遺物観察表.....51	第57表 遺構外出土遺物観察表(反軸陶器).....176
第26表 II H14号住居址出土遺物観察表.....54	第58表 遺構外出土遺物観察表(須恵器①).....177
第27表 II H15号住居址出土遺物観察表.....56	第59表 遺構外出土遺物観察表(須恵器②).....178
第28表 II H17号住居址出土遺物観察表.....58	第60表 遺構外出土遺物観察表(須恵器③).....179
第29表 II H19号住居址出土遺物観察表.....60	第61表 遺構外出土遺物観察表(須恵器④).....180
第30表 II H20号住居址出土遺物観察表.....62	第62表 遺構外出土遺物観察表(須恵器⑤).....181
第31表 II H22号住居址出土遺物観察表.....65	第63表 遺構外出土遺物観察表(土師器).....182
第32表 II H23号住居址出土遺物観察表.....66	

写 真 図 版

図版1 ① I H10号住居址全景 ② I H10号住居址カマド検出状況	図版8 ① I H31号住居址全景 ② I H31号住居址掘り方全景
図版2 ① I H10号住居址カマド全景 ② I H10号住居址南東コーナー遺物出土状況	図版9 ① I H32号住居址全景 ② I H32号住居址掘り方全景
図版3 ① I H20号住居址全景 ② I 区北側調査風景	図版10 ① I H33号住居址全景 ② I H33号住居址掘り方全景
図版4 ① I H21号住居址全景 ② I H21号住居址掘り方全景	図版11 ① I H37号住居址全景 ② I H38号住居址全景
図版5 ① I H24号住居址全景 ② I H24号住居址掘り方全景	図版12 ① I H40号住居址全景 ② I H43号住居址全景
図版6 ① I H25号住居址全景 ② I H34号住居址全景	図版13 ① I H41号住居址全景 ② I H41号住居址掘り方全景
図版7 ① I H30号住居址全景 ② I H30号住居址掘り方全景	図版14 ① I H41号住居址カマド検出状況 ② I H41号住居址カマド全景

写真図版

- | | |
|---|--|
| <p>図版15 ①ⅡH1号住居址全景
②ⅡH1号住居址カマド掘り方全景</p> <p>図版16 ①ⅡH1号住居址南東コーナー土坑遺物出土状況
②ⅡH1号住居址南東コーナー土坑掘り方全景</p> <p>図版17 ①ⅡH2号住居址全景
②ⅡH3号住居址全景</p> <p>図版18 ①ⅡH5号住居址全景
②ⅡH7号住居址全景</p> <p>図版19 ①ⅡH4号住居址全景
②ⅡH4号住居址掘り方全景</p> <p>図版20 ①ⅡH6号住居址全景
②ⅡH6号住居址焼土検出状況</p> <p>図版21 ①ⅡH8号住居址全景
②ⅡH8号住居址カマド全景</p> <p>図版22 ①ⅡH11号住居址全景
②ⅡH区東側調査風景</p> <p>図版23 ①ⅡH12号住居址全景
②ⅡH12号住居址カマド及び遺物出土状況</p> <p>図版24 ①ⅡH12号住居址カマド検出状況
②ⅡH12号住居址カマド掘り方全景</p> <p>図版25 ①ⅡH13号住居址全景
②ⅡH13号住居址カマド全景</p> <p>図版26 ①ⅡH14号住居址全景
②ⅡH14号住居址遺物出土状況</p> <p>図版27 ①ⅡH14号住居址カマド全景
②ⅡH14号住居址カマド掘り方全景</p> <p>図版28 ①ⅡH15号住居址全景
②ⅡH15号住居址カマド全景</p> <p>図版29 ①ⅡH17号住居址全景
②ⅡH17号住居址遺物出土状況</p> <p>図版30 ①ⅡH17号住居址カマド全景
②ⅡH17号住居址カマド掘り方全景</p> <p>図版31 ①ⅡH19号住居址全景
②ⅡH20号住居址全景</p> <p>図版32 ①ⅡH22号住居址全景
②ⅡH22号住居址カマド全景</p> <p>図版33 ①ⅡH23号住居址全景
②ⅡH23号住居址遺物出土状況</p> <p>図版34 ①ⅡH24号住居址全景
②ⅡH6号住居址全景</p> <p>図版35 ①ⅡH7号住居址全景
②ⅡH7号住居址カマド掘り方全景</p> <p>図版36 ①ⅡH8号住居址全景
②ⅡH8号住居址カマド全景</p> <p>図版37 ①ⅡH9号住居址全景
②ⅡH9号住居址カマド全景</p> <p>図版38 ①ⅡH10号住居址全景
②ⅡH11号住居址全景</p> <p>図版39 ①ⅡH12号住居址全景
②ⅡH14号住居址全景</p> <p>図版40 ①ⅡH15号住居址全景
②ⅡH16号住居址全景</p> <p>図版41 ①ⅡH17号住居址全景
②ⅡH19号住居址全景</p> <p>図版42 ①ⅡH20号住居址全景
②ⅡH区調査風景
③ⅡH23号住居址全景</p> <p>図版43 ①ⅡH24号住居址全景
②ⅡH24号住居址カマド全景</p> <p>図版44 ①ⅡH27号住居址全景
②ⅡH27号住居址カマド掘り方全景</p> | <p>図版45 ①ⅡH28号住居址全景
②ⅡH28号住居址カマド検出状況</p> <p>図版46 ①ⅡH28号住居址カマド検出状況
②ⅡH28号住居址カマド掘り方全景</p> <p>図版47 ①ⅡH31号住居址全景
②ⅡH32号住居址全景</p> <p>図版48 ①ⅡH44号住居址全景
②ⅡH44号住居址遺物出土状況</p> <p>図版49 ①ⅡH1号住居址全景
②ⅡH1号住居址カマド掘り方全景</p> <p>図版50 ①ⅡH2号住居址全景
②ⅡH2号住居址カマド掘り方全景</p> <p>図版51 ①ⅡH3号住居址全景
②ⅡH3号住居址カマド掘り方全景</p> <p>図版52 ①ⅡH4号住居址全景
②ⅡH4号住居址内D2号土坑遺物出土状況</p> <p>図版53 ①ⅡH9号住居址全景
②ⅡH17号住居址全景</p> <p>図版54 ①ⅡF6号掘立柱建物址全景
②ⅡF3号掘立柱建物址全景</p> <p>図版55 ①ⅡF2号掘立柱建物址全景
②ⅡF3号掘立柱建物址全景</p> <p>図版56 ①ⅡF4号掘立柱建物址全景
②ⅡF5号掘立柱建物址全景</p> <p>図版57 ①ⅡF8号掘立柱建物址全景
②ⅡF9号掘立柱建物址全景</p> <p>図版58 ①ⅡF10号掘立柱建物址全景
②ⅡF12号掘立柱建物址全景</p> <p>図版59 ①ⅡI1号欄列全景
②ⅡI1号欄列全景</p> <p>図版60 ①ⅡI2号欄列全景
②ⅡH28号住居址調査風景</p> <p>図版61 ①ⅡD5号土坑 ③ⅡD19号土坑
②ⅡD8号土坑 ④ⅡD21号土坑
③ⅡD13号土坑 ⑤ⅡD22号土坑
④ⅡD14号土坑 ⑥ⅡD23号土坑</p> <p>図版62 ①ⅡD24号土坑 ⑦ⅡD7号土坑
②ⅡD25号土坑 ⑧ⅡD8号土坑
③ⅡD1号土坑 ⑨ⅡD9号土坑
④ⅡD2号土坑 ⑩ⅡD10号土坑</p> <p>図版63 ①ⅡD11号土坑 ⑪ⅡD20号土坑
②ⅡD12号土坑 ⑫ⅡD21号土坑
③ⅡD13号土坑 ⑬ⅡD28号土坑
④ⅡD16号土坑 ⑭ⅡD29号土坑</p> <p>図版64 ①ⅡD70号土坑 ⑮ⅡD116号土坑
②ⅡD73号土坑 ⑯ⅡD121号土坑
③ⅡD84号土坑 ⑰ⅡD12号土坑
④ⅡD85号土坑 ⑱ⅡD25号土坑</p> <p>図版65 ①ⅡD31号土坑 ⑲ⅡD45号土坑
②ⅡD32号土坑 ⑳ⅡD49号土坑
③ⅡD33号土坑 ㉑ⅡD51号土坑
④ⅡD43号土坑 ㉒ⅡD54号土坑</p> <p>図版66 ①ⅡD64号土坑 ㉓ⅡD81号土坑
②ⅡD66号土坑 ㉔ⅡD82・83号土坑
③ⅡD67・68号土坑 ㉕ⅡD84号土坑
④ⅡD75号土坑 ㉖ⅡD88号土坑
⑤ⅡD1号土坑 ㉗ⅡD37号土坑
⑥ⅡD3号土坑 ㉘ⅡD38号土坑
⑦ⅡD5号土坑 ㉙ⅡD41号土坑</p> |
|---|--|

写真図版

- 図版68 ①方形区画溝 ⅡM9号溝状遺構全景
②Ⅱ区調査地点
- 図版69 ①土溝墓 ⅡD24号土坑
②土溝墓 ⅡD24号土坑人骨出土状態
- 図版70 ①小鍛冶遺構 ⅡH18号全景
②小鍛冶遺構 ⅡH18号炉全景
- 図版71 ①小鍛冶遺構 ⅡH18号羽口出土状況(南より)
②小鍛冶遺構 ⅡH18号羽口出土状況(北より)
- 図版72 ①ⅡM5号溝状遺構全景
②ⅡM4号溝状遺構全景
③Ⅱ区調査地点全景
- 図版73 ①ⅡM11号溝状遺構全景
②ⅡM12号溝状遺構全景
- 図版74 ①ⅡM31号溝状遺構全景
②ⅡM1号溝状遺構全景
- 図版75 ⅡH10・21・24号住居址出土遺物
- 図版76 ⅡH24・25・30・31号住居址出土遺物
- 図版77 ⅡH32・33・34・36・38・40・41号住居址出土遺物
- 図版78 ⅡH41号住居址出土遺物
- 図版79 ⅡH41、ⅡH1・2・3号住居址出土遺物
- 図版80 ⅡH3・4・5・6号住居址出土遺物
- 図版81 ⅡH5・7・8・9・11・12号住居址出土遺物
- 図版82 ⅡH12・13・14号住居址出土遺物
- 図版83 ⅡH14・15・17・19・20号住居址出土遺物
- 図版84 ⅡH20・22号住居址出土遺物
- 図版85 ⅡH22・23・24、ⅡH6・7・9号住居址出土遺物
- 図版86 ⅡH10・11・12・15・17・20・23号住居址出土遺物
- 図版87 ⅡH24・27・28号住居址出土遺物
- 図版88 ⅡH28号住居址出土遺物
- 図版89 ⅡH28・31・32・44、ⅡH1・2・3・4号住居址、ⅡD10・85、ⅡD33号土坑出土遺物
- 図版90 ⅡD11・28、ⅡD54号土坑、ⅡM9号溝状遺構出土遺物
- 図版91 ⅡM9・31、ⅡM6号溝状遺構、ピット出土遺物
- 図版92 ⅡH18号住居址(小鍛冶遺構)出土遺物
- 図版93 遺構外出土遺物①
- 図版94 遺構外出土遺物②
- 図版95 遺構外出土遺物③
- 図版96 遺構外出土遺物④
- 図版97 ⅡH36、ⅡH12・13・14・17、ⅡH24号住居址出土遺物(石製品)
- 図版98 ⅡH4、ⅡH28、ⅡH9号住居址、遺構外出土遺物(石製品)
- 図版99 ⅡH40・41、ⅡH3・4・14・20、ⅡH24・28号住居址、ピット出土遺物(鉄製品)

第Ⅰ章 榛名平遺跡における奈良・平安時代の概要

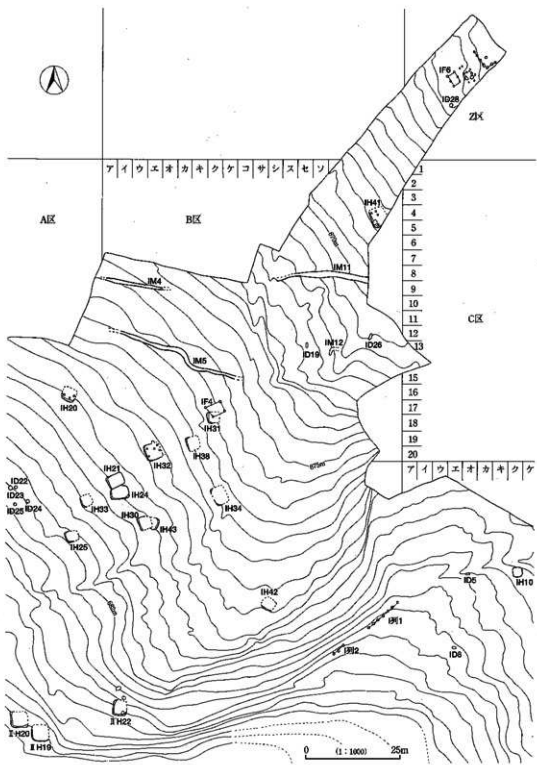
第1節 概要

榛名平遺跡における奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居址63軒・掘立柱建物址12棟・土坑60基・溝状遺構10本・特殊遺構として方形区西溝・小鍛冶遺構・土墳墓等が検出された。これらの遺構は調査区が傾斜地ということもあり、いずれも傾斜の低い方の住居址の壁が検出されず「コ」の字状を呈する住居址がほとんどであった。また、中にはⅢH28号住居址の様に本来の地形から類推しても傾斜谷部側の壁の存在は疑わしく、急傾斜地における竪穴住居構造の再考を考えさせる遺構も存在した。遺構の分布は主に調査区北側の北斜面であるB・F区、調査区中央部の南斜面であるI区、調査区上段部東斜面のL・M区の3地域にまとまって検出されている。分布の特徴としてはL・M区では竪穴住居址とともに掘立柱建物址が多く検出され、庇を持つ総柱式掘立柱建物址も検出された。これら掘立柱建物址の帰属時期は不明な物が多かったが、規則性のある配置からはほぼ同一時期の遺構と考えられた。

当遺跡における遺構の帰属時期は各遺構より出土した遺物を他遺跡の土器編年を援用して決定した。なお当遺跡の土器編年については第Ⅲ章について考察している。土器より導き出された年代は9世紀初頭から10世紀末の約200年間が当てられた。よって榛名平遺跡の住居址はほぼ平安時代に比定されよう。また、年代ごとの遺構の分布は3地域で偏りが見られ、調査区中央部の竪穴住居址群は9世紀中葉を主体とし、北部低地と上部台地は10世紀中葉を主体とする遺構が多かったことから、遺跡内での集落拡散が行われたような状態であった。また、調査区中央部の9世紀代の集落があった場所には新たに方形の区西溝と小鍛冶遺構が出現する。この方形区西溝の性格は確証を得られなかったが北佐久郡御代田町川原田遺跡の方形区西溝とも似ており、集落内のお堂の建物或いは松本市吉田川西遺跡と同じような富豪農民層の屋敷跡等の可能性が考えられる。

出土遺物としてはⅢH12号住居址覆土から「奈良三彩蓋」の破片が出土している。小片であるために全容を把握できなかったが、三彩蓋に多い小型品ではなく径18cm近い大型の蓋であることが解り、新潟県和島村八幡林官衙遺跡の出土例を参考とし推定復元図を記載した。また、グリット一括遺物であるが、須恵器蓋の内面刻書として「大井」が1点出土している。この刻書は焼成後のものであった。また、この須恵器蓋の掴み部は特異な形態を示し佐久平周辺では出土例の無いものであった。今日「大井」の刻書・墨書は佐久地域において地域を問わず出土する傾向があり、大井郷との比定地問題も含め検討を必要としていると思われる。

以上、榛名平遺跡における奈良・平安時代の遺構・遺物の概要であり、以下各遺構・遺物について竪穴住居址より述べる。



第1図 I区奈良・平安時代遺構全体図

第Ⅱ章 遺構と遺物

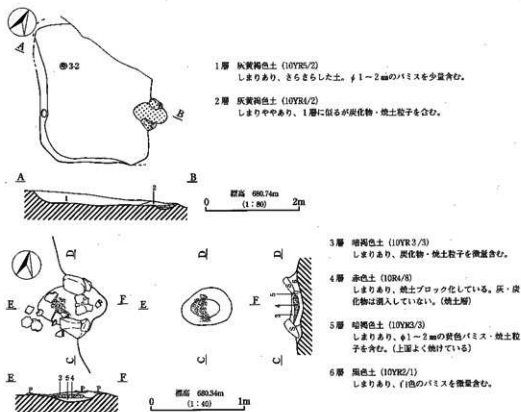
第1節 竪穴住居址

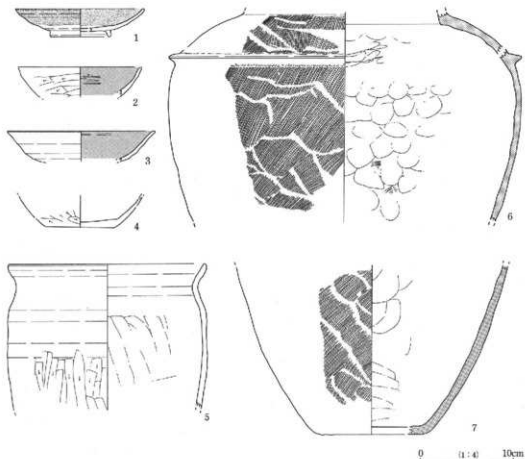
(1) IH10号住居址 (第2・3図、写真図版一・二)

本住居址は、調査区東よりの台地の先端部であるG-ク-8Grに位置する。残存状態は北側が後世の畑地境溝によって1/3程が削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられ、東壁にカマドが造られている。規模は北壁0.7m(残存)、推定では2.4m・南壁2.05m(検出部分)で、壁高さは北西コーナーよりで21cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-58°-Eを示す。住居址の床面積は検出部で5.1m²を測る。覆土は2層に分かれる。床は住居址カマド周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず、地山を敲いて踏み固めた様な状態であった。壁溝・柱穴は確認されなかった。

カマドは東壁やや南よりに検出された。主軸方位はN-72°-Eを測り、住居址主軸よりも南側にずれる。規模は煙道部から火床面までの長さ73cm・幅40cmで、右袖が長さ32cm・幅19cm、左袖





第3図 I110号住居址出土遺物実測図

神田 番号	器種	法 量(cm)			成形・調整 外面・内面	色 調 胎 土
		口径	器高	底径		
1	灰 碗 皿	(13.6)	3.0	(6.4)	外面 ロクロ成形 回転糸の後、高台削付 施釉は面手掛け 内面 ロクロ成形 内面よく磨かれている 輪花あり	7.5Y8/1 灰白 黒色粒子を微量含む
2	土師器 杯	(13.0)	(3.2)	---	外面 内面 ロ線部ヨコナデ後、体部ヘラケズリ ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6 橙 径1~2mmの砂粒多く含みざらついている
3	土師器 杯	(15.6)	(3.3)	---	外面 内面 ロクロ成形 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6 橙 径1mmの赤色粒子を多く含み砂粒を含む
4	土師器 盃	---	(3.3)	7.4	外面 内面 ヘラケズリ・底部手持ちヘラケズリ ナデ	5YR5/4 に近い赤褐 径1mm程度の赤色粒子を含み、砂粒を含む
5	土師器 盃	(21.0)	(15.4)	---	外面 内面 ロクロ成形後、胴下平ナデorケズリ ロクロ成形後、胴部ナデ	5YR7/8 橙 赤色粒子を微量含み、砂粒を含む
6	灰赤器 四耳壺	---	(22.8)	---	外面 内面 タタキエ後、膝帯足付 当て具磨残る 頸部ヨコナデ	N4/灰 黒色粒子を少量含む
7	灰赤器 盃	---	(17.0)	12.0	外面 内面 タタキエ 当て具磨残る 胴下平ナデ 6と同一個体の可能性	N4/灰 白色粒子を多く含む

第1表 I110号住居址出土遺物観察表

が長さ30cm・幅19cmをそれぞれ測る。形態は煙道部が住居址壁ラインよりも外に飛び出す形で、煙道は緩やかに立ち上がる。袖は両袖ともに自然石を使用していた。火床面はよく焼けており、焼土は硬質化しており厚さ5cmの堆積が確認された。

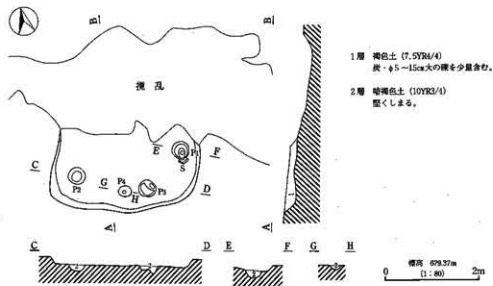
出土遺物は覆土中と床直のものがあるが、特に南東コーナー部分から集中して出土した。この南東コーナー部分にはカマドに使用されたような礫に混じって図示した須恵器四耳蓋などが破砕した状態で検出された。図示した遺物の出土位置はそれぞれ3～6が南東コーナー部分、1が覆土中、2は北よりの床直、7がカマド火床面より出土した。よって本址は9世紀後半に位置づけられる。

(2) IH20号住居址 (第4図、写真図版三①)

本住居址は、調査区西よりA-ツ-6Grに位置する。残存状態は北側が攪乱を受けており、住居址の半分程が検出されたに止まった。

形態は、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は東壁1.18m(残存)・西壁1.4m(残存)・南壁2.94mで、壁高さは北壁中央で27cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。主軸方位N-13°-Eを示す。住居址の床面積は検出部で4.26㎡を測る。覆土は単層で、床は住居址中央部にかけて硬質であり、地山を敲いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は4カ所確認され、規模はP1が径35cm・深さ28cm、P2が径36cm・深さ14cm、P3が径37cm・深さ18cm、P4が径29cm・深さ10cmをそれぞれ測る。カマドは北壁に付くのか確認されなかった。

出土遺物は覆土中よりいわゆる武蔵壺片が少量出土したのみであり、時期不明である。



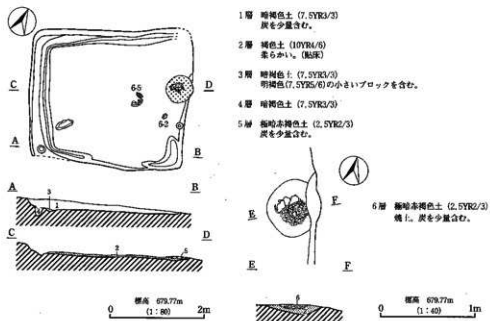
第4図 IH20号住居址実測図

(3) IH21号住居址 (第5・6図、写真図版四)

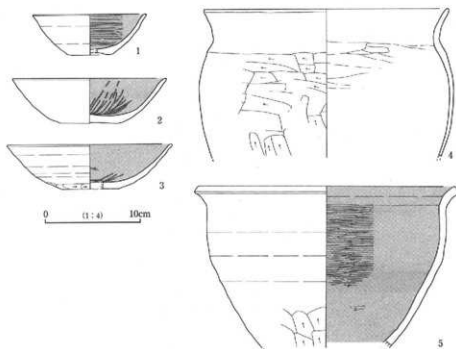
本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるF-ア-1・2、F-イ-1・2Grに位置する。残存状態は東側と南側が地形の傾斜のため壁が削平されている他は良好であった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁2.94m(残存)、3.24m(推定)・南壁1.94m(残存)3.13m(推定)・西壁2.6m・東壁2.02m(残存)2.87m(推定)で、壁高さは北西コーナーよりで21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-24°-Wを示す。住居址の床面積は推定で6.8㎡を測る。覆土は3層に分かれる。床は住居址カマド周辺部のみ硬質であり、貼り床は全体に施されていたが軟弱であった。壁溝は北壁と西壁の全部と南壁の一部に検出された。断面形はU字形で、幅は12~30cm・深さ9.5cmを測る。ピットは2カ所確認され、規模はP1が径16cm・深さ20cm、P2が径15cm・深さ8cmを測る。これらピットは検出位置より壁柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

出土遺物は覆土中のものがほとんどで土師器甕・環類であった。図示した遺物の出土位置は1が覆土、2と4がカマド火床面、3と5がカマド前床直である。1~3は土師器環でいずれもロクロ成形で内面には黒色処理がされている。2のみ底部が回転糸切り離しの後無調整である。4は土師器甕で頸部の顕著な「コ」の字はすでに退化した形態のものである。5は土師器鉢で、口縁部を伏せた状態で出土した。調整は胴部がロクロ成形で、胴部下半分がヘラケズリが行われ、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。また外面には顕著なタール状の付着物が確認された。これら遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。



第5図 IH21号住居址実測図



第6図 I H21号住居址出土遺物実測図

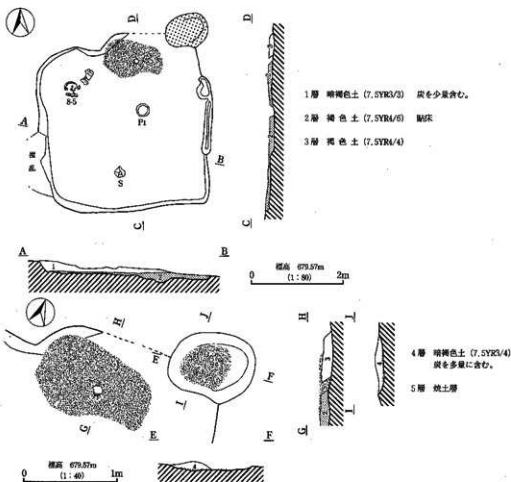
検出 番号	器種	法 量 (cm)			成形・調整	色 調
		口径	器高	底径		
1	土師器 杯	(12.0)	4.3	(4.0)	外面	7.5YR 6/4 に近い橙
					内面	ロクロ成形・底部切り履し後、手持ちヘラケズリ ヘラミガキ・黒色処理 煤付着 灰1～2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
2	土師器 杯	(16.3)	4.8	6.0	外面	7.5YR 6/4 に近い橙
					内面	ロクロ成形・底部回転未切り ヘラミガキ・黒色処理 灰2～3mmの赤色粒子多量と砂粒を含む
3	土師器 杯	(17.4)	4.7	(6.0)	外面	5YR 6/6 橙
					内面	灰2～3mmの赤色粒子多量と白色粒子を含む
4	土師器 甕	(28.0)	(15.8)	---	外面	7.5YR 8/4 浅黄橙
					内面	口縁部ヨコナデ後、胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ後、胴部ナデ 灰2～3mmの赤色粒子を含み、砂粒を含む
5	土師器 鉢	(28.0)	(17.1)	---	外面	7.5YR 6/6 橙
					内面	ロクロ成形 胴部下手ヘラケズリ ※タール付着 ロクロ成形 胴部ヘラミガキ・黒色処理 灰1～2mmの赤色粒子と白色砂粒多量を含む

第2表 I H21号住居址出土遺物観察表

(4) IH24号住居址 (第7・8図、写真図版五)

本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるF-ア-2.3.F-イ-2.3Grに位置する。残存状態は西壁の一部が攪乱により削平されている他は良好であった。また、本址はH21号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁北東コーナーに造られている。規模は北壁1.76m(残存)、3.25m(推定)・南壁3.17m・西壁3.1m・東壁2.67m(残存)3.56m(推定)で、壁高さは西壁中央



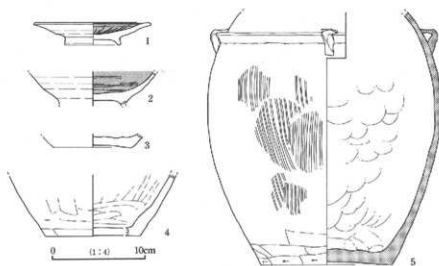
第7図 I H24号住居址実測図

で21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は $N-4^{\circ}-W$ を示す。住居址の床面積は11.0 m^2 を測る。覆土は1層のみである。貼り床は全体に施されていたが軟弱であった。壁溝は東壁に一部確認された。ピットは1カ所のみで、規模はP1が径27cm・深さ8cmを測る。

カマドは北東コーナーに検出されたがH21号住居址と同じく火床面のみ残存していた。焼土の厚さは1.5cmを測る。また、本址は北壁際中央部に床が焼けたような焼土が広がっている部分が確認された。

出土遺物は住居址覆土中の物が多かった。図示した遺物の出土位置は1と4が焼土内、2と3が覆土中、5が北西コーナー床直である。1、2は土師器環で内面は黒色処理されている。5は須恵器四耳壺であり、まとめて出土したが口縁部から頸部までの破片は覆土内になかった。

本址はこれらの遺物より10世紀前半に位置づけられる。



第8図 I H24号住居址出土遺物実測図

検出 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面	内 面	胎 土
1	土師器 皿	(12.4)	2.4	5.9	外面 内面	ロクロ成形 底部切り離し後、高台貼付 増文・黒色処理	7.5YR7/4 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
2	土師器 碗	---	(3.6)	---	外面 内面	ロクロ成形 底部切り離し後、高台貼付 (切り離し方不明) ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 に近い橙 径2~3mmの赤色粒子と砂粒を多く含む、白色粒子少量含む
3	土師器 小形甕	---	(1.5)	(8.2)	外面 内面	ロクロ成形 底部回転車切り ロクロ成形	5YR6/4 に近い橙(内面) 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
4	土師器 甕	---	(6.5)	(10.0)	外面 内面	ハケ目の残るナデ 底部および外周手持 ちヘラケズリ ナデ	5YR6/6 橙(内面) 径2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
5	須恵器 四耳壺	---	(26.9)	10.8	外面 内面	ナデ後タタキ 底部外周ヘラケズリ 陸帯貼付後、耳貼付 当て具痕あり ナデ(胎前痕残る)	7.5Y6/2 灰オリーブ 径1mmの黒色粒子微量、白色粒子多量含む

第3表 I H24号住居址出土遺物観察表

(5) I H25号住居址 (第9・10図、写真図版六①)

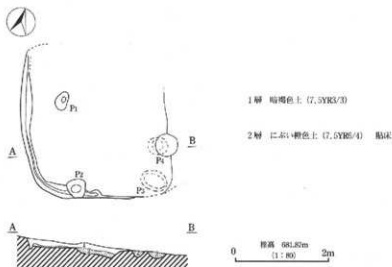
本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるE-ツ-5・6、E-テ-5・6Grに位置する。残存状態は北壁と東壁が地形の傾斜のため削平されていた。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明であるが東壁のほぼ中央にわずかに焼土部分が検出され、この焼土を火床面と考えると東カマドとなる。規模は南壁2.1m(残存)2.85m(推定)・西壁1.83m(残存)2.92m(推定)・東壁3.16m(推定)で、壁高さは北西コーナーよりで21cmを測る。

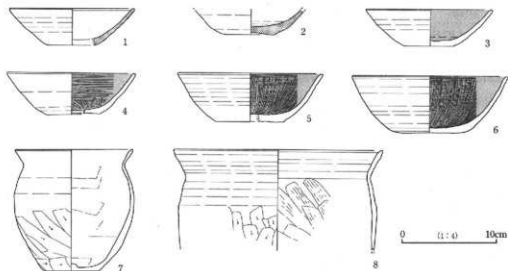
壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-18°-Wを示す。住居址の床面積は推定で9.1㎡を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であり、貼り床は厚さ10cm程で施されていた。壁溝は西壁と南壁の一部に検出された。断面形はV字形で、幅は12~27cm・深さ4cmを測る。ピットは床面精査時に2カ所、掘り方検出時に2カ所の計4カ所が確認された。規模はP1が径40cm・深さ16cm、

P2が径40cm・深さ16cm、P3が径56cm・深さ17.5cm、P4が径43cm・深さ15cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

出土遺物はほとんどが床下から出土した。図示した遺物の出土位置も2が覆土の他はいずれも床下からの出土である。1と2は須恵器環で、3～6は土師器環で内面は丁寧なミガキの後黒色処理がされている。7は土師器小型甕、8は土師器ロクロ甕で胴部から底部を欠損している。本址はこれら遺物より9世紀後半に位置づけられる。



第9図 I H25号住居址実測図



第10図 I H25号住居址出土遺物実測図

種別 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調	
		口径	器高	底径	外 面・内 面		胎 土	
1	須恵器 環	(13.2)	3.9	(5.0)	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形	なま焼的	7.5Y6/1 灰 径1mmの黒色粒子と砂粒を含む
2	須恵器 環	---	(2.7)	5.0	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形	底部回転糸切り	7.5Y6/2 灰オリーブ 径1mmの黒色粒子と白色粒子を多く含む
3	土師器 環	(13.4)	3.9	5.0	外面 内面	ロクロ成形 黒色処理	底部回転糸切り	7.5YR6/6 橙 径1mmの赤色粒子、径2-3mmの小石を多く含む
4	土師器 環	13.6	4.5	5.6	外面 内面	ロクロ成形・ ヘラミガキ・黒色処理	底部回転糸切り	7.5YR8/4 浅黄緑 径1-2mmの赤色粒子と白色粒子を含む
5	土師器 環	15.4	5.1	(7.4)	外面 内面	ロクロ成形・ ヘラミガキ・黒色処理	底部回転糸切り	7.5YR7/4 にぶい橙 径1mmの赤色粒子を多く含み、砂粒を含む
6	土師器 環	(16.6)	6.0	7.6	外面 内面	ロクロ成形・ ヘラミガキ・黒色処理	底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1mm以下の赤色粒子少量と、白色粒子を多量に含む
7	土師器 小形環	(12.5)	12.9	5.7	外面 内面	口縁部~胴部ロクロ成形 胴部下半~底部ヘラケズリ	口縁部ロクロ成形 胴部~底部ヘラナゲ	7.5YR6/4 にぶい橙 径1-2mmの赤色粒子と、砂粒を多量含む
8	土師器 甕	(22.2)	(10.6)	---	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形	胴下半ヘラケズリ 胴部ナゲ	5YR5/6 明赤褐 径1-2mmの赤色粒子と、白色粒子を多く含む

第4表 I H25号住居址出土遺物観察表

(6) I H30号住居址 (第11・12図、写真図版七)

本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるF-ウ-4・5、F-エ-4・5Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁1.34m(残存)、3.5m(推定)・南壁0.93m(残存)3.34m(推定)・西壁3.3m・東壁3.3m(推定)で、壁高さは西壁中央で16cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-21°-Wを示す。住居址の床面積は推定で12.1㎡を測る。覆土は4層に分かれる。床は地山を踏み固めたような土でやや軟質であった。壁溝は掘り方時に北壁側から間仕切り溝的に検出された。断面形はU字形で、幅は約20cm・深さ約4cmを測る。ピットは3カ所確認され、規模はP1が径44cm・深さ14.5cm、P2が径30cm・深さ25cm、P3が径27cm・深さ12cmを測る。

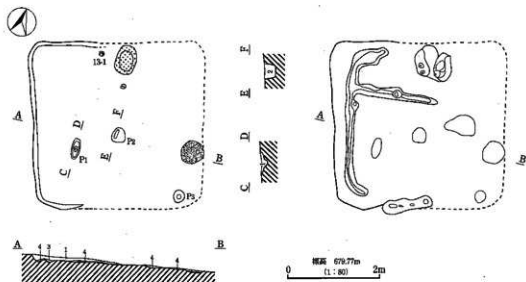
カマドは北壁中央にあったが、火床面のみしか残存していなかった。焼土の厚みは2cmで、掘り込み部の長さは長軸62cm・短軸45cmを測る。

出土遺物は覆土中のものがほとんどで土師器甕・環類であった。図示した遺物の出土位置は1

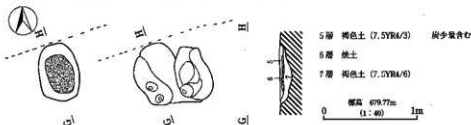


第11図 I H30号住居址出土遺物実測図

がカマド北側、2がカマド火床面である。以上の遺物などにより本址は9世紀後半~10世紀前半に位置づけられる。



- 1層 褐色土 (7.5YR4/3)
- 2層 褐色土 (7.5YR4/3) におい黄褐色(10YR5/4)をブロック状に含む。
- 3層 褐色土 (7.5YR4/4) オリーブ褐色(2.5YR4/6)をブロック状に含む。
- 4層 褐色土 (7.5YR4/4) オリーブ褐色(2.5YR4/6)をブロック状に含む。



第12図 IH30号住居址実測図

神図 番号	部種	法量(cm)			成形・調整		色調
		口径	器高	底径	外面	内面	胎土
1	土師器 碗	—	(2.4)	7.1	外面 内面	ロクロ成形・面厚部転糸切り後、高台貼付 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/4 におい赤褐色
							径1~2mmの赤色、白色粒子を多く含む
2	須恵器 短頸甕	(15.4)	(3.8)	—	外面 内面	ロクロ成形 表面赤化 ロクロ成形	5YR3/1 黒褐色
							径1~2mmの黒色粒子を含む

第5表 IH30号住居址出土遺物観察表

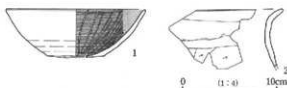
(7) IH31号住居址 (第13・14図、写真図版八)

本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるB-クー17・18Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。重複関係

はIF4号掘立柱建物址と重複し本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明であるが東壁のほぼ中央にわずかに焼土部分が検出され、この焼土を火床面と考えたと東カマドとなる。規模は北壁1.35m(残存)3.00m(推定)・南壁2.1m(残存)2.90m(推定)・西壁2.46m・東壁2.58m(推定)で、壁高さは西壁中央で16cmを測る。

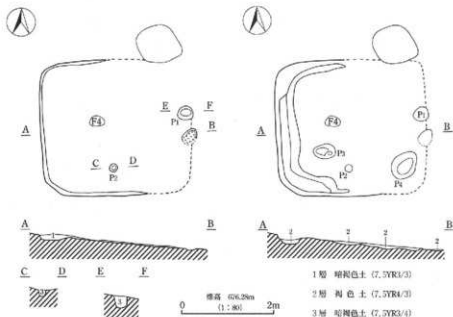
壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-1°-Wを示す。住居址の床面積は推定で8.4㎡(推定)を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは床面精査時に2カ所、掘り方検出時に2カ所の計4カ所が確認された。規模はP1が径32cm・深さ31.5cm、P2が径17cm・深さ21.5cm、P3が径47cm・深さ13.5cm、P4が径65cm・深さ10.5cmを測る。住



第13図 I H31号住居址出土遺物実測図

居址の掘り方は西壁際のみ壁溝状に一段深く掘り窪められていた。

出土遺物のうちで図示した2点はいずれも覆土中の出土である。本址はこれら遺物より9世紀後半に位置づけられる。



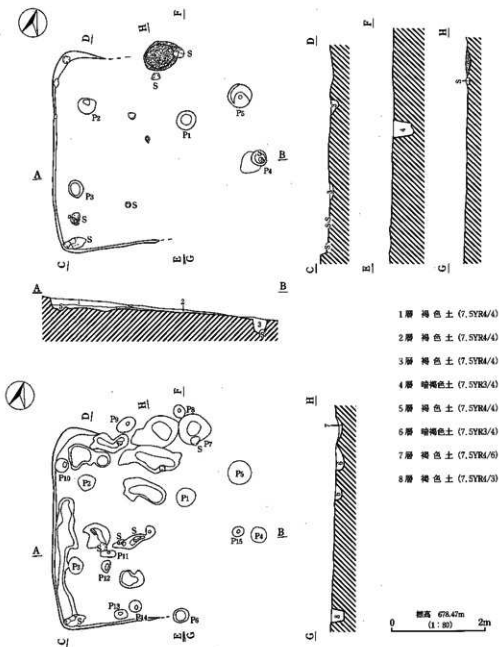
第14図 I H31号住居址実測図

図号 番号	器種	法 量 (cm)			成形・調整 外面・内面	色 調 胎 土
		口径	器高	底径		
1	土師器 坪	(14.8)	5.1	(6.2)	外面	5YR6/4 に近い橙
					内面	径1mmの赤色粒子少量、黒色粒子微量含む
2	土師器 甕	---	(6.0)	---	外面	5YR6/6 橙
					内面	径1-2mmの赤色粒子と砂粒を含む

第6表 I H31号住居址出土遺物観察表

(8) I H32号住居址 (第15・16図、写真図版九)

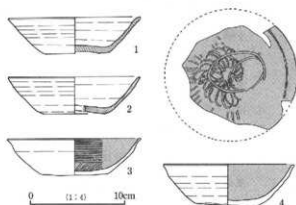
本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるB-ウ-20, B-エ-19・20, B-オ-20, F-エ-1 Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平され、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。



第15図 I H32号住居址実測図

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に検出された。規模は北壁0.94m(残存)4.10m(推定)・南壁2.02m(残存)4.00m(推定)・西壁4.10mで、壁高さは西壁で18.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-18°-Wを示す。住居地の床面積は推定で17.8㎡を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であった。壁溝は確認されていない。ピットは床面精査時に5カ所、掘り方検出時に10カ所の計15カ所が確認された。規模はP1が径40cm・深さ41cm、P2が径37cm・深さ18.5cm、P3が径37cm・深さ9cm、P4が径33cm・深さ32cm、P5が径50cm・深さ23cmを測る。P2～P5はその検出位置より主柱穴と考えられる。住居地の掘り方はほぼ均一な深さであったが、西壁と北壁の一部に間仕切りの掘り込みが検出された。掘り方時に検出されたピットはP6～15までであり、規模は径22～32cm・深さ13～25cmを測る。壁際検出のピットは柱の補助穴とも考えられる。またP6に関しては検出場所より住居地の入り口施設に関連する穴と考えられる。

カマドは北壁中央部より検出されたが天井や袖部は既に削平され火床部のみ残存していた。焼土の厚さは6cmを測る。焼土は硬質化しており使用頻度の高さを感じさせた。



第16図 I H32号住居址出土遺物実測図

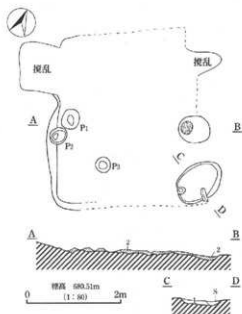
出土遺物はほとんどが西壁際から落ち込んだ様な状態で出土した。図示した遺物の出土位置は1が南東コーナー、2が覆土、4が西壁際中央、3が北東コーナー付近床直である。1、2は須恵器環、3、4は土師器環で、4は内面に暗文風のミガキが施されている。本址はこれら遺物より9世紀前半に位置づけられる。

検出番号	器種	法量(cm)			成形・調整		色調	
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土		
1	須恵器環	14.0	3.9	6.7	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 火だすき 痕あり 内面 ロクロ成形	2.5GY6/1 オリブ灰 白色砂粒を非常に多く含む		
2	須恵器環	(14.0)	3.9	(6.4)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	2.5GY6/1 オリブ灰 白色砂粒を多く含む		
3	土師器環	(14.2)	3.9	(6.8)	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR7/4 にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む		
4	土師器環	(16.9)	4.5	6.7	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面 螺旋状の暗文・黒色処理	5YR7/4 にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む		

第7表 I H32号住居址出土遺物観察表

(9) IH33号住居址 (第17・18図、写真図版十)

本住居址は、調査区北側よりの白地の先端部である E-ター 3・4、E-ター 3Gr に位置する。残存状態は北壁と東壁が地形の傾斜のため北側部分が攪乱によって、東側部分が地形によって削平されていたため、住居址の半分程しか検出できなかった。



- 1層 褐色土 (7.5YR4/3)
- 2層 褐色土 (7.5YR4/4) 粘床

第17図 IH33号住居址実測図



第18図 IH33号住居址出土遺物実測図

出土遺物はほとんどなく、図示した遺物の他には土師器甕片が少量あるのみである。1の出土位置も覆土中である。本址はこれら遺物より9世紀後半に位置づけられる。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明であるが東壁のほぼ中央にわずかに焼上部分が検出され、この焼上を火床面と考えると東カマドとなる。規模は北壁0.34m (残存)2.60m (推定)・南壁0.53m (残存)3.20m (推定)・西壁3.50mで、壁高さは南西コーナー付近で6cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。西壁を基にすると主軸方位はN-20°-Wを示す。住居址の床面積は推定で10.3㎡を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であり、貼り床は厚さ10cm程で施されていた。壁溝は確認されなかった。ピットは3カ所が確認された。規模はP1が径43cm・深さ18cm、P2が径40cm・深さ25cm、P3が径33cm・深さ8.5cmを測る。

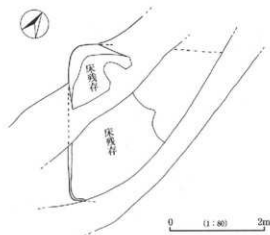
住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。また本址は南東コーナー脇に貯蔵穴的な土坑が確認された。形態は楕円形で規模は長軸1m・深さ13cmを測る。

カマドは東壁の中央に一部火床面のみ残存していた。焼土の厚さは6cmを測り、火床面下部の地山までよく焼けていた。

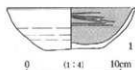
検出番号	器種	法量(m)			成形・調整	色別
		口径	器高	底径		
1	土師器 鉢	12.4	4.9	6.0	外面	2.5YR5/6 明赤褐 径1~2mmの赤色粒・多量と砂粒を含む
					内面	

第8表 IH33号住居址出土遺物観察表

(10) I H34号住居址 (第19・20図、写真図版六②)



第19図 I H34号住居址実測図



第20図 I H34号住居址出土遺物実測図

本住居址は、調査区北側よりの台地の中央部であるF-クー3Grに位置する。残存状態は北壁と東壁・西壁が地形の傾斜のため削平され、中央には溝状遺構が重複しており不良である。重複関係はIM6号・M8号溝状遺構より本址のほうが古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁1.06m(残存)・南壁0.24m(残存)・西壁3.17m(推定)で、壁高さは北西コーナーで27cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-34°-Wを示す。住居址の床面積は推定で3.5㎡を測る。覆土は1層で、床はやや軟質で、壁溝・ピットは確認されなかった。

出土遺物はほとんどが覆土からで、図示した遺物も覆土中からである。本址はこれら遺物より9世紀後半に位置づけられると考える。

採回番号	器種	法量(cm)			成形・調整 外面・内面	色調 胎土
		口径	器高	底径		
1	土師器 環	(11.7)	4.5	6.2	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面 ヘラケズリ後、黒色処理	2.5YR6/6 橙 径2-3mmの赤色粒子を多く含む

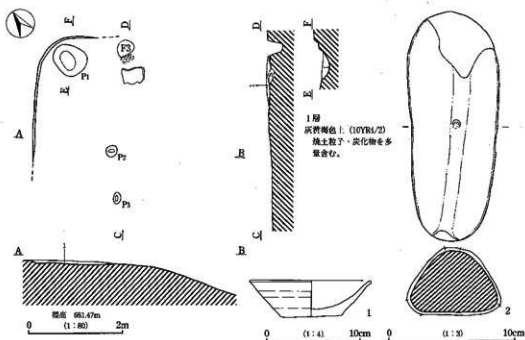
第9表 I H34号住居址出土遺物観察表

(11) I H36号住居址 (第21図)

本住居址は、調査区南側の低地であるJ-サー19、J-シー19・20Grに位置する。残存状態は北西コーナー部が一部残存するのみで非常に不良である。

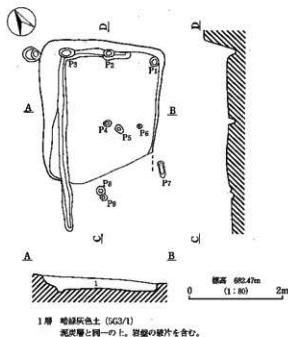
形態は不明である。規模は北壁1.14m(残存)・西壁2.25m(残存)で、壁高さは北西コーナーよりで9cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位・住居址の床面積は計測不能である。覆土は1層で、床はやや硬質である。壁溝は検出されていない。ピットは3カ所が確認された。規模はいずれも径24~72cm・深さ10~21cmを測る。

出土遺物はほとんどが覆土中からで、1の土師器環と2のすり石を図示した。2は重量84gで花崗岩であった。本址はこれら遺物より不確実ではあるが10世紀以降と考えられる。



第21図 I H36号住居址及び出土遺物実測図

(12) I H37号住居址 (第22図、写真図版十一①)



第22図 I H37号住居址実測図

本住居址は、調査区南側の低地内であるJ-サー18Grに位置する。残存状態は東壁と西壁の一部と南壁全部を地形の傾斜のため削平されていた。

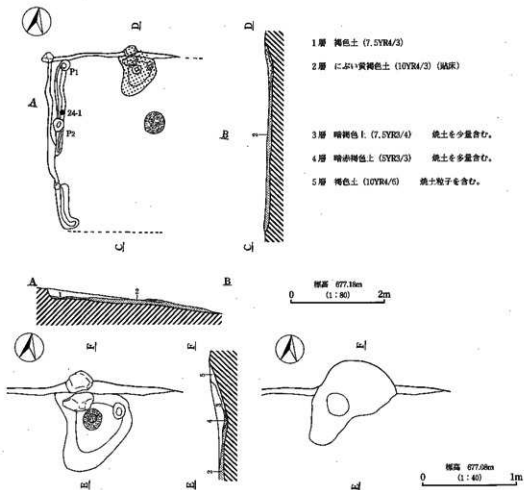
形態はほぼ長方形を呈する。規模は北壁2.50m・南壁0.3m(残存)2.2m(推定)・西壁2.78m(残存)・東壁2.2m(残存)2.7m(推定)で、壁高さは北壁で50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-30°-Eを示す。住居址の床面積は推定で4.58㎡を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は西壁と北壁の一部に検出された。断面形はU字形で、幅は15~54cm・深さ8cmを測る。ピットは9カ所が確認さ

れた。規模はP1が径20cm・深さ12cm、P2が径20cm・深さ13.5cm、P3が径33cm・深さ36cm、P4が径14cm・深さ14cm、P5が径18cm・深さ9cm、P6が径10cm・深さ21cm、P7が径36cm・深さ13cm、P8が径18cm・深さ9.5cm、P9が径14cm・深さ10cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。カマドは不明である。

出土遺物はほとんどが覆土から出土したが図示できる物はなかった。よって遺構の帰属時期は不明である。

標図 番号	部種	法量(cm)			成形・調整 外面・内面	色調 胎土
		口径	器高	底径		
1	土師器 環	(12.8)	3.9	6.2	外面 内面 ロクロ成形・底部回転糸切り ナデ	5YR 8/2 灰白 係1-2mmの赤色粒子混入と砂粒を含む

第10図 I H36号住居址出土遺物観察表



第23図 I H38号住居址実測図

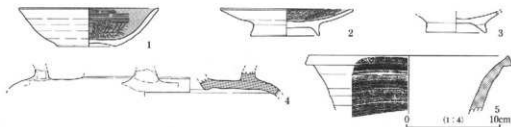
(13) I H38号住居址 (第23・24図、写真図版十一②)

本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるB-カー19・20、B-キー19・20Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁2.8m(残存)、3.54m(推定)・南壁0.28m(残存)2.96m(推定)・西壁3.63m・東壁3.58m(推定)で、壁高さは北西コーナーで14cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-13°-Wを示す。住居址の床面積は推定で11.28㎡を測る。覆土は2層に分かれる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に14cmの厚さで貼られていた。壁溝は西壁で部分的に検出された。断面形はU字形で、幅は約15~27cm・深さ15cmを測る。ピットは2カ所確認され、規模はP1が径22cm・深さ16.5cm、P2が径28cm・深さ11cmを測る。住居址掘り方は均一であった。

カマドは北壁中央にあったが、火床面のみしか残存していなかった。火床面の規模は長軸96cm・短軸70cmで焼土の厚みは3cmを測る。カマドの主軸方位はN-11°-Wを測る。

出土遺物は覆土中ものがほとんどであった。図示した遺物の出土位置は1と4がカマド内、3と5が覆土中、2がP2脇の床直からである。1は土師器杯で内面黒色処理が施されている。2は土師器皿で内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。4は須恵器の短頸壺と考えられ取っ手が貼付されている。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。



第24図 I H38号住居址出土遺物実測図

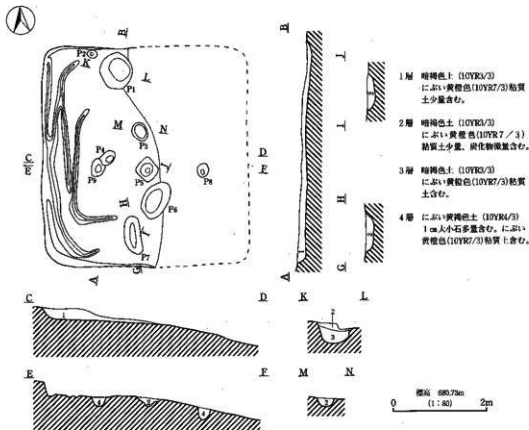
検出 番号	器種	法 量 (cm)			成形・調整	色 調
		口径	器高	底径		
1	土師器 杯	(14.8)	4.1	6.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 7/6 橙 径1~2mmの赤色粒子多量と砂粒を含む
2	土師器 皿	(14.0)	2.9	7.3	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 扇状のヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 7/6 橙 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を含む
3	土師器 碗	---	(2.3)	6.4	外面 ロクロ成形 底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ロクロ成形	7.5YR 8/3 浅黄橙 径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒を含む
4	須恵器 短頸壺	---	(2.7)	---	外面 ロクロ成形後、把手貼付 自然釉付着 内面 ロクロ成形	N 6/ 灰 黒色の噴出物が多い
5	須恵器 壺	(21.1)	(6.1)	---	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形 自然釉付着	N 3/ 暗灰 白色砂粒を含む

第11表 I H38号住居址出土遺物観察表

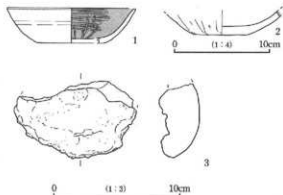
(14) I H40号住居址 (第25・26図、写真図版十二①)

本住居址は、調査区東側の台地の先端部であるK-シー3・4、K-スー3・4Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁1.9m(残存)4.12m(推定)・南壁2.22m(残存)4.12m(推定)・西壁4.40m・東壁4.36m(推定)で、壁高さは西壁中央で29cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-2°-Wを示す。住居址の床面積は残存で9.7㎡・推定で11.28㎡を測る。覆土は単層である。床は全体的に硬質であるが、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は西壁際に3本確認された。断面形はU字形で、幅は約8~26cm・深さ14cmを測る。壁溝としては特異な形態であるが、間仕切りのな使用は考えにくく、住居址拡張の結果の可能性が指摘できる。ピットは9カ所確認され、規模はP1が径76cm・深さ57cm、P2が径20cm・深さ14cm、P3が径40cm・深さ21cm、P4が径36cm・深さ29cm、P5が径44cm・深さ19cm、P6が径82cm・深さ22cm、P7が径83cm・深さ18cm、P8が径27cm・深さ28cm、P9が径37cm・深さ20cmを測る。住居址掘り方は均一であった。



第25図 I H40号住居址実測図



第26図 I H40号住居址出土遺物実測図

出土遺物は覆土中のものがほとんどであった。図示した遺物の出土位置は1が覆土中、2がP1内より出土している。3は鉄滓である。これらの遺物より本址は9世紀後半以降に位置づけられる。

検出 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調	
		口径	器高	底径	外 面・内 面		胎 土	
1	土師器 杯	(13.6)	3.7	(7.2)	外面 内面	ロクロ成形・底部調整不明 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6 橙 径2~3mmの赤色粒子を含む	
2	土師器 甕	—	<2.7>	5.7	外面 内面	ヘラケズリ ナデ	7.5YR7/6 橙 径1~2mmの赤色粒子多量と砂粒を含む	

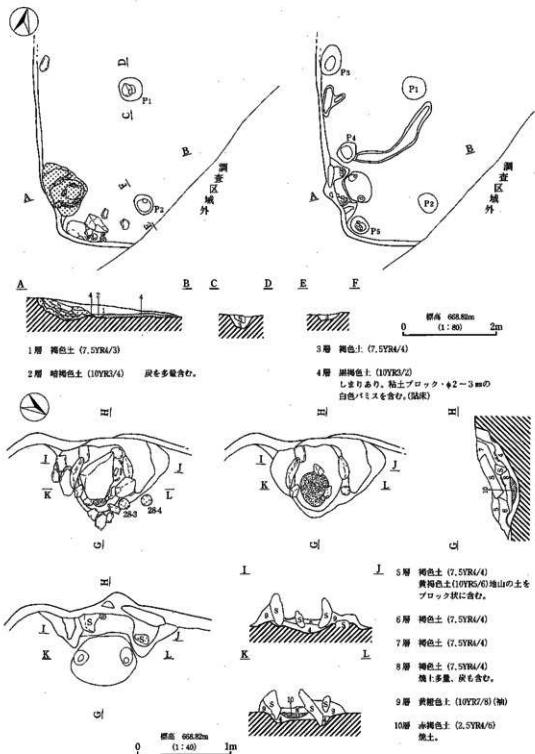
第12表 I H40号住居址出土遺物観察表

(5) I H41号住居址 (第27~29図、写真図版十三、十四)

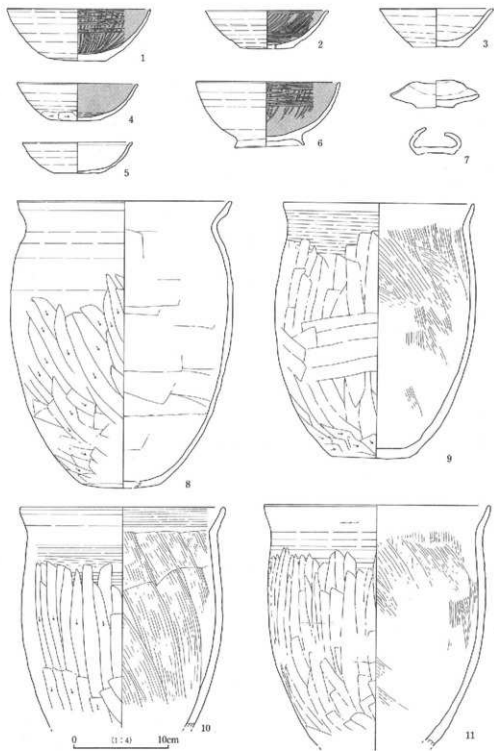
本住居址は、調査区北側の台地の先端部であるB-ツ-4・5、B-デー-4・5Grに位置する。本住居址が調査地域内では標高が最も低い場所からの検出である。残存状態は北側半分が地形により削平され、東側は調査区外となるため、住居址全体の1/3程の検出にとどまった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは南西コーナーより検出された。規模は南壁1.65m(残存)・西壁3.97m(残存)で、壁高さはカマドの北側で30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は残存で12.9㎡を測る。覆土は2層に分かれる。床は全体的に硬質であり、貼床は6cm程の厚さで貼られていた。壁溝は確認されなかった。ピットは床面で2カ所、掘り方時に3カ所の径5カ所が確認され、規模はP1が径48cm・深さ26cm、P2が径45cm・深さ14cm、P3が径64cm・深さ22cm、P4が径45cm・深さ20cm、P5が径40cm・深さ17cmを測る。検出位置よりP1とP2が主柱穴と考えられる。住居址掘り方は均一であったが、カマド前に間仕切りの溝が検出された。

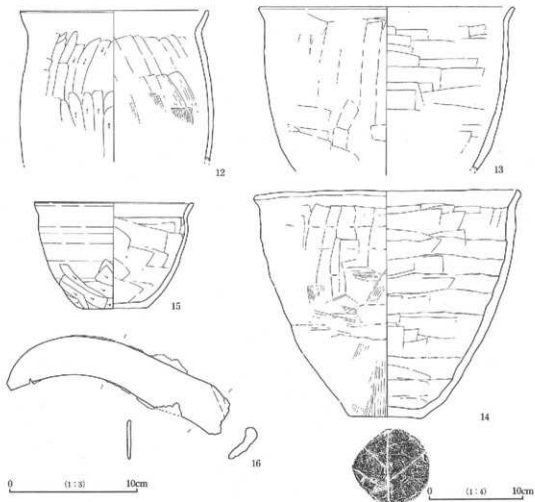
カマドは南西コーナーで検出された。形態は袖及び天井に扁平な自然石及び河原石を使用した物で、天井部には幅40cmほどの礎が崩れかかった状態で検出された。規模は煙道部長さが83cm・幅51cm、右袖長さ70cm・幅25cm、左袖長さ59cm・幅26cmである。火床面の焼土の厚さは6cmを測る。



第27図 IH41号住居址実測図



第28图 I H41号住居址出土遺物実測図①



第29図 I H41号住居址出土遺物実測図②

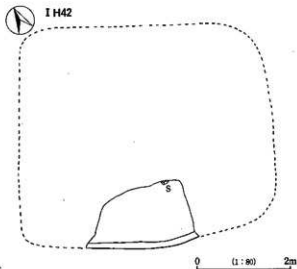
本址の出土遺物は非常に多く、特にカマド内とカマド周辺から出土している。図示した遺物の出土位置は1・5・15が覆土中、3と4がカマド右袖脇、その他の遺物はカマド内出土やカマド内から出土した破片と接合関係にある。1～5は土師器坏で、1と2は内面黒色処理されている。6は土師器碗で高台が貼付されている。内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。7は土師器耳皿で一部欠損しているがほぼ全容がつかめた。底部は回転糸切り離しである。8～12までは土師器甕である。12以外はいずれも胴部上半をロクロヨコナデが施されており、内面は9～11がハケ目の残るナデが、8はヘラナデが施されている。13～15までは土師器鉢であり、14は内面に顕著な輪積み痕が観察できる。また底部には木炭痕が残る。16は鉄製品の鎌で一部刃部が欠損しているがほぼ完形である。住居址の覆土中から出土した。形態は柄装着部がわずかに折り曲げられている。これら遺物より本址は10世紀前半に位置づけられる。

標記番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径		
1	土師器 環	(15.2)	5.5	6.3	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5.YR7/6 橙 径1~2mmの赤色粒子を非常に多く含む。砂粒を含む
2	土師器 環	(13.0)	4.1	(5.8)	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面 黒色化している ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR/2 暗褐色 径1~2mmの赤色粒子を含む
3	土師器 環	12.0	4.1	4.9	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	5.YR7/6 橙 径1~2mmの赤色粒子を非常に多く含む 砂粒を含む。
4	土師器 環	12.8	4.0	5.3	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、底部外周手持ちヘラケズリ 内面 調整不明・黒色処理	5.YR7/6 橙 径1~2mmの赤色粒子少量と砂粒多量を含む
5	土師器 環	(11.6)	3.3	5.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ナデ	5.YR7/6 橙 径2~3mmの赤色粒子と、砂粒を含む
6	土師器 鉢	(15.3)	7.1	7.4	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面 黒台貼付 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR8/4 淡黄橙 径2~3mmの赤色粒子を非常に多く含む 黒色の砂粒を含む
7	土師器 耳皿	9.3	2.9	4.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	7.5YR/6 橙 径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒を含む
8	土師器 甕	22.8	30.5	(8.3)	外面 ロクロ成形 胴部・底部ヘラケズリ 内面 胴部から底部ヘラナデ	7.5YR/4 にぶい橙 径2~3mmの赤色粒子を多く含む
9	土師器 甕	20.2	27.2	(8.3)	外面 ロクロ成形 胴部ナデ 胴部下半~底部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ 胴部~底部ハケメの残るナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径2~3mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
10	土師器 甕	11.8	(23.4)	---	外面 ロクロ成形 胴部カキメ後、縦位ヘラケズリ 内面 口縁部ハケメの残るナデ 胴部ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙 径2~3mmの赤色粒子を非常に多く含む
11	土師器 甕	(24.0)	(25.6)	---	外面 ロクロ成形 胴部コナデ後、縦位のナデ 内面 ロクロ成形 胴部ハケメ	7.5YR6/6 橙 径1~2mmの赤色粒子を多量を含む
12	土師器 甕	21.0	(16.1)	---	外面 口縁部コナデ後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部コナデ後、胴部ナデ	5.YR8/6 橙 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む。ざらざらしている
13	土師器 鉢	(27.2)	(17.4)	---	外面 ロクロ成形 胴部ナデ 内面 ロクロ成形 胴部ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を含む
14	土師器 鉢	28.5	24.1	7.5	外面 口縁部コナデ後、胴部ナデ 胴部下半ハケメ 横付蓋 胴部に本葉痕 胴部に輪痕等の残る 内面 口縁部コナデ後、胴部ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1~2mmの赤色粒子を少量含む
15	土師器 小形鉢	16.9	11.4	7.2	外面 ロクロ成形 胴部下半~底部手持ちヘラケズリ・横付蓋 内面 胴部~底部ヘラナデ 口縁部コナデ後、黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む

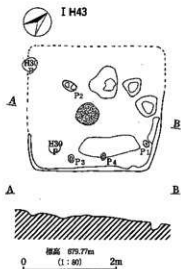
第13図 I H41号住居址出土遺物観察表

(16) I H42号住居址 (第30図)

本住居址は、調査区北側の低地であるF-サー9・10、F-シー9・10Grに位置する。残存状態は南側的一部分しか残っておらず、住居址とするにも疑問が残るが、遺構底面に床的な部分が存在する事から住居址として報告する。形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁4.70m(推定)・南壁2.42m(残存)5.16m(推定)・西壁4.26m(推定)・東壁3.75m(推定)で、壁高さは7cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は残存で2.17㎡、推定で23.56㎡を測る。床は全体的に硬質である。壁溝・ピットは確認されなかった。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。



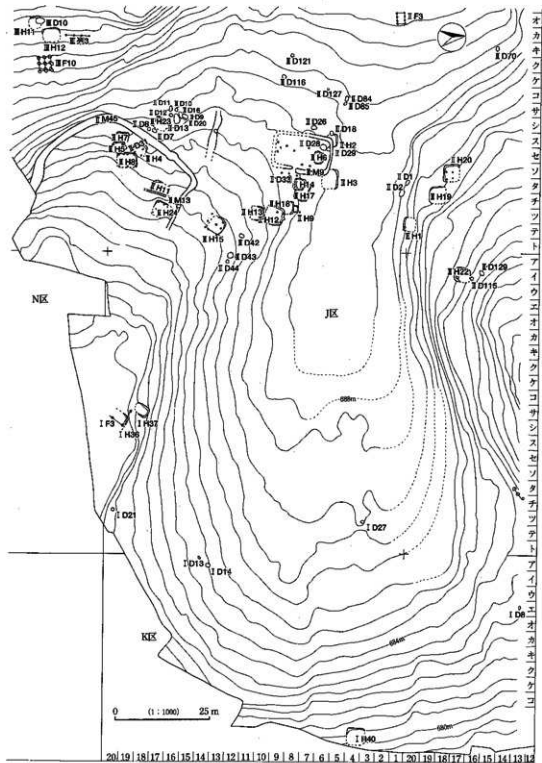
第30図 I H42・43号住居址実測図



(17) I H43号住居址 (第30図、写真図版十二②)

本住居址は、調査区北側の台地中央であるF-ウ-5、F-エ-4・5Grに位置する。残存状態は東側半分が残るのみである。H30号住居址と重複関係にあり、本址のほうが古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁2.82m(推定)・南壁2.44m・西壁0.75m(残存)2.56m(推定)・東壁1.70m(残存)2.53m(推定)で、壁高さは南壁中央より10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-45°-Wである。住居址の床面積は7.12㎡を測る。床は全体的に硬質である。壁溝は確認されなかった。ピットは4カ所が確認され、規模はP1が径15cm・深さ6cm、P2が径30cm・深さ25cm、P3が径15cm・深さ13cm、P4が径14cm・深さ6.5cmを測る。本址は住居址中央部に焼土の広がり確認された。焼土の厚さは2cmを測り、よく焼けていた。本址は出土遺物が無く帰属時期は不明である。

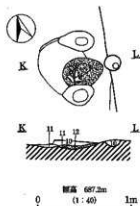
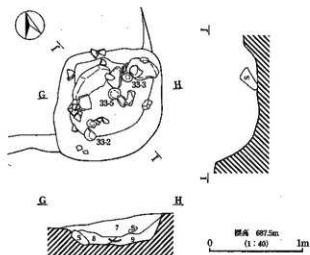
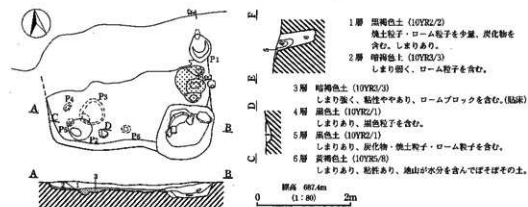


第31图 II区奈良・平安時代遺構全体図

(10) II H 1 号住居址 (第32・33図、写真図版十五・十六)

本住居址は、調査中央台地の北斜面であるE-ツ-20, E-テ-20, I-ツ-1, I-テ-1 Grに位置する。残存状態は北側が地形の傾斜によって1/2程が削平されている。

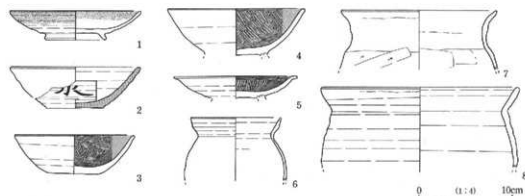
形態はほぼ方形を呈すると考えられ、東壁中央にカマドが造られている。規模は南壁3.16mで、西壁0.97m(残存)、東壁1.98m(残存)で、壁高さは南西コーナー部分で24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-90°-Eを示す。住居址の床面積は残存部で3.3m²を測る。覆土は2層に分かれる。床は住居址カマド周辺部にかけて硬質であり、貼床は厚い部分で9cm程が確認された。壁溝は確認されなかった。ピットは床面精査時に2カ所、掘り方検出時に3カ所の計5



第32図 II H 1 号住居址実測図

カ所が確認された。規模はP1が径60cm・深さ83cm、P2が径50cm・深さ16cm、P3が径54cm・深さ8cm、P4が径20cm・深さ7cm、P5が径16cm・深さ9.5cmを測る。また本址は南西コーナー部に貯蔵穴の土坑が検出された。規模は長軸1.44m・短軸1.22m・深さ49cmを測る。土坑内からは比熱面のある礫や土師器環などが流れ込んだ様な状態で出土した。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

カマドは東壁中央部に検出された。主軸方位はN-104°-Eを測り、住居址主軸よりも南側にずれる。残存状況は火床部しか残っておらず、両袖ともに芯材の設置穴と思われるピットが2カ所確認されたのみである。焼土の厚さは4cmを測り、非常に硬質化していた。



第13図 H1号住居址出土遺物実測図

検出番号	器種	法 量 (cm)			成形・調整 外面・内面	色 調 胎 土
		口径	器高	底径		
1	灰釉 甗	(12.8)	3.1	6.2	外面 ロクロ成形・下半は回転ヘラケズリ 部は回転ヘラケズリの後、高台貼付 内面 ロクロ成形 内面磨かれてい る 釉は滑 け掛り	7.5Y6/1 灰 黒色の粒子を少量含む
2	赤色 器 甗	13.5	4.9	6.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 体部に黒書「水」? ロクロ成形	N7/灰 白色粒子を多く含む、微い土
3	土師器 環	12.5	4.2	5.5	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/8 藍 径1~2mmの赤色粒子を多く含む、白 色・黒色粒子を含む
4	土師器 甗	14.3	(4.9)	---	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 に近い藍 径1~2mmの赤色粒子を多く含む、白 色・黒色粒子を含む
5	土師器 高台 甗	13.0	(2.3)	---	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3 に近い藍 径1~2mmの赤色粒子を少量含む、黒色 粒子をやや多く含む
6	土師器 小形 甗	(9.4)	(6.7)	---	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR6/2 灰褐 黒色粒子を多く含む
7	土師器 甗	(16.4)	(6.2)	---	外面 口縁部ココナデ・胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ココナデ・胴部ヘラナデ	7.5YR6/4 に近い藍 径2~3mmの赤色・黒色粒子を多く含む
8	土師器 甗	(10.5)	(8.5)	---	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR6/4 に近い藍 径1~2mmの赤色粒子を多く含む、径 1mm以下の黒色粒子を多く含む

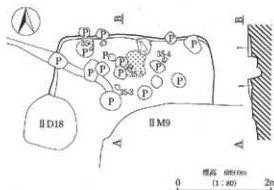
第14表 H1号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土中と床直のものがあるが、特に南東コーナー部分の貯蔵穴から集中して出土した。図示した出土遺物の内7の土師器甗以外はこの土坑よりの出土である。1は灰釉陶器甗で軸

は漬け掛けである。また内面の見込み部は非常によく磨かれており何らかの転用の結果とも考えられる。2は須恵器環で、体部外面に「水」?の墨書が確認できる。よって本址は10世紀前半に位置付けられる。

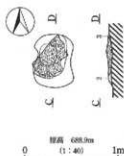
(9) II H 2号住居址 (第34・35図、写真図版十七①)

本住居址は、調査区中央部の台地西よりI-ス-5・6、I-セ-5 Grに位置する。残存状態は南側をM9号溝によって削平されている。重複関係はM9号溝・D18号土坑・各ピットと重複するがいずれの遺構よりも本址の方が古い。



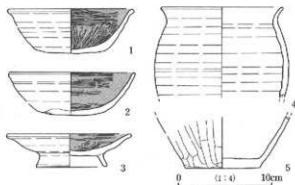
1層 暗褐色土 (10YR3/3)
しまりあり、ローム粒子をやや多く含む。

第34図 II H 2号住居址実測図



2層 赤色土 (10R4/8)
しまりあり、ローム粒子がはんでん状によく焼けている。

3層 赤褐色土 (10R2/1)
しまりあり、粘性あり、ローム粒子を含み、焼土粒子を微量含む。



第35図 II H 2号住居址出土遺物実測図

形態は、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.03m・西壁1.20m(残存)・東壁1.40m(残存)で、壁高さは北西コーナーで12cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。主軸方位Nを示す。住居址の床面積は検出部で3.8m²を測る。覆土は1層で、床は住居址中央部にかけて硬質であり、地山を蔽って踏み固めた様な状態であった。壁溝・柱穴は確認されなかった。カマドは確認できなかったが、北壁中央部近くにカマド火床面と考えられる焼土の広がりを検出した。規模は長軸長さ56cm・幅37cmを測る。焼土の厚みは6cmを測る。

出土遺物は覆土中と焼土周辺部より多く出土した。図示した遺物の出土位置は2・3・5が焼土南側、1が北西コーナー脇、4がカマド東脇である。いずれもほぼ床直であった。1と2は土師

器環で内面黒色処理、3は土師器皿で内面黒色処理がそれぞれ施されている。4と5は土師器甕である。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

押図 番号	器種	法 量(m)			成 形・調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面・内 面		胎 土
1	土師器 環	13.4	4.7	6.1	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5YR7/3 に近い橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径1~2mmの赤色粒子と長石を多く含む
2	土師器 環	(13.3)	4.5	7.0	外面	ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ	7.5YR6/3/に近い橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径1~2mmの赤色粒子と黒色粒子多く含む
3	土師器 高台皿	13.2	3.5	7.5	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付	7.5YR6/4 に近い橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径1~2mmの赤色粒子を非常に多く含む。黒色粒子を多く含む
4	土師器 甕	7.0	(9.6)	---	外面	ロクロ成形	7.5YR7/2 明褐色
					内面	ロクロ成形	径2~3mmの赤色粒子を多く含む。黒色粒子を含む
5	土師器 甕	---	(5.5)	8.0	外面	ハケメの残るようなナデ 焼けこげが付着	7.5YR7/4 に近い橙
					内面	ナデ	径3~4mmの赤色粒子を多く含む

第15表 II H 2号住居址出土遺物観察表

(2) II H 3号住居址 (第36・37図、写真図版十七②)

本住居址は、調査区中央部の台地西よりであるI-ソ-5・6、I-ター-5・6Grに位置する。残存状態は南側が地形の傾斜のため削平されている。また重複関係ではII M 7・8・9号溝と重複するがいずれの遺構より本址の方が古い。

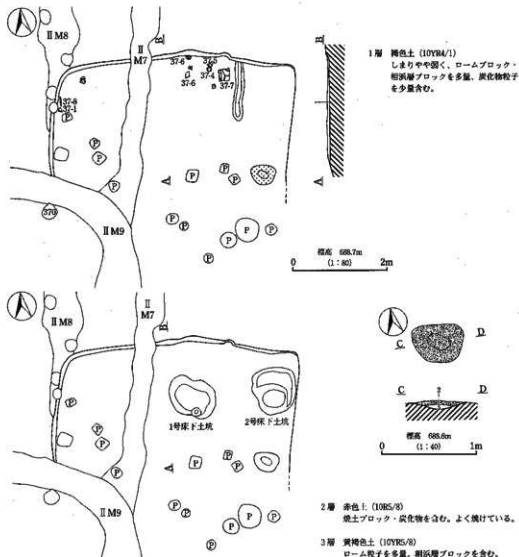
形態はほぼ方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央に造られていたと考えられる。規模は北壁4.85m・西壁2.20m(残存)・東壁2.54m(残存)で、壁高さは北東コーナーと北壁中央の間で12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-86°-Eを示す。住居址の床面積は残存部で1.8

押図 番号	器種	法 量(m)			成 形・調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面・内 面		胎 土
1	土師器 環	(11.6)	3.5	5.6	外面	ロクロコナデ・底部回転ヘラ切り	7.5YR7/4 に近い橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径1~2mmの赤色粒子を多く含む。黒色粒子を含む
2	土師器 環	(11.8)	3.7	4.8	外面	ロクロコナデ・底部ヘラケズリ	5YR6/6 橙
					内面	ナデ	径1~2mmの赤色粒子と黒色粒子多く含む
3	土師器 環	(12.4)	(3.3)	---	外面	ロクロコナデ	5YR6/6 橙
					内面	ロクロコナデ	径1~2mmの赤色粒子を多く含む。長石を含む
4	土師器 樽	---	(1.7)	7.6	外面	底部回転糸切り後、高台貼付	7.5YR6/6 橙
					内面	ナデ	径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
5	灰 釉 長頸瓶	---	(17.0)	---	外面	ロクロ成形・胴部に自然釉付着	7.5Y8/1 灰白
					内面	ロクロ成形	黒色粒子を微量含む
6	灰 釉 長頸瓶	---	(13.6)	11.8	外面	ロクロ成形	7.5Y8/1 灰白
					内面	ロクロ成形・底部に自然釉付着	黒色粒子を微量含む
7	須恵器 甕	---	(24.0)	---	外面	カキメの後、平行タタキ	7.5Y6/1 灰
					内面	同心円状の当て具痕をスリ消している	黒色粒子を含む

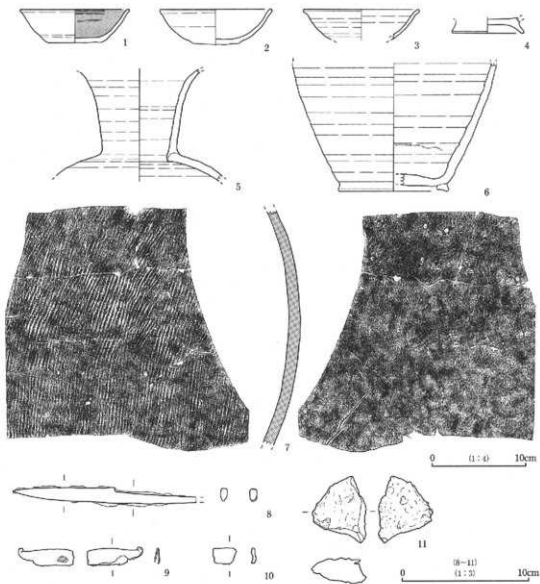
第16表 II H 3号住居址出土遺物観察表

m²を測る。覆土は1層で、床は中央部分がやや硬質であった。壁溝・ピットは確認されなかった。掘り方検出時に住居中央と北東コーナーに土坑が検出された。規模は1号土坑が長軸1.08m・短軸84cm・深さ10cm、2号土坑が長軸1m・短軸93cm・深さ18cmを測る。また、北東コーナーには間仕切り溝が長さ1.1mほど検出されている。カマドは東壁中央部に造られていたと考えられるが火床面のみしか残存していなかった。焼土の厚みは4.5cmを測る。袖部・天井部の形態は不明である。

出土遺物は北壁際に多く出土した。図示した遺物の内、3の土師器環は覆土中よりの出土で、それ以外はいずれも北壁際よりの出土である。



第36図 II H 3号住居址実測図



第37図 IIH3号住居址出土遺物実測図

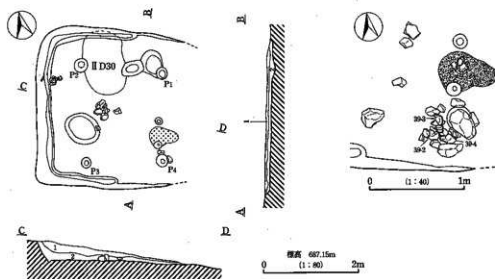
1～3は上飾器環であり、1のみ内面に黒色処理が施されている。4は土師器高台付き椀の高台部分である。5と6は灰釉陶器長頸瓶の口縁部から頸部の破片と胴部から底部の破片である。いずれも1/5程しか残存していない。これら2つの個体は同一個体と考えられるが接合点が見いだせなかった。また住居址内の出土遺物の中にもこれら灰釉の長頸瓶の破片は無かった。7は須恵器甕の胴部破片である。8～11は鉄製品で、8は刀子、11は鉄滓である。9と10は不明製品である。特に9については腐食面が青銅製とも考えられ、或いはキセルの一部で本址には伴わないかもしれない。よってこれら遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

(2)ⅡH4号住居址 (第38・39・40図、写真図版十九)

本住居址は、調査区中央部の台地付け根であるI-セー18-19Grに位置する。残存状態は東壁が地形の傾斜のために削平されている他は良好であった。また、本址はD30号土坑と重複関係にあり本址の方が古い。

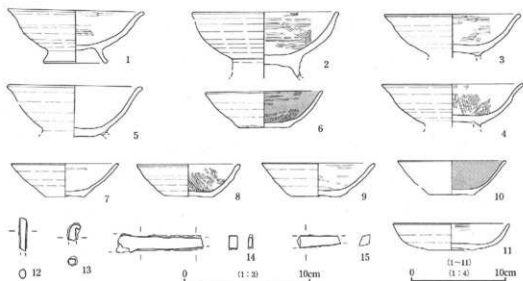
形態はほぼ方形を呈する。カマドは東壁のやや南よりに造られている。規模は北壁2.92m(残存)・南壁2.90m(残存)・西壁3.11mで、壁高さは南西コーナーで44cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-15°-Eを示す。住居址床面積は残存部で6.9m²を測る。覆土は2層のみである。床は全体に軟質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁の全体と北壁と南壁の一部に確認された。規模は幅13~37cm・深さ8cmを測り、断面形はU字形である。ピットは6カ所検出され、規模はP1が径24cm・深さ32cm、P2が径30cm・深さ16cm、P3が径22cm・深さ15cm、P4が径26cm・深さ17cm、P5が径60cm・深さ22cm、P6が径47cm・深さ26cmを測る。検出位置よりP1~P4までが住居址の支柱穴と考えられる。また本址は南西コーナー近くに貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。

規模は長軸76cm・短軸62cmで、深さは17cmを測る。カマドは東壁やや南よりに検出された。地形による削平の為か火床部のみの残存となった。火床部の大きさは長さ63cm・幅42cmで、焼土の厚さは非常に薄かった。また袖構築材の掘り込みと思われるピットが火床面の両脇から検出された。



- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) パミス・炭化物を少量含む。
 2層 黒褐色土 (10YR2/3) パミスを多量・炭化物を少量含む。

第38図 ⅡH4号住居址実測図

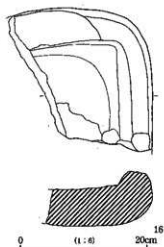


第39図 II H 4号住居址出土遺物実測図①

検出 番号	器種	法 量(cm)			成形・調整 外面・内面	色 調 胎 土
		口径	器高	底径		
1	土師器 椀	14.4	5.8	6.8	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 荒いヘラミガキ	7.5YR 7/4 に近い橙 径2～3mmの赤色粒子少量と砂粒多量含む
2	土師器 椀	15.5	<6.8>	---	外面 ロクロ成形・底部回転ヘラケズリ後、高 台貼付 内面 ヘラミガキ	7.5YR 7/4 に近い橙 径3～4mmの赤色粒子少量と黒色粒子多量含む
3	土師器 椀	14.4	4.6	---	外面 ロクロ成形・底部回転ヘラケズリ後、高 台貼付 内面 ヘラミガキ	5.7YR 7/6 橙 径2～3mmの赤色粒子と黒色粒子多く含む
4	土師器 椀	13.0	<4.6>	---	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 荒いヘラミガキ	5.7YR 7/4 に近い赤褐 径3～4mmの赤色粒子と黒色粒子少量含む
5	土師器 椀	14.3	<5.3>	---	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ロクロ成形 ※内外面 黒色処理?	7.5YR 2/1 黒 黒色粒子を多く含む
6	土師器 鉢	12.4	3.9	5.4	外面 ロクロ成形・底部回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 7/4 に近い橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
7	土師器 鉢	(11.4)	3.5	4.4	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 磨耗著しく調整不明	7.5YR 7/4 に近い橙 径1～2mmの赤色粒子多量と砂粒を含む
8	土師器 鉢	11.0	3.5	5.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 荒いヘラミガキ	7.5YR 7/4 に近い橙 径1～2mmの赤色粒子と黒色粒子多量含む
9	土師器 鉢	12.0	3.5	5.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ	7.5YR 7/4 に近い橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
10	土師器 鉢	(11.4)	3.6	4.8	外面 磨耗著しく調整不明 内面 調整不明 黒色処理	7.5YR 6/6 橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を含む
11	土師器 鉢	(12.3)	2.8	4.8	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 磨耗著しく調整不明	7.5YR 7/4 に近い橙 径1～2mmの赤色粒子多量と砂粒を含む

第17表 II H 4号住居址出土遺物観察表

出土遺物は住居址覆土中とカマド南脇が多かった。特に図示した遺物の出土位置は2が覆土中以外はすべてこのカマド南脇からの出土である。このカマド南脇には土器と共にカマドで使用さ



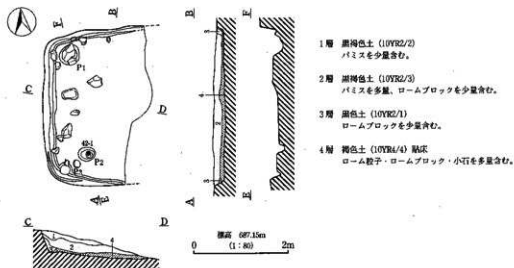
第40図 IIH4号住居址出土遺物実測図②

れたような礫が多く検出されている。1～5は高台付きの土師器碗である。6～11は土師器杯で6・10・11が内面黒色処理されている。ただ11はやや形態が異なる。12～15は鉄製品で、いずれも出土位置はカマド南脇の礫中より出土した。種別は12が釘か鉄鎌の茎部、13が釘？、14と15は刀子の柄と考えられる。16は石皿で住居址の北西コーナー付近より出土した(写真参照)。石材は砂岩質である。よって本址はこれらの遺物により10世紀前半に位置づけられる。

22 IIH5号住居址 (第41・42図、写真図版十八①)

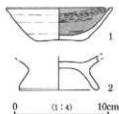
本住居址は、調査区中央部の台地付け根であるI-スー19・20、I-セー19・20Grに位置する。残存状態は東壁が地形の傾斜のために削平されている他は良好であった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明である。規模は北壁2.03m(残存)・南壁1.50m(残存)・西壁2.86mで、壁高さは南西コーナーで37.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-4°-Eを示す。住居址床面積は残存部で5.2㎡を測る。覆土は2層のみである。床は全体に



第41図 IIH5号住居址実測図

- 1層 黒褐色土 (10YR2/2)
パミス少量含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3)
パミスを多量、ロームブロックを少量含む。
- 3層 褐色土 (10YR2/1)
ロームブロックを少量含む。
- 4層 褐色土 (10YR4/4) 脱灰
ローム粒子・ロームブロック・小石を多量含む。



第42図 II H 5号住居址出土遺物実測図

硬質で、貼床は10cmの厚さで貼られていた。壁溝は西壁の全体と北壁と南壁の一部に確認された。規模は幅10~30cm・深さ6cmを測り、断面形はU字形である。ピットは3カ所検出され、規模はP1が径45cm・深さ21cm、P2が径35cm・深さ16cm、P3が径30cm・深さ8cmを測る。

出土遺物は主に覆土中である。図示した遺物の出土位置は1がP2上、2が覆土中である。よって本址は10世紀前半以降に位置づけられる。

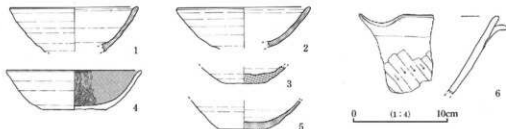
検出番号	器種	法量(cm)			成形・調整		色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土	
1	土師器 坪	11.2	3.6	5.3	外面 内面	ロクロ成形・底厚調整不明 ロクロ成形・黒色処理	7.5YR 7/4 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子多量と黒色粒子含む
2	土師器 柄	---	(3.1)	8.5	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形	7.5YR 6/3 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む

第18表 II H 5号住居址出土遺物観察表

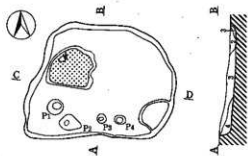
㉓ II H 6号住居址 (第43・44図、写真図版二十)

本住居址は、調査区中央の白地上であるI-セ-6・7.I-ソ-6・7Grに位置する。残存状態はほぼ良好であり、重複遺構はII M9号溝状遺構と直接の新旧関係はないが、II M9号に囲まれた状態である。

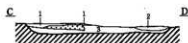
形態は不整形を呈する。カマドはが址的な部分が西壁よりに検出された。規模は北壁2.25m・南壁2.72m・西壁2.27m・東壁2.03mで、壁高さは北壁中央で28cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-6°-Eを示す。住居址の床面積は推定で5.8m²を測る。覆土は4層で、床は軟質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは4カ所検出され、規模はP1が径33cm・深さ19cm、P2が径46cm・深さ10.5cm、P3が径20cm・深さ12.5cm、P4が径23cm・深さ10cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。カマドは置き竈的な焼土範囲が検出された。この焼土範囲は床面よりも12cm程高い位置にあり、焼土を囲むように粘質土が取り巻いていた。規模は長軸2.02m・短軸1.82mで、焼土の厚みは9cmを測る。



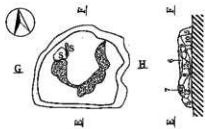
第43図 II H 6号住居址出土遺物実測図



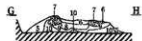
- 1層 褐灰色土 (10YR6/1)
しまりあり、炭化物・焼土粒子・白色粒子を多量含む。
- 2層 褐灰色土 (10YR6/1)
しまりあり、炭化物・焼土粒子・白色粒子を少量含む。
- 3層 黒色土 (10YR2/1)
しまり、粘性あり、白色粒子・炭化物を少量含む。
- 4層 黒色土 (10YR2/1)
しまりあり、白色粒子を少量含む。



標高 688.5m
(1:80) 2m



- 5層 黒色土 (10YR2/1) しまりあり、白色パリスをやや多量、炭化物・焼土粒子を少量含む。
- 6層 黒色土 (10YR2/1) しまりやや弱く、炭化物・焼土粒子を多量含む。
- 7層 赤色土 (10R6/8) しまりあり、上面よりよく焼けている。ブロック状になる。
- 8層 暗赤色土 (10R3/6) しまり弱く、焼土ブロックと暗黒色土・炭化物を含む。
- 9層 赤褐色土 (10R5/4) しまり非常にあり、上面よりよく焼けており、下層に比べると赤化は強い。白色の粒子を少量含む。
- 10層 赤黒色土 (10R2/1) しまりあり、焼土粒子を含む。(地山に近い)
- 11層 赤黒色土 (10R2/1) 6層に似るがしまり弱く、焼土粒子をやや多く含む。
- 12層 暗赤色土 (10R3/6) しまり弱く、暗黒色土と焼土粒子を含む。(4層よりしまりあり。)



標高 688.4m
(1:40) 1m

第44図 IIH6号住居土実測図

探出番号	器種	法量(cm)			成形・調整		色調
		口径	器高	底径	外面	内面	胎土
1	須恵器 杯	(13.6)	<4.6>	---	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形	5Y5/1 灰 白色粒子を含む
2	須恵器 杯	(14.2)	<4.3>	---	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形	7.5Y6/1 灰 白色粒子をやや多く含む
3	須恵器 杯	---	<1.7>	4.8	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	7.5Y6/1 灰 白色粒子を含む
4	須恵器 片(敷瓦)	(14.3)	4.1	(6.8)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラミガキ・黒色処理?	7.5YR7/4 におい櫃 径2~3mmの赤色粒子多量と黒色粒子含む
5	須恵器 杯	---	<3.1>	5.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	7.5YR7/3 におい櫃 径1~2mmの赤色粒子を含み、砂粒をやや多く含む
6	土師器 片口鉢	---	<8.4>	---	外面 内面	口縁部→胴部(コナゲ後、胴部ヘラミガキ) ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6 櫃 径2~3mmの赤色粒子微量と白色粒子少量含む

第19表 IIH6号住居土出土遺物観察表

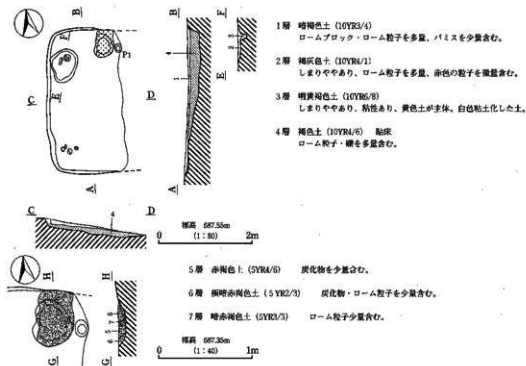
出土遺物は覆土中と焼土内から出土した。特に焼土南側には拳大の礫が多く検出された(写真参照)。図示した遺物の出土位置は1が焼土東側、2が覆土中、6が焼土内、その他は南東コー

ナー付近の床直からの出土である。1～5は須恵器坏である。特に4は一見すると非常に生焼け的な須恵器であるが、内面のミガキ技法を考えると土師器でありいわゆる須恵質系土師器の問題も含め位置づけに苦慮する。6は土師器の片口鉢で内面黒色処理されている。以上、ⅡH6号住居址について述べたが、本址は住居址とすべきかどうか疑問点も残るが、現報告段階では住居址の遺構として報告する。なお本址はこれら遺物より9世紀前半に位置づけられる。

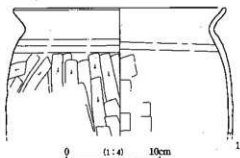
④ⅡH7号住居址 (第45・46図、写真図版十八②)

本住居址は、調査区中央部の白地付け根であるI-スー19・20Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。重複はⅡH5号住居址としており本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁1.30m(残存)、南壁1.36m(残存)・西壁2.85mで、壁高さは西壁中央で13cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-8°-Eを示す。住居址の床面積は残存で4.23㎡を測る。覆土は4層に分かれる。床は硬質であり、貼床は深いところで24cmを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは1カ所確認されただけで、規模はP1が径14cm・深さ20cmを測る。また本址は北西コーナーに貯蔵穴的な土坑



第45図 ⅡH7号住居址実測図



第46図 II H7号住居址出土遺物実測図

が検出された。規模は長軸74cm・短軸58cm・深さは8.5cmを測る。カマドは北壁中央にあったが、火床面のみしか残存していなかった。焼上の厚みは8cmで、掘り込み部の長さは長軸59cm・短軸40cmを測る。出土遺物は覆土中のものがほとんどで、図示した土師器甕は住居址南西コーナー床直より出土している。

本址はこれらの遺物より9世紀後半に位置づけられる。

棟号 番号	器種	法・量(cm)			成形・調整 外面・内面	色調 胎土
		口径	器高	底径		
1	土師器 甕	(22.6)	(13.5)	—	外面 口縁部—胴部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	7.5YR7/6 橙 径1~2cmの赤色火山灰粒子多量と白色粒子少量含む

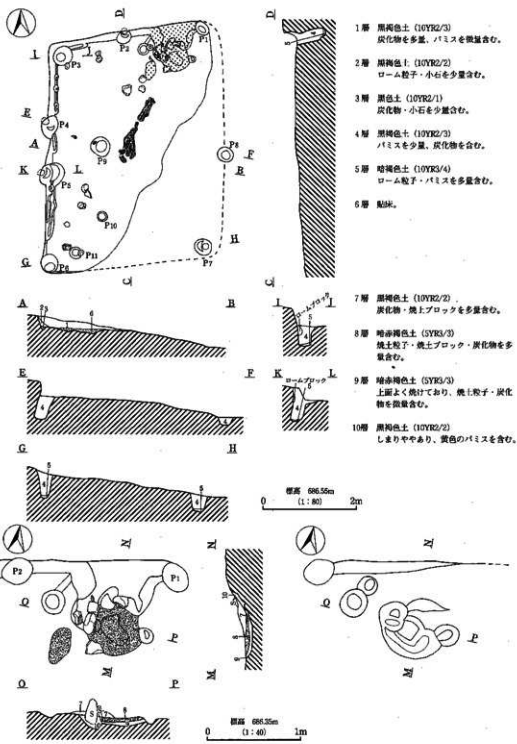
第20表 II H7号住居址出土遺物観察表

(25) II H8号住居址 (第47・48図、写真図版二一)

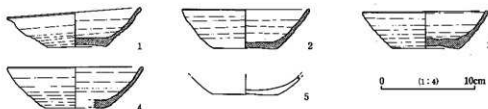
本住居址は、調査区中央部の台地であるIーセー19・20、Iーソー18・19・20Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。重複関係はIF4号独立柱建物址と重複し本址の方が古い。

形態はほぼ長方形を呈する。カマドは北壁東よりに造られていた。規模は北壁3.20m(残存)2.50m(推定)・南壁0.76m(残存)3.65m(推定)・西壁4.76m・東壁4.80m(推定)で、壁高さは北東コーナーで32cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-2°-Wを示す。住居址の床面積は推定で16.3㎡(推定)・残存で10.7㎡を測る。覆土は6層に分れ、床は硬質で、貼床は8cmを測る。壁溝は西壁と北壁の一部に検出された。規模は幅8~20cm・深さ7cmで、断面形はU字形を呈する。また壁溝内には5個のピットが確認された。ピットは11カ所検出された。規模はP1が径32cm・深さ20cm、P2が径33cm・深さ61cm、P3が径40cm・深さ44cm、P4が径48cm・深さ78.5cm、P5が径50cm・深さ71cm、P6が径37cm・深さ66cm、P7が径35cm・深さ40cm、P8が径34cm・深さ18cm、P9が径40cm・深さ13cm、P10が径22cm・深さ28cm、P11が径25cm・深さ33.5cmを測る。これらピットは検出位置より住居址の欄柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一であった。

カマドは北壁東よりに検出された。主軸方位はN-10°-Wを測る。袖の形態は芯材として縦長の礫を立てその周りを粘質土で覆うものであり左袖のみ確認できた。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは5cmを測る。煙道部の長さは1.01m・幅44cmを測る。



第47図 II 8号住居址実測図



第48図 IIH8号住居址出土遺物実測図

検出 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面・内 面	胎 土	
1	須恵器 鉢	14.0	4.2	6.2	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5Y6/1 灰
					内面	ロクロ成形 重ね焼跡あり	白色・黒色粒子を多く含む
2	須恵器 鉢	13.5	4.2	6.7	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5Y7/1 灰白
					内面	ロクロ成形 火だすき痕あり	白色・黒色粒子を多く含む
3	須恵器 鉢	13.4	4.0	7.0	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5Y6/1 灰
					内面	ロクロ成形	白色・黒色粒子を多く含む
4	須恵器 鉢 (軟質)	(14.4)	4.3	(6.4)	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	5Y7/2 灰白
					内面	ロクロ成形	径1-2mmの赤色粒子と白色・黒色粒 子を多く含む
5	土師器 鉢	—	(2.1)	6.8	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、ヘラケ ズリ	7.5YR7/4 に近い橙
					内面	ヘラミダキ?	赤色粒子を微量と砂粒をやや多く含む

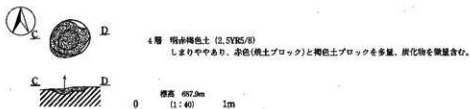
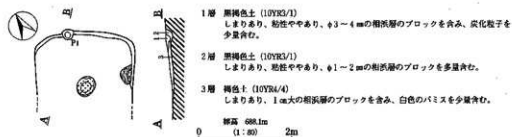
第21表 IIH8号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土中及びカマド周辺と住居址中央部で検出された炭化材の周辺より出土した。図示した遺物の出土位置は1と3が住居址中央、2と5がカマド左袖脇、4が覆土中である。1～4は須恵器鉢であるが、4は生焼けの須恵器であった。これらの遺物より本址は9世紀前半に位置づけられる。

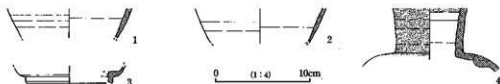
26) IIH9号住居址 (第49・50図)

本住居址は、調査区中央部の台地南斜面であるI-チー8、I-ツツ8Grに位置する。残存状態は南側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。明瞭なカマドは不明であるが、東壁と住居址中央部に焼土広がりが見出された。規模は北壁2.06m・西壁1.06m・東壁1.32m(残存)で、壁高さは北壁中央で10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-29°-Eを示す。住居址の床面積は残存で2.7㎡を測る。覆土は1層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は確認されなかった。ピットは1カ所確認され、規模はP1が径26cm・深さ11cmを測る。住居址掘り方は均一であった。住居址中央部の焼土は炉址的な残存状態で、規模は長軸43cm・短軸38cm・深さ11.5cmを測る。



第49図 II H9号住居址実測図



第50図 II H9号住居址出土遺物実測図

測図 番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面	内 面	胎 土
1	須恵器 環	(14.8)	(5.8)	---	外面	ロクロ成形	N6/灰(内面) 白色・黒色粒子を含む
					内面	ロクロ成形	
2	須恵器 環	(15.0)	(6.0)	---	外面	ロクロ成形・自然輪付着	N6/灰(内面) 黒色粒子を含む
					内面	ロクロ成形	
3	須恵器 高台環	---	(1.6)	(9.0)	外面	ロクロ成形	7.5Y6/1 灰 白色粒子を含む
					内面	ロクロ成形	
4	須恵器 長頸瓶	(10.8)	(7.5)	---	外面	ロクロ成形・自然輪付着	5Y6/2 灰オリーブ 黒色粒子を多く含む
					内面	ロクロ成形・自然輪付着	

第22表 II H9号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土中のものがほとんどで、図示した遺物の出土位置もすべて覆土中のものである。1と2は須恵器環であり、3は須恵器高台環の高台部である。4は須恵器長頸瓶の頸部から口縁部である。外面全体と内面の口縁部に軸が施されている。口頸部はいわゆる三段構成を呈する。

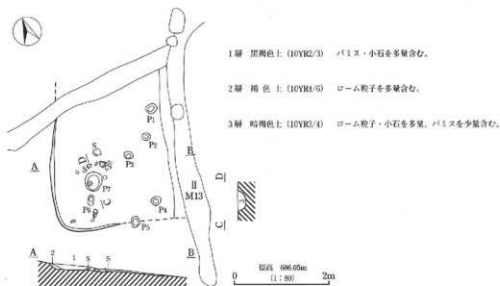
これらの遺物より本址は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

(27)ⅡH11号住居址 (第51・52図、写真図版二十二①)

本住居址は、調査区中央部台地の付け根部であるI-ター17、I-チー17Grに位置する。残存状態は北側及び東側が暗渠排水とⅡM13号溝状遺構によって削平され、住居址の西壁と南西コーナー部分のみ検出された。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は南壁1.20m(残存)・西壁2.90m(残存)で、壁高さは南西コーナーで12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は残存で6.6㎡を測る。覆土は3層に分かれる。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは床面で7カ所が確認され、規模はP1が径23cm・深さ22cm、P2が径19cm・深さ11cm、P3が径18cm・深さ20cm、P4が径22cm・深さ23cm、P5が径20cm・深さ13cm、P6が径22cm・深さ14cm、P7が径41cm・深さ19cmを測る。住居址掘り方は均一であった。

本址の出土遺物は覆土中からの出土が殆どで、図示した遺物の出土位置はいずれも住居址南西コーナーからである。1は土師器の高台付椀で、2と3は土師器杯である。いずれも内面黒色処理されている。1と2は重なるような状態で出土した。これら遺物より9世紀後半以降に位置づけられると考える。



第51図 ⅡH11号住居址実測図



第52図 ⅡH11号住居址出土遺物実測図

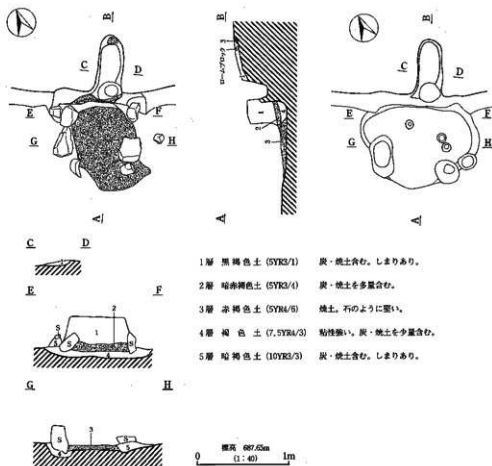
神田 番号	器種	法量(cm)		成形・調整		色 調	
		口径	器高	底径	外面・内面	胎	土
1	土師器 甕	--	<4.2>	6.9	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 ヘラミガキ・黒色処理	5YR5/6 明赤褐色 径2～3mmの赤色粒子と砂粒を含む
2	土師器 杯	(14.4)	3.2	5.9	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/2 灰褐色 径2～3mmの赤色粒子を多く含む
3	土師器 杯	13.8	<3.7>	--	外面 内面	ロクロ成形 ヘラミガキ・黒色処理	5YR5/6 明赤褐色 径1～2mmの赤色粒子と黒色粒子多量 含む

第23表 II H11号住居址出土遺物観察表

〔例〕II H12号住居址（第53～55図、写真図版二十三・二十四）

本住居址は、調査区中央部の台地東斜面であるI-ツ-9・10、I-テ-9・10Grに位置する。残存状態は南側が地形の傾斜によって削平されていた。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央にある。規模は北壁4.32m・南壁0.35

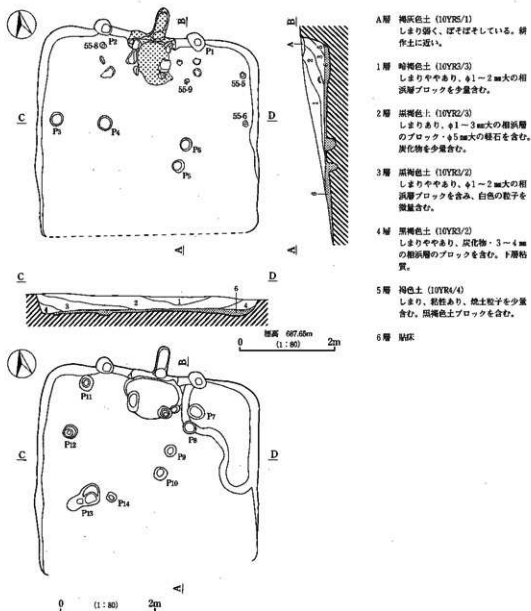


第53図 II H12号住居址カマド実測図

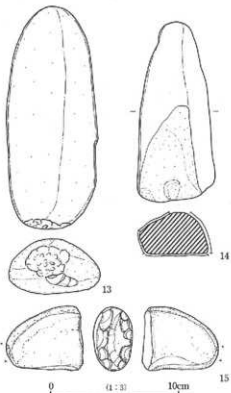
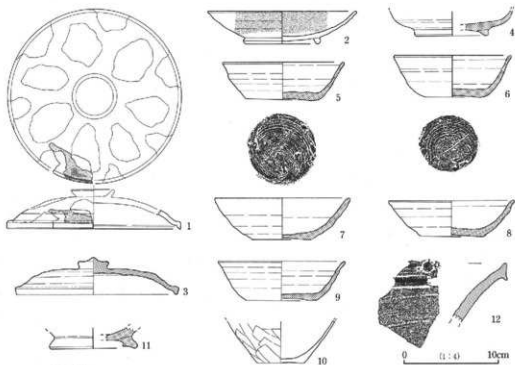
- 1層 黒褐色土 (5YR3/1) 炭・焼土含む。しまりあり。
- 2層 暗赤褐色土 (5YR3/4) 炭・焼土を多量含む。
- 3層 赤褐色土 (5YR4/6) 焼土。石のように堅い。
- 4層 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性強い。炭・焼土を少量含む。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3) 炭・焼土含む。しまりあり。

縦高 687.5mm
(1:40) 1m

m(残存)4.50m(推定)・西壁4.25m・東壁3.75mで、壁高さは北西コーナーで58cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-10°-Eを測る。住居址の床面積は推定で17.5㎡を測る。床は全体的に硬質であり、貼床の厚さは10cmを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは床面検出時に6カ所、掘り方検出時に8カ所の計14カ所が確認され、規模はP1が径40cm・深さ76cm、P2が径36cm・深さ75cm、P3が径27cm・深さ17cm、P4が径30cm・深さ10cm、P5が径25cm・深さ28cm、



第54図 II HI2号住居址実測図



P6が径28cm・深さ22cm、P7が径36cm・深さ17cm、P8が径28cm・深さ29cm、P9が径25cm・深さ19cm、P10が径26cm・深さ19cm、P11が径34cm・深さ24cm、P12が径30cm・深さ24cm、P13が径80cm・深さ35cm、P14が径20cm・深さ13cmを測る。ピットの検出位置よりP1とP2は主柱穴的な役割の壁柱穴と考えられる。住居址掘り方は北東コーナー部に「L」字様に一段深く掘り下げた部分が確認された。深さは掘り方面より3~4cmであった。

カマドは住居址北壁中央部に造られていた。形態は煙道部が細長く住居址壁よりも飛び出るタイプのもので、抽は自然礫を芯材とし粘土で覆ったものであった。カマド主軸方位はN-21°-Eを測り、住居址主軸よりも東にずれている。規模は煙道部長さが165cm・幅50cm、右袖長さ86cm・幅23cm、左袖長さ72cm・幅20cmである。火床

第56図 II H12号住居址出土遺物実測図

面焼土の厚みは5cmを測り、非常に硬質化しており使用頻度の高さを伺わせた。

本址の出土遺物は覆土中のものが多く、ついでカマド周辺の床直とカマド内のものがあつた。

1は奈良三彩の蓋であり、カマド左側の覆土中より出土した。また、ⅡH15号住居址出土の小片と接合関係にある。小片の為全容は不明であるが、新潟県和島村八幡林官衛遺跡出土の三彩蓋を参考として復元図化した。2は灰釉陶器皿と同じくカマド左側の覆土中より出土した。釉はハケ塗りである。3は須恵器蓋でカマド右袖脇の床直から出土した。4～9は須恵器環で、出土位置は5は北東コーナー脇、6は東壁中央よりの床直、8がカマド左袖脇、9がカマド右袖前の床直で、それ以外は覆土中である。5と6はいずれも底部に焼成前のヘラ書きが施され、5が「十」、6が「十」である。11は須恵器長頸壺の底部と考えられる。12は須恵器甕の口縁部で、10は土師器甕の底部から胴部である。13～15は石製品で、13と15はいずれも先端部に敲き痕がある。14は全面研磨されている。石材は13が輝石安山岩、14が同じく輝石安山岩、15が角閃石安山岩である。

これらの出土遺物より本址は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

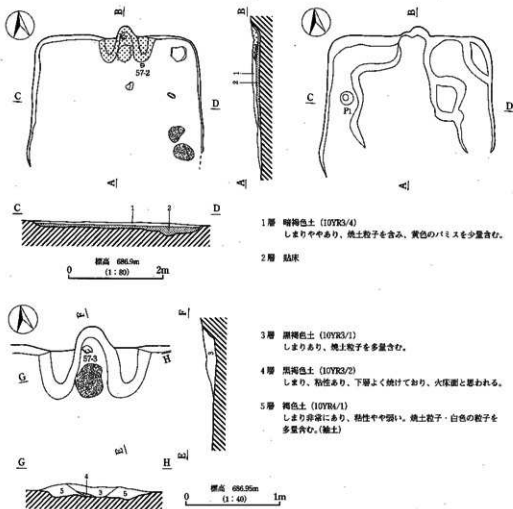
標記 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調	
		口径	器高	底径	外 面	内 面	胎 上	
1	奈良三彩蓋	(18.4)	(2.1)	---	外面 内面	ロクロ成形・施釉 ロクロ成形・施釉	5Y8/3 淡黄	非常に良く磨練されている
2	灰 釉 皿	(15.8)	3.5	7.8	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後、高台貼付 施釉ハケ塗り ロクロ成形・施釉・みこみ厚薄つである	2.5GY 8/1 灰白	白色粒子を微量含む
3	須恵器蓋	17.2	3.9	つまみ厚 径3.2	外面 内面	ロクロ成形・天弁部回転ヘラケズリ後、つまみ厚貼付 ロクロ成形 火だすき痕あり	N6/灰	白色粒子と黒色の不純物を少量含む
4	須恵器高台環	---	(2.6)	(7.8)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後、高台貼付 ロクロ成形	N5/灰	白色粒子を含む
5	須恵器環	12.9	4.0	7.8	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後、ヘラ書き「十」あり ロクロ成形 火だすき痕あり	7.5Y 6/1 灰	白色粒子と黒色粒子を含む
6	須恵器環	12.5	4.5	6.5	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後、ヘラ書き「十」あり ロクロ成形 火だすき痕あり	7.5Y 6/1 灰	白色粒子と黒色粒子を含む
7	須恵器環	(14.4)	4.4	(6.5)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後 ロクロ成形	7.5Y 7/1 灰白	砂物を多く含む、ざらざらしている
8	須恵器環	13.4	3.8	7.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後 ロクロ成形 火だすき痕あり	7.5Y 6/1 灰	径2～3mmの黒色の不純物を多く含む
9	須恵器環	(13.6)	4.1	7.4	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後 ロクロ成形 火だすき痕あり	N6/灰	黒色の噴出物が非常に多い
10	土師器甕	---	(4.4)	5.0	外面 内面	ヘラケズリ ナデ	5YR 5/6 明赤褐	径1mm以下の白色・黒色粒子を多量に含む
11	須恵器長頸壺	---	(2.1)	(9.4)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後 自然焼付着 高台貼付 ヨコナデ	7.5Y 6/1 灰	白色粒子をやや多く含む
12	須恵器甕	---	(5.0)	---	外面 内面	ヨコナデ 自然焼付着 ヨコナデ 自然焼付着	N5/灰	白色粒子を少量含む

第24表 ⅡH12号住居址出土遺物観察表

〔2〕Ⅱ H13号住居址（第56・57図、写真図版二十五）

本住居址は、調査区中央部の白地南斜面であるI-ツ-10.11Grに位置する。残存状態は南側半分が地形の傾斜によって削平されている。

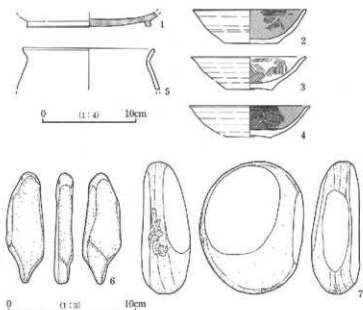
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.24m・西壁2.65m（残存）・東壁2.35m（残存）で、壁高さはカマド付近で9cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-8°-Eである。住居址の床面積は9.0㎡を測る。床は全体的に硬質であり、貼床は厚い箇所では18cmを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは掘り方時に1カ所が確認され、規模はP1が径27cm・深さ12.5cmを測る。住居址掘り方は東壁と西壁の両脇を一段深く掘り窪ます状態で、深さは東側が約7cm・西側が約2cmを測る。



第56図 Ⅱ H13号住居址実測図

押回 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整 外 面・内 面	色 調 胎 土
		口径	器高	底径		
1	須恵器 高台杯	—	<1.2>	13.2	外面 ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後、高台 取付 内面 ロクロ成形 良く磨かれている	5GY5/1 オリーブ灰 径1~2mmの赤色粒子と白色粒子多量 含む
2	土師器 杯	16.1	3.7	5.1	外面 ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/4 に近い 径2~3mmの赤色粒子少量と赤粒多量 含む
3	土師器 杯	16.2	3.5	5.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ	7.5YR8/4 浅黄褐色 径1~2mmの赤色粒子少量、赤粒少量 含む
4	土師器 杯	12.8	3.4	4.6	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/2 明褐色 径1~2mmの赤色粒子を含む、白色粒 子少量含む
5	土師器 甕	14.0	<4.4>	—	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR7/4 に近い 径1~2mmの赤色粒子多量と赤粒を やや多く含む

第25表 II H13号住居址出土遺物観察表



第57図 II H13号住居址出土遺物実測図

カマドは北壁中央で検出された。主軸方位はN-9°-Eを測る。形態は煙道部が住居址壁よりも飛び出す形で、袖は芯材として粘質土で覆うものであり両袖が確認できた。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは3cmを測る。煙道部の長さは76cm 幅35cmを測る。また本址は住居址南西コーナーに焼土の広がりか2カ所確認された。

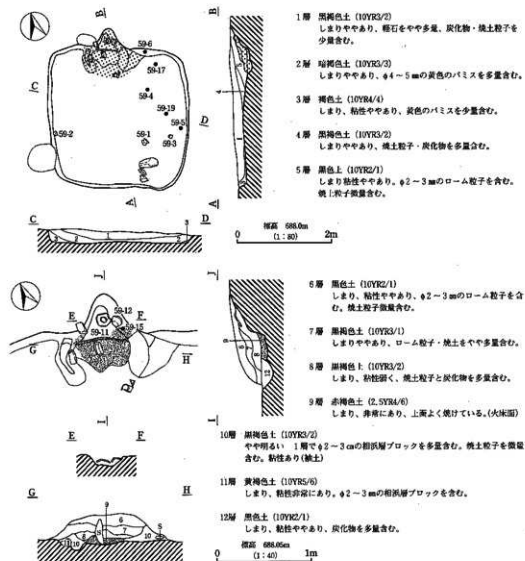
本址からの出土遺物はカマド周辺からのものが多かった。図示した遺物の出土位置は1

と4が覆土中、2はカマド南側床直、3がカマド火床面内、5が床下からである。1は高台付きの須恵器杯で内面見込み部が非常によく磨かれている。2~4は土師器杯でいずれも内面黒色処理されている。5は土師器甕でいわゆるロクロ甕である。6と7は石製品であり、6は覆土中で7は床下より出土した。7は側面に擦り跡と敲き跡がある。石材は6と7ともに輝石安山岩である。

30) I H14号住居址 (第58~60図、写真図版二十六・二十七)

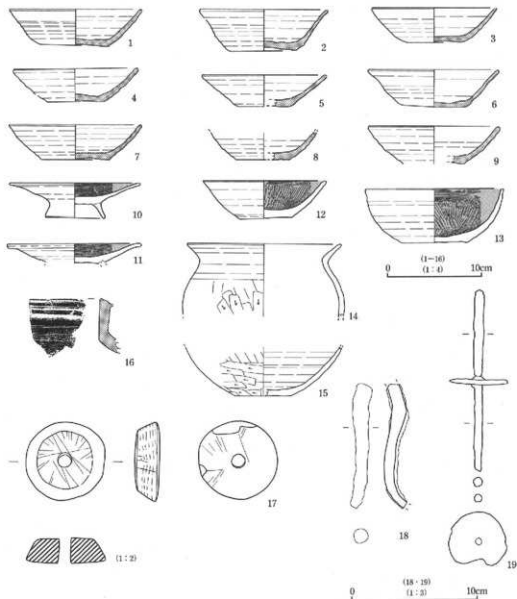
本住居址は、調査区中央部の台地南斜面であるI-ター7・8Grに位置する。残存状態は良好であり、本遺跡には珍しく四方の壁が残存していた。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られていた。規模は北壁2.70m・南壁2.30m・西壁2.62m・東壁2.77mで、壁高さは西壁中央で25cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-13°-Eを示す。住居址の床面積は7.1㎡を測る。覆土は4層で、床は中央部分がやや硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝・ピットは確認されなかった。掘り方はほぼ均一であった。

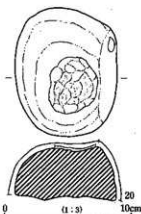


第58図 I H14号住居址実測図

カマドは北壁中央部に造られていた。主軸方位はN-14°-Eを示す。形態は煙道部が壁よりも外に飛び出すタイプのもので、袖は粘質土によって構築されていた。規模は煙道部長さが96cm・幅60cm、右袖長さ58cm・幅20cm、左袖長さ48cm・幅44cmで、火床面の焼土の厚さは9cmを測る。火床面はよく焼けており使用頻度の高さを感ぜさせた。カマド内には火床部ほぼ中央に支脚石が立ったままで検出された。長さは27cm程の自然石であった。また、煙道部には土師器坏と皿が伏せた状態で出土した(写真参照)。しかし、土師器皿に関しては二次焼成を受けた痕跡があるもの



第59図 II H14号住居址出土物実測図①



第20図 H14号住居址出土遺物実測図②

の、土師器環は二次焼成を受けた顕著な痕跡は無く、カマド破棄後に置かれたものかもしれない。

出土遺物は東壁際に多く出土したが、いずれも床面からはやや浮いた状態で出土した。図示した遺物の出土位置は1～5が東壁際、6～9・13・14・16は覆土中、11・12はカマド煙道部、10・15はカマド内である。14と15は土師器環で同一個体と考えられるが接合点がない。17は石製の紡錘車である。18と19は鉄製品で、18が釘、19が紡錘車と考えられる。20は凝灰岩の敲き台の石と考えられ、中央部に敲き痕がある。これらの出土遺物より本址は9世紀前半に位置づけられる。

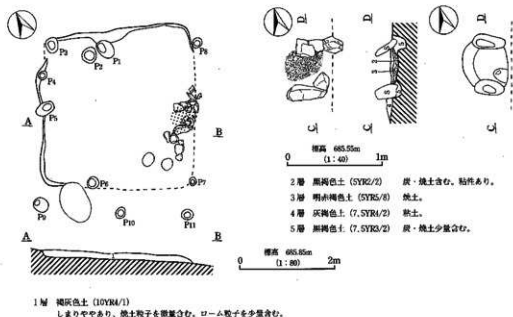
検出番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整		色 調
		口径	器高	器径	外 面 ・ 内 面	胎 土	
1	須恵器環	14.0	3.9	7.2	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	N6/灰 白色・黒色粒子を少量含む
2	須恵器環	13.6	4.4	7.2	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形・足みが激しい 火だすき痕あり	N6/灰 白色粒子を多く含む
3	須恵器環	(13.2)	3.7	(6.2)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	N6/灰 径2～3mmの砂粒少量と白色粒子を含む
4	須恵器環	(13.2)	3.5	6.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	N7/灰白 白色・黒色粒子を少量含む
5	須恵器環	(13.2)	3.4	(5.4)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り 磨かれている	N7/灰白 径2～3mmの黒色粒子を含む
6	須恵器環	14.0	4.0	7.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り 火だすき痕あり	N6/灰 白色・黒色粒子を少量含む
7	須恵器環	(14.0)	3.7	(7.2)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	N6/灰 白色・黒色粒子を含む
8	須恵器環	—	(2.9)	(5.6)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り 火だすき痕あり	N6/灰 白色・黒色粒子を含む
9	須恵器環	(14.0)	4.0	(6.2)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	N6/灰 白色・黒色粒子を含む
10	土師器高台皿	13.8	4.8	6.3	外面 内面	ロクロ成形・底部(調整不明)切り直し 後、黄土貼付 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR8/4 浅黄褐色 径1～2mmの赤色粒子と白色粒子多く含む
11	土師器高台皿	(14.0)	(2.1)	(6.0)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形・黒色処理	5YR7/6 橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を少量含む
12	土師器環	13.0	4.1	5.5	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形・黒色処理	5YR7/6 橙 径1～2mmの赤色粒子を多く含む、白色・黒色粒子を含む
13	土師器環	(14.8)	5.7	7.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り後ヘラケズリ ヘラミガキ・黒色処理	5YR7/6 橙 径2～3mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
14	土師器蓋	(16.4)	(7.6)	—	外面 内面	口縁部～頸部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ	7.5YR7/4 に近い橙 径2～3mmの赤色粒子と白色・黒色粒子を含む
15	土師器蓋	—	(5.2)	6.0	外面 内面	ヘラケズリ ヨコナデ	7.5YR7/4 に近い橙 径2～3mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
16	須恵器蓋	—	(5.7)	—	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形	N6/灰 白色粒子と砂粒を多く含む

第26表 H14号住居址出土遺物観察表

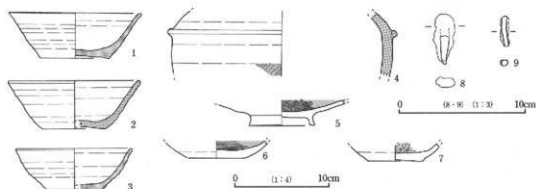
(31) II H15号住居址 (第61・62図、写真図版二十八)

本住居址は、調査区中央部の台地南斜面であるI-ツ-13Grに位置する。残存状態は南東側半分が地形により削平されている。形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは東壁中央に造られている。規模は北壁3.04m・南壁0.4m(残存)3.00m(推定)・西壁2.65m(残存)3.00m(推定)・東壁0.54m(残存)3.34m(推定)で、壁高さは北壁中央で16.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-102°-Eを示す。住居址の床面積は推定で9.9㎡を測る。覆土は1層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は確認されなかった。ピットは11カ所確認され、規模はP1が径40cm・深さ17cm、P2が径32cm・深さ13.5cm、P3が径32cm・深さ23.5cm、P4が径18cm・深さ13cm、P5が径40cm・深さ30cm、P6が径14cm・深さ18.5cm、P7が径17cm・深さ16.5cm、P8が径20cm・深さ19cm、P9が径31cm・深さ15cm、P10が径22cm・深さ14cm、P11が径23cm・深さ23.5cmを測る。これらピットの内P9~P11は検出位置より壁外柱穴と考えられる。住居址掘り方はほぼ均一であった。カマドは東壁中央部に造られていた。残存状況は火床面と袖構築材である礫が崩れたような状態で検出された。火床面の焼土の厚さは6cmを測る。カマド掘り方は両袖部分の礫を埋め込んだピットと火床面下の掘り込みが検出できた。

出土遺物は覆土とカマド周辺より出土した。図示した遺物の出土位置は1~3と7はカマド周辺の床直、4~6は覆土中である。8と9は釘の一部と考えられる。本址は出土遺物より9世紀前半に位置づけられる。



第61図 II H15号住居址実測図



第62図 II H15号住居址出土遺物実測図

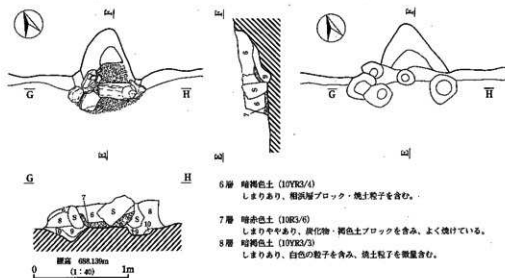
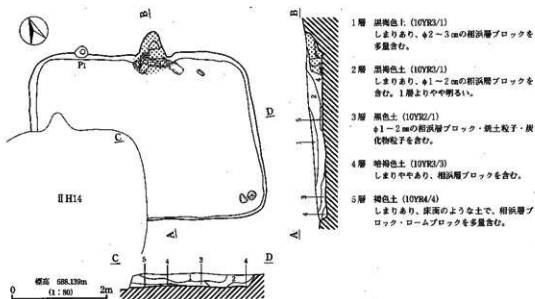
種別 番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 測 量		色 調
		口径	器高	底径	外面	内面	
1	須恵器 杯	(14.0)	5.1	(6.6)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	7.5Y7/1 灰白 径2~3mmの噴出物を多量。白色粒子 を微量含む
2	須恵器 杯	(14.0)	4.8	7.2	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	N6/灰 白色粒子を多く含む
3	須恵器 杯	(12.4)	4.4	(5.6)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形	N6/灰 白色粒子を多く含む
4	須恵器 四耳壺	---	(6.9)	---	外面 内面	タタキ後、ヨコナデ・自然軸付着 ナデ	N4/1 灰(内面) 黒色粒子を微量含む
5	土師器 高台皿	---	(2.7)	7.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り?後、高 台貼付 ヘラミガキ・黒色処理	7.5Y7/4 にびい型 径1~2mmの赤色粒子少量と砂粒多量 含む
6	土師器 杯	---	(1.9)	6.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形・黒色処理	7.5Y7/4 にびい型 径2~3mmの赤色粒子を多く含む
7	土師器 杯	---	(2.0)	6.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラミガキ	7.5Y8/3 浅黄橙 径1~2mmの赤色粒子微量と白色粒子 多量含む

第27表 II H15号住居址出土遺物観察表

[3] II H17号住居址 (第63・64図、写真図版二十九、三十)

本住居址は、調査区中央部台地の南斜面であるI-ター7、I-チー7・8Grに位置する。残存状態は南西コーナー部分がII H14号住居址によって削平されている他は良好である。重複遺構はII H14号住居址があり、新旧関係は本址の方が古い。

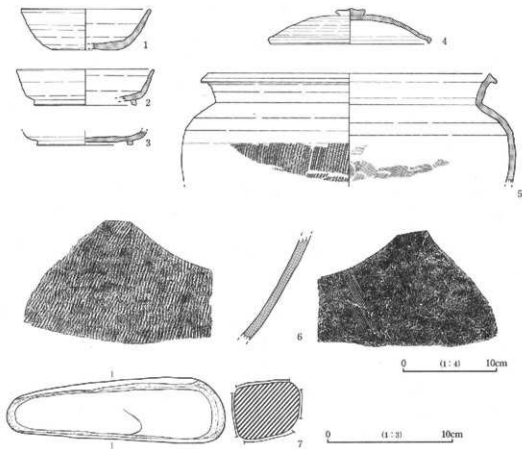
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央部に造られている。規模は北壁4.23m・南壁2.47m(残存)4.53m(推定)・西壁1.50m(残存)3.3m(推定)・東壁3.12mを測る。壁高さは北東コーナーで29cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-13°-Eを測る。住居址の床面積は残存で10.8㎡、推定で15.1㎡を測る。覆土は5層に分かれる。床は全体的に硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは床面で1カ所が確認され、規模はP1が径28cm・深さ32cmを測る。住居址掘り方はほぼ均一であった。



- 9層 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり、大型の焼土ブロック・相沢層のブロックを含む。
- 10層 褐色土 (10YR4/1) しまりあり、相沢層ブロックを含む。

第63図 II H17号住居址実測図

カマドは北壁中央部に造られている。煙道部が壁よりやや飛び出すタイプである。袖部は粘質土と糠により構築し、天井部は長さ80cmの腰を高架状に掛けていたと考えられる。規模は煙道部が長さ87cm・幅40cm、右袖長さ20cm・幅16cm、左袖長さ43cm・幅18cmを測る。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは10cmを測る。



第64図 II H17号住居址出土遺物実測図

検出 番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整 外 面 ・ 内 面	色 調 敷 土
		口径	器高	底径		
1	須恵器 鉢	(12.8)	4.4	(7.6)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、周辺部 手持らへウケズリ 内面 ロクロ成形	N6/灰 厚 2-3mmの黒色・白色の噴出物と、 白色粒子を多量含む
2	須恵器 高台杯	(14.6)	4.8	(10.8)	外面 ロクロ成形・底部(調整不明)切り離し後、 高台貼付 内面 ロクロ成形	2.5GY 6/1 オリーブ灰 黒色の噴出物を微量と白色粒子を含む
3	須恵器 鉢	—	(1.5)	(10.2)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、ヘウケ ズリ 高台貼付 内面 ロクロ成形・磨かれている	2.5GY 7/1 明オリーブ灰 白色・黒色粒子を多く含む
4	須恵器 蓋	16.8	3.8	つまみ 径 3.0	外面 ロクロ成形・天井部回転へウケ切り後、つまみ 部貼付 内面 ロクロ成形 火だすき痕あり	N5/灰 白色粒子を微量含む
5	須恵器 蓋	(30.0)	(11.5)	—	外面 I線部ココナデ・脚部格子目のタタキ後、 ココナデ 内面 I線部ココナデ・脚部ハクメの残るナデ の後、ココナデ	N3/暗灰(内面) 白色粒子を多く含む
6	須恵器 蓋	—	(16.0)	—	外面 平行タタキ目が残る 内面 ナデ後、工具使用(クシ?)	N7/灰白 白色粒子を多く含む

第28表 II H17号住居址出土遺物観察表

本址の出土遺物は覆土中からと南東コーナー部分から出土した。図示した遺物の出土位置は 1

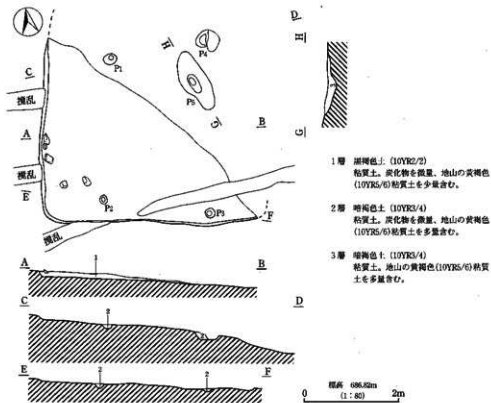
が南東コーナー、2と3がカマド左脇、5が北西コーナー、6が北東コーナー、7が覆土中である。7はすり石で、石材は輝石安山岩であった。

これらの出土遺物より本址は8世紀後半に位置づけられる。

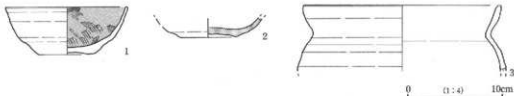
⑬ II H19号住居址 (第65・66図、写真図版三一①)

本住居址は、調査区中央部の台地北斜面であるE-ター18・19、E-チ-18・19Grに位置する。残存状態は北東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は南壁4.43m(残存)・西壁3.82m(残存)で、壁高さは南壁中央で11.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-6°-Eを示す。住居址の床面積は残存で10.3㎡を測る。覆土は1層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は確認されなかった。ピットは5カ所確認され、規模はP1が径27cm・深さ23cm、P2が径18cm・深さ7cm、P3が径20cm・深さ6cm、P4が径34cm・深さ14cm、P5が径42cm・深さ20cmを測る。これらピットの内P1~P3・P5は検出位置より支柱穴と考えられる。住居址掘り方はほぼ均一であった。



第65図 II H19号住居址実測図



第66図 II H19号住居址出土遺物実測図

検出番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面・内 面		
1	土師器 杯	(13.0)	5.0	6.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転車切り ヘラミカキ・黒色処理	7.5YR7/3 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子を含む砂粒少量含む
2	須恵器 (軟質) 杯	—	<2.0>	6.1	外面 内面	ロクロ成形・底部回転車切り ロクロ成形	N3/暗灰 径1~2mmの赤色粒子多量と白色・黒色粒子を含む
3	土師器 罎	21.0	<7.0>	—	外面 内面	ロクロ成形 口縁部ロクロ成形・脚部ナデ	7.5YR7/6 橙 径2~3mmの赤色粒子多量と砂粒少量含む

第29表 II H19号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土と南西コーナー付近からまとまって出土した。図示した遺物の出土位置は1は南西コーナー、2と3はP5脇の床面から出土した。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

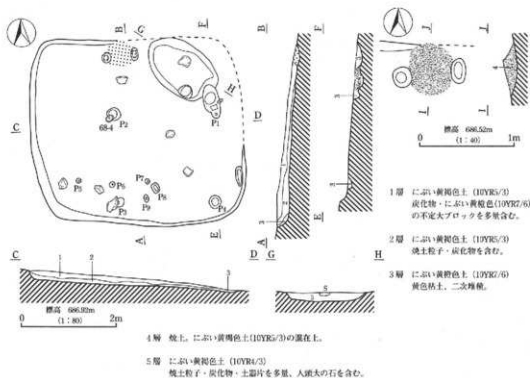
④ II H20号住居址（第67・68図、写真図版三十一②）

本住居址は、調査区中央部の台地北斜面であるE-ソー17・18、E-ター17・18Grに位置する。残存状態は北東コーナー側が地形により削平されている。

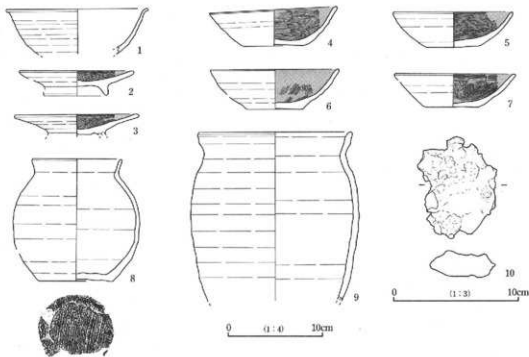
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁1.60m（残存）3.85m（推定）・南壁3.75m・西壁3.66m・東壁1.47m（残存）3.6m（推定）を測る。壁高さは南西コーナーで38cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-6°-Wを示す。住居址の床面積は推定で15.3㎡を測る。覆土は2層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は確認されなかった。ピットは9カ所確認され、規模はP1が径73cm・深さ22cm、P2が径27cm・深さ29cm、P3が径21cm・深さ42cm、P4が径26cm・深さ8cm、P5が径9cm・深さ4.5cm、P6が径13cm・深さ4.5cm、P7が径10cm・深さ10cm、P8が径22cm・深さ6.5cm、P9が径15cm・深さ6cmを測る。また、本址は北東コーナー部分に床下土坑が検出された。規模は長軸1.66m・短軸1.04mで深さ27cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一であった。

カマドは火床部と袖構架材の掘り込み跡と思われるピットのみ検出された。火床部の焼土の厚さは14cmでよく焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は覆土および土坑内からおもに出土した。図示した遺物の出土位置は4がP2の脇の床面、5・7~9は土坑内、その他は覆土中の出土である。1は灰釉陶器碗である。



第67図 II H20号住居地実測図



第68図 II H20号住居地出土遺物実測図

2と3は土師器皿、4～7は土師器杯で内面黒色処理が施されている。8はロクロ成形の土師器小型甕で、底部は静止糸切り産しが行われている。9は土師器甕で、10は鉄滓と考えられる。これらの出土遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

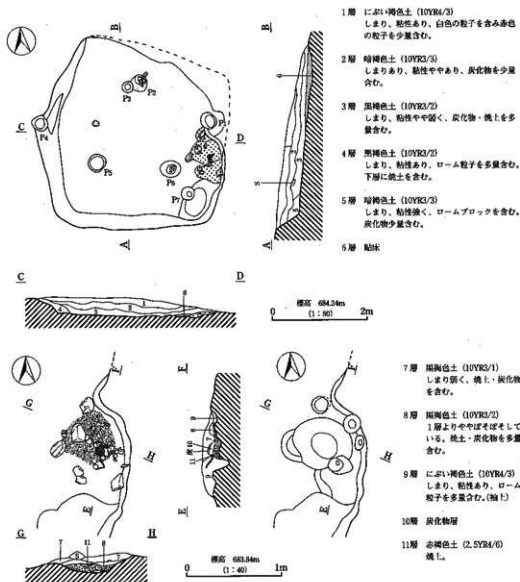
図号 番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面 ・ 内 面		胎 土
1	灰 軸 桶	(15.0)	<4.8>	—	外面 内面	ロクロ成形・施釉 ロクロ成形・施釉	2.5GY8/1 灰白 良く精練されている
2	土師器 高白皿	12.1	2.7	6.6	外面 内面	ロクロ成形・底部ナデ後、高台貼付 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/2 明焼灰 径1～2mmの赤色粉と微量と白色・黒色粉を多量に含む
3	土師器 高白皿	13.2	2.2	—	外面 内面	ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後、高台貼付 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/2 明焼灰 径1～2mmの赤色粉と微量と砂粒を含む
4	土師器 杯	13.5	4.1	6.6	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り 覆付者 ヘラミガキ・黒色処理	5YR7/6 緑 径1～2mmの赤色粉と砂粒を多量に含む
5	土師器 杯	12.7	3.8	3.5	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3 に近い橙 径2～3mmの赤色粉と砂粒を多量に含む
6	土師器 杯	(13.7)	4.2	6.0	外面 内面	ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR8/4 浅黄橙 径1～2mmの赤色粉を多量に含む
7	土師器 杯	(12.8)	4.5	5.5	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3 に近い橙 径2～3mmの赤色粉と砂粒を多量に含む
8	土師器 小形甕	(9.5)	12.9	8.0	外面 内面	ロクロ成形・底部静止糸切り ロクロ成形	7.5YR7/3 に近い橙 径1～2mmの赤色粉と微量と微細な黒色粉を多量に含む
9	土師器 甕	(16.0)	<17.9>	—	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形	5YR7/6 緑 径2～3mmの赤色粉を多量に含む

第30表 II H20号住居址出土遺物観察表

㉓ II H22号住居址 (第69・70図、写真図版三十二)

本住居址は、調査区中央部の台地北斜面であるF-ア-17、F-イ-16・17Grに位置する。残存状態は北東コーナー側が地形により削平されている。

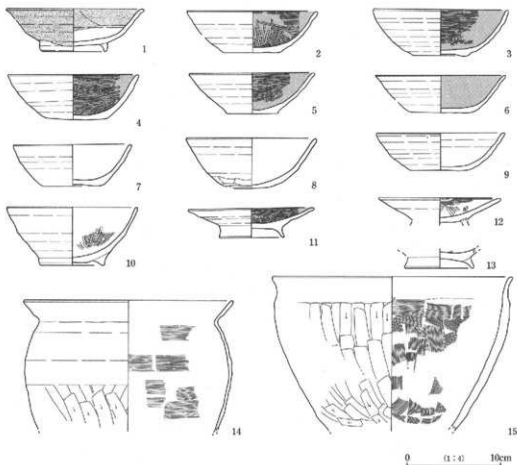
形態はほぼ方形を呈すると考えられるが、西壁中央部がやや外側に張り出し直線をなしていない。カマドは東壁南よりに造られている。規模は北壁3.12m(推定)・南壁3.18m・西壁3.85m・東壁1.73m(残存)3.06m(推定)を測る。壁高さは南西コーナーで53cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-87°-Eを示す。住居址の床面積は残存で10㎡、推定で11.1㎡を測る。覆土は5層に分れ、下層に炭化物・焼土を含む。床は全体的に軟質であり、一部に貼床が観察された。貼床は厚さ12cmを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは7カ所確認され、規模はP1が径36cm・深さ11cm、P2が径35cm・深さ17cm、P3が径23cm・深さ10cm、P4が径35cm・深さ32cm、P5が径40cm・深さ10cm、P6が径43cm・深さ4.5cm、P7が径27cm・深さ17cmを測る。また、本址は南東コーナー部分に床下土坑が検出された。規模は長軸97cm・短軸53cmで深さ20cmを測る。住居址の掘り方は東側に凹凸がみられた。



第69図 II H22号住居址実測図

カマドは東壁やや南よりに検出された。残存状態は不良で、火床部と袖構築材の掘り込み跡と思われるピットのみ検出された。火床部の焼土の厚さは10cmでよく焼けており硬質化していた。また、火床面には多くの遺物が散乱した状態で出土した。

本址からの出土遺物は覆土やカマド及び土坑内からおもに出土した。図示した遺物の出土位置は9がP2上、14・15が覆土中であり、それ以外のはカマド及び土坑内から出土した。1は灰釉陶器碗である。内面みこみ部が非常によく磨かれている。2から9は土師器環である。



第70図 II H22号住居址出土遺物実測図

いずれもロクロ成形で、2から6は内面黒色処理が施されている。8は底部外面が手持ちヘラケズリが施されている。10は土師器椀で、11から13は土師器高台付皿である。いずれも内面が丁寧なヘラミガキが施されている。14は土師器甕であり、ロクロ成形の後胴部下半分はヘラケズリが施されている。15は土師器鉢であり底部を欠損する。外面はヘラケズリ、内面はハケ目の残るナデが施されている。

これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

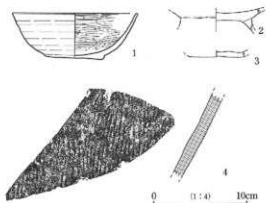
〔6〕II H23号住居址（第71・72図、写真図版三十三）

本住居址は、調査区中央部の台地東斜面であるIーシー16・17Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁側に造られている。規模は北壁0.86m（残存）・南壁1.07m（残存）・西壁3.23mを測る。壁高さは南西コーナーで36cmを測る。壁は緩やかに立

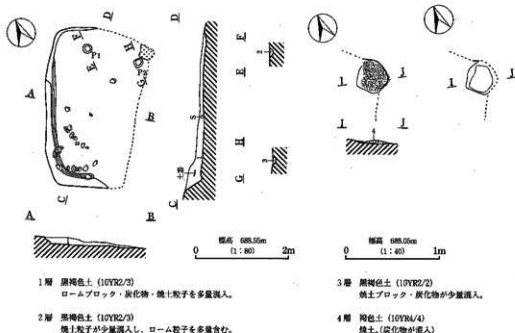
神田 番号	器種	法 量(m)			成 形 - 調 整		色 調	
		口径	器高	底径	外 面 - 内 面		胎 土	
1	灰 輪 陶	(14.8)	4.6	(7.6)	外面 内面	ロクロ成形・高台貼付後、ハケ塗りで輪飾 ロクロ成形 良く磨かれている	2.5GY 8/1 灰白	径1~2mmの赤色粒子を多く含む
2	土師器 杯	(13.8)	4.4	6.2	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 7/4 に近い橙	径1~2mmの赤色粒子多量と砂粒微量含む
3	土師器 杯	(14.2)	4.9	5.8	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 7/3 に近い橙	径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒多量含む
4	土師器 杯	13.8	4.8	6.6	外面 内面	ロクロ成形・底部ヘラケズリ ヘラミガキ・黒色処理	5YR 5/2 灰橙	径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒多量含む
5	土師器 杯	(13.4)	4.0	5.6	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラミガキ・黒色処理	5YR 7/6 橙	径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒を含む
6	土師器 杯	(13.7)	4.0	6.0	外面 内面	ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ ナデ 燻付着 黒色処理	7.5YR 7/4 に近い橙	径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒少量含む
7	土師器 杯	(12.6)	4.4	6.2	外面 内面	ロクロ成形・底部調整不明 ナデ	5YR 6/6 に近い橙	径2~3mmの赤色粒子多量と砂粒を含む
8	土師器 杯	(13.8)	5.4	5.0	外面 内面	ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ ナデ	5YR 6/6 橙	径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多量に含む
9	土師器 杯	(13.6)	4.0	(6.4)	外面 内面	ロクロ成形・底部ヘラケズリ ロクロ成形	7.5YR 6/1 褐色	砂粒を多く含む
10	土師器 碗	(13.8)	6.2	6.8	外面 内面	ロクロ成形・底部回転手持ちヘラケズリ 後、高台貼付 ヘラミガキ	7.5YR 7/4 に近い橙	径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒少量含む
11	土師器 高台皿	13.4	3.2	7.0	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 7/3 に近い橙	径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒少量含む
12	土師器 高台皿	13.0	(2.7)	5.5 (筒部分)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 ヘラミガキ	7.5YR 7/3 に近い橙	径2~3mmの赤色粒子と砂粒を少量含む
13	土師器 杯	—	(2.1)	7.3	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 ヘラミガキ	5YR 7/6 橙	径1~2mmの赤色粒子を含む砂粒多量含む
14	土師器 甕	(22.2)	(13.9)	—	外面 内面	口縁部ココナデ・胴部ロクロ引きの後、 ヘラケズリ 口縁部ココナデ・胴部ハケメの残るナデ	7.5YR 7/3 に近い橙	径2~3mmの赤色粒子と砂粒を含む
15	土師器 鉢	(25.6)	(16.3)	—	外面 内面	口縁部ココナデ・胴部ヘラケズリ 口縁部ココナデ・胴部ハケメの残るナデ	5YR 7/4 に近い橙	径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多量に含む

第31表 II H22号住居址出土遺物観察表



第71図 II H23号住居址出土遺物実測図

ち上がる。主軸方位はN-24°-Eを示す。住居址の床面積は残存で5.3㎡を測る。覆土は1層で、下層に炭化物・焼土を含む。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と南壁の一部に確認された。断面形はU字形で、規模は幅6~10cm・深さ8cmを測る。ピットは2カ所確認された。規模はP1が径20cm・深さ10cm、P2が径19cm・深さ10cmを測る。カマドは北壁際に検出されたが、大部分が削平されており、袖等の形態は不明である。火床面は円形の掘り込みに焼土が薄く堆積していた。



第72図 II H23号住居址実測図

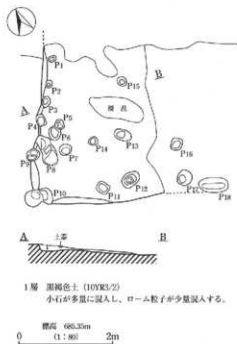
本址からの出土遺物は住居址南西コーナー脇から礎と共に多く出土した。図示した遺物の内1は南西コーナーよりの出土で、他のものは覆土中からの出土である。1と3は土師器杯、2は土師器椀、4は須恵器甕の胴部破片である。

これらの出土遺物より本址は9世紀後半以降に位置づけられると考える。

押図 番号	器種	法 量 (cm)			成形・調整 外面・内面	色 調	
		口径	器高	底径		胎	上
1	土師器 杯	(13.2)	4.8	6.0	外面 ロクロ成形・底面回転糸切り 内面 ヘタミガキ	5YR7/4	にぶい橙 径1-2mmの赤色粒子多量と砂粒を含む
2	土師器 椀	---	(2.4)	---	外面 ロクロ成形・底面回転糸切り後、高内貼付 内面 ロクロ成形後、ナデ (接合痕あり)	5YR7/6	橙 径2-3mmの赤色粒多量と砂粒を含む
3	土師器 杯	---	---	5.7	外面 底面回転糸切り 内面 ロクロ成形・黒色処理	2.5Y2/1	黒 径1-2mmの赤色粒子を少量含む
4	須恵器 甕	---	---	---	外面 平行タタキ 内面 ナデ	N6/灰	黒色・白色粒子を含む

第32表 II H23号住居址出土遺物観察表

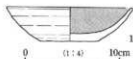
③Ⅱ H24号住居址 (第73・74図、写真図版三十四①)



第73図 Ⅱ H24号住居址実測図

cm、P7が径24cm・深さ19cm、P8が径67cm・深さ29cm、P9が径27cm・深さ37cm、P10が径60cm・深さ61cm、P11が径26cm・深さ32cm、P12が径40cm・深さ40cm、P13が径36cm・深さ24cm、P14が径20cm・深さ18cm、P15が径22cm・深さ20cm、P16が径24cm・深さ16cm、P17が径32cm・深さ33cm、P18が径61cm・深さ26cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土を中心に土師器坏片が数点出土した。図示した土師器坏は住居址中央の床直より出土した。



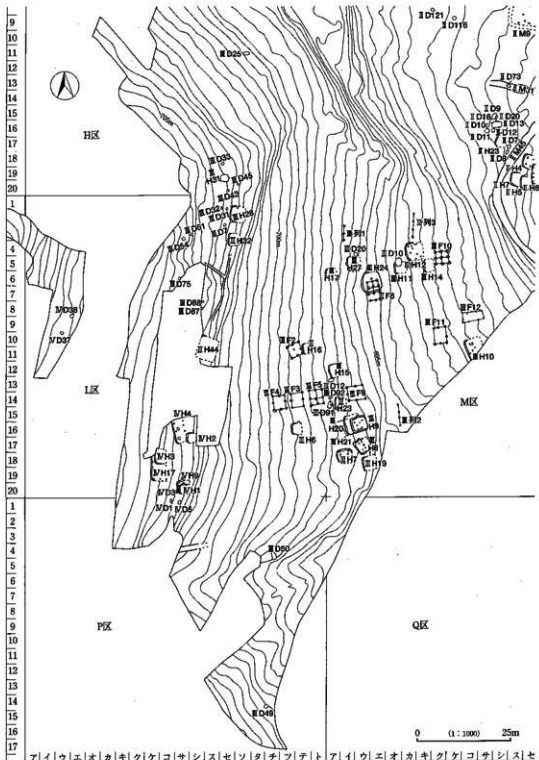
第74図 Ⅱ H24号住居址出土遺物実測図

検出 番号	器種	法 量(cm)			成形・調整 外面・内面	色 調
		口径	器高	底径		
1	土師器 坏	(12.9)	3.8	5.0	外面 ロクロ成形・底面回転車切り 内面 調整不明・黒色処理	7.5YR 7/4 に近い相 径1~2mmの砂粒を多く含む

第33表 Ⅱ H24号住居址出土遺物観察表

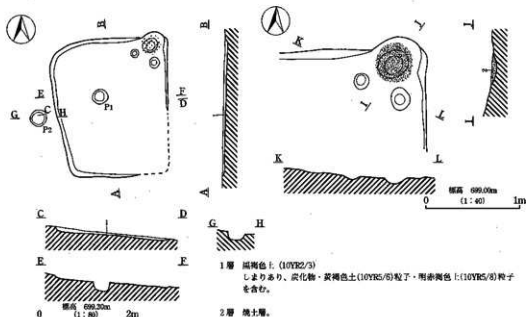
本住居址は、調査区中央部の東斜面である1ーチー16・17、1ーツー16・17Grに位置する。残存状態は住居址の南西コーナー部分しか残存していない。

形態はほぼ方形を呈すると考えられるが、先にも述べたとおり残存部が少ない為詳細は不明である。カマドは不明である。規模は南壁2.80m(残存)・西壁3.35m(残存)を測る。壁高さはP8とP9の間で12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-21°-Eを示す。住居址の床面積は残存で6.9㎡を測る。覆土は1層であった。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは18カ所確認され、規模はP1が径18cm・深さ19cm、P2が径17cm・深さ17cm、P3が径23cm・深さ24cm、P4が径25cm・深さ25cm、P5が径20cm・深さ20cm、P6が径28cm・深さ28



第75図 Ⅲ区奈良・平安時代遺構全体図

38) III H 6 号住居址 (第76・77図、写真図版三十四②)

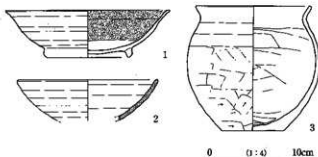


第76図 III H 6 号住居址実測図

本住居址は、調査区上部台地の東斜面である L-ツ-16, L-テ-16Gr に位置する。残存状態は南東コーナーが地形の傾斜によって削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられ、カマドは住居址北東コーナーに造られている。規模は北壁2.32m・南壁1.45m(残存)2.03m(推定)・西壁2.56m(残存)・東壁1.64m(残存)2.86m(推定)で、壁高さは南西コーナー部分で15cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-3°-Wを示す。住居址の床面積は推定で6.0㎡を測る。覆土は1層で、床は住居址カマド周辺部にかけて硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは2カ所検出され、規模はP1が径34cm・深さ19cm、P2が径36cm・深さ19cmを測る。

カマドは住居址北東コーナーに造られていた。残存状態は不良で、袖構築材の掘り込みと考え



第77図 III H 6 号住居址出土遺物実測図

られるピットが2カ所と火床面のみ確認できた。火床面の焼土の厚さは4cmを測り硬質化していた。

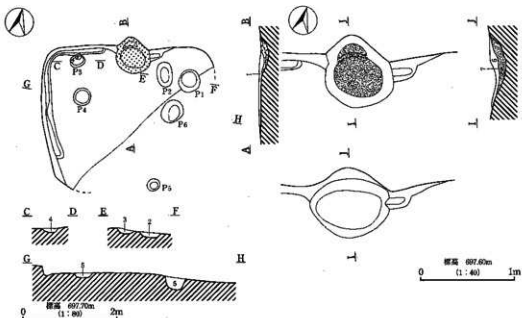
出土遺物は覆土中からのものが殆どで、図示した遺物の出土位置もすべて覆土中である。1は灰釉陶器碗である。内面がよく磨かれ何らかの転用の結果とも考えられる。2は須

恵器環で、3は土師器小型甕である。よってこれらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

調査 番号	器種	法 量(m)			成 形・調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面・内 面		胎 土
1	灰胎 碗	(17.4)	5.0	(9.4)	外面 内面	ロクロ成形・鉋平回転糸切り後、高台貼付・施釉 ロクロ成形 良く磨かれている	7.5Y8/2 灰白 良く精練されている
2	土師器 環	(15.0)	(4.3)	—	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形	7.5YR5/1 褐色 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
3	土師器 小型甕	(12.2)	13.3	(6.4)	外面 内面	ロクロ成形・胴部中央ヘラナゲ後、胴部 下半~底部ヘラケズリ ロクロ成形・胴部~底部ヘラナゲ	7.5YR5/2 灰褐色 径2~3mmの赤色粒子を多く含む

第34表 ⅢH6号住居址出土遺物観察表

(3) ⅢH7号住居址 (第78・79図、写真図版三十五)



- 1層 照褐色土 (10YR3/2) しまりあり、炭化物片・赤褐色土粒子・黄褐色土粒子を含む。
- 2層 照褐色土 (10YR3/2) 炭化物片・黄褐色土粒子を含む。
- 3層 照褐色土 (10YR3/2) 炭化物片・黄褐色土粒子・焼土を含む。
- 4層 照褐色土 (10YR2/3) 炭化物片・焼土を多量に含む。
- 5層 照褐色土 (10YR3/2) 炭化物片・黄褐色土粒子を含む。
- 6層 赭褐色土 (7.5YR2/3) 粘質土。炭化物片・焼土粒を多量に含む。
- 7層 赤褐色土 (2.5YR4/6) 火床面。

第78図 ⅢH7号住居址実測図

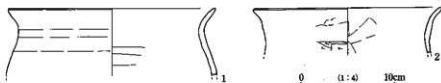
本住居址は、調査区上部台地の南よりであるM-ア-17・18、M-イ-17・18Grに位置する。残存状態は南東側半分を地形によって削平されており、住居址全体の1/2ほどの検出に止まった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.23m・南壁0.32m(残存)

2.9m(推定)・西壁2.8m・東壁0.36m(残存)2.74m(推定)で、壁高さは北西コーナー付近で19cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-14°-Wを示す。住居址の床面積は残存部で1.3㎡・推定で9.4㎡を測る。覆土は1層であった。床はカマド周辺が硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と北壁西側で確認された。規模は幅12~30cm・深さ6.5cmで、断面形はU字形であった。ピットは6カ所確認された。規模はP1が径47cm・深さ11cm、P2が径53cm・深さ12cm、P3が径32cm・深さ9cm、P4が径37cm・深さ7cm、P5が径25cm・深さ6cm、P6が径50cm・深さ28cmを測る。

カマドは北壁中央部に造られていたが、火床面のみしか残存していなかった。火床部はよく焼けており焼土が硬質化していた。焼土の厚みは9cmを測る。袖部・天井部の形態は不明である。

出土遺物は覆土中からのものが殆どで、図示した遺物の出土位置もいずれも覆土である。よって本址の所産時期は不確定であるが9世紀後半以降と考えられる。



第79図 III H 7号住居址出土遺物実測図

調査 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面・内 面	胎 土	
1	土師器 甕	(22.0)	(7.2)	---	外面 内面	ロクロ成形・頸部にカキメ	7.5YR 7/4 に近い橙 係1~2mmの赤色粒子と砂粒を含む
						ロクロ成形・胴部ナデ	
2	土師器 甕	(20.0)	(5.0)	---	外面 内面	口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ	2.5YR 6/8 橙 黒色の砂粒を含む
						口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	

第35表 III H 7号住居址出土遺物観察表

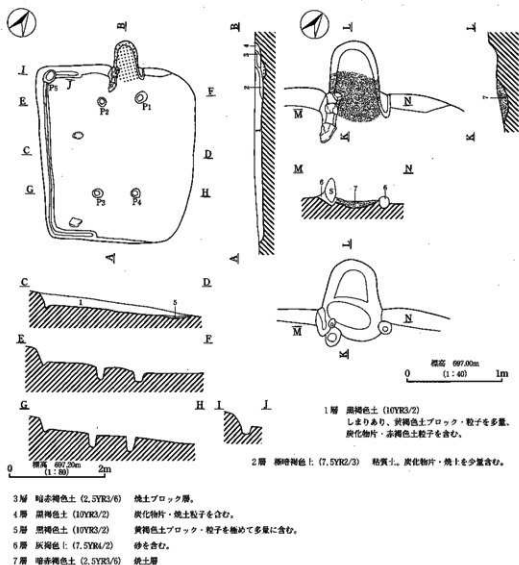
(40) III H 8号住居址 (第80図、写真図版三十六)

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM-イー17・M-ウー17・18Grに位置する。残存状態は東壁が地形の傾斜のために削平されている他は良好であった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.17m・南壁2.5m・西壁3.56m・東壁3.25m(推定)で、壁高さは北西コーナー付近で28cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-32°-Wを示す。住居址床面積は残存部で10.0㎡を測る。覆土は1層のみである。床は全体に軟質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁の全体と北壁と南壁の一部に確認された。規模は幅16~25cm・深さ8cmを測り、断面形はU字形である。ピットは5カ所検出され、規模はP1が径26cm・深さ23cm、P2が径20cm・深さ26cm、P3が径20

cm・深さ26cm、P4が径20cm・深さ36cm、P5が径28cm・深さ18cmを測る。検出位置よりP1-P4までが住居址の支柱穴と考えられる。カマドは北壁中央に検出された。形態は煙道部が住居址壁よりも大きく飛び出すタイプのものである。袖は粘質土と礫によって造られていた。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは9cmを測る。また、掘り方時に袖部において構築礎等を設置したと考えられるピットが検出された。

本址からの出土遺物は土師器(内面黒色処理)・甕等の破片が出土したが図示可能なものはなく、時期も不明である。

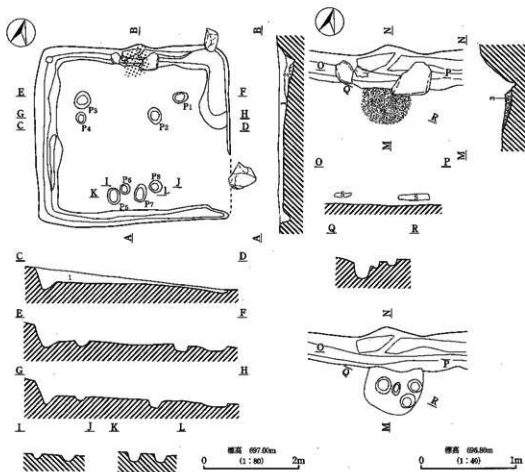


第80図 ■H8号住居址実測図

(4)ⅢH9号住居址 (第81・82図、写真図版三十七)

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM-イ-15・16・M-ウ-15・16Grに位置する。残存状態は東壁の一部が地形の傾斜のために削平されている他は良好であった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.75m・南壁4.02m・西壁3.55m・東壁2.24m(残存)3.48m(推定)で、壁高さは北西コーナー付近で45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-16°-Wを示す。住居址床面積は10.3㎡を測る。覆土は1層のみである。床は全体に軟質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は住居址全体に巡っていたと考えられる。特に東壁側の溝幅は非常に広い。壁溝規模は幅16~50cm・深さ20cmで、断面形はU字形を示す。ピットは8カ所検出された。規模はP1が径32cm・深さ16cm、P2

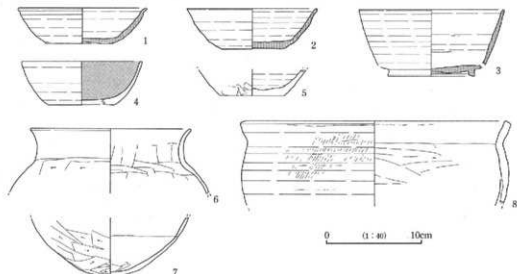


- 1層 黒褐色土 (10YR3/2) 黄褐色土ブロック・粒子を多量、炭化物片・赤褐色土粒子を含む。
- 2層 暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘質土、炭化物片・焼土を多量に含む。
- 3層 焼土層

第81図 ⅢH9号住居址実測図

が径34cm・深さ19cm、P3が径38cm・深さ11cm、P4が径25cm・深さ8cm、P5が径34cm・深さ20cm、P6が径20cm・深さ12cm、P7が径36cm・深さ19cm、P8が径26cm・深さ14cmを測る。

カマドは北壁中央に検出された。形態は煙道部が住居址壁よりもあまり飛び出さないタイプのものである。袖は粘質土と礫によって造られていたと考えられるが、扁平な礫のみ袖部で検出された。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは7cmを測る。また、掘り方時に火床面下において4カ所のビットが検出された。



第82図 ■H9号住居址出土遺物実測図

調査番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面 ・ 内 面		
1	須恵器 平	13.7	3.8	7.1	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	5Y6/1 灰
					内面	ロクロ成形 ※火だすき痕あり	径2～3mmの黒色粒子微量と白色粒子多量含む
2	須恵器 平	(13.8)	4.3	6.6	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5Y5/1 灰
					内面	ロクロ成形 ※内外面火だすき痕あり	径2～3mmの黒色粒子多量と砂粒微量含む
3	須恵器 高白平	(15.4)	(7.1)	9.2	外面	ロクロ成形・底部切り離し後、回転ヘラケズリ・高台貼付	7.5Y6/1 灰
					内面	ロクロ成形	径1～2mmの黒色粒子と砂粒を少量含む
4	土師器 平	(12.8)	4.6	(7.0)	外面	ロクロ成形・底部調整不明	5YR7/4 に近い橙
					内面	調整不明・黒色処理	径1～2mmの赤色粒子を少量含む
5	土師器 小型鉢	—	(2.8)	(6.6)	外面	底部および底部周縁手持ちヘラケズリ	7.5YR7/4 に近い橙
					内面	ロクロ成形	径1～2mmの赤色粒子微量と砂粒多量含む
6	土師器 甕	(17.1)	(6.9)	—	外面	口縁部ヨコナデ後、胴部ヘラケズリ	5YR7/6 橙
					内面	口縁部ヨコナデ後、胴部ヘラケズリ ※7と同一体の可能性	径1～2mmの赤色粒子微量と砂粒多量含む
7	土師器 甕	—	6.2	—	外面	ヘラケズリ	5YR7/6 橙
					内面	ヘラケズリ ※6と同一体の可能性	径1～2mmの赤色粒子微量と砂粒多量含む
8	土師器 鉢	(28.8)	(8.9)	—	外面	ハケメ調整後、ヨコナデ(ロクロ使用)	7.5YR7/4 に近い橙
					内面	口縁部ヨコナデ(ロクロ使用)後、胴部ナデ	径1～2mmの赤色粒子を微量含む

第36表 ■H9号住居址出土遺物観察表

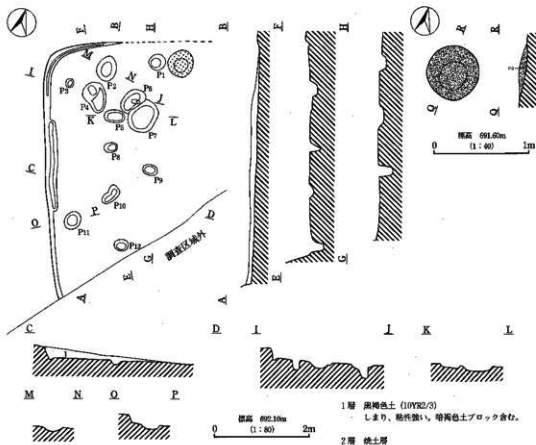
本址からの出土遺物は覆土を中心にカマド・壁溝内から出土した。図示した遺物の出土位置は1が南西コーナー部、3・6・7がカマド内、その他のものは覆土及び壁溝内よりである。1と2は須恵器坏、3は須恵器高台付坏、4は土師器坏、5～7は土師器甕で、6と7は同一個体の可能性がある。8は土師器鉢である。

これらの遺物より本址は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

42) III H10号住居址 (第83・84図、写真図版三十八①)

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM-コー10・11Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平され、南側は調査区域外であった。

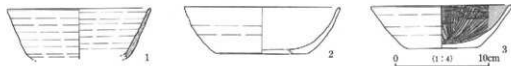
形態は方形を呈すると考えられる。カマドは火床面的な部分が北壁側より検出された。規模は北壁1.52m(残存)・西壁5.17m(残存)で、壁高さは西壁中央部で24cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-18°-Wを示す。住居址の床面積は残存で11.8㎡を測る。覆土は1層の



第83図 III H10号住居址実測図

みで、床は軟質であった。壁溝は北西コーナー部分と西壁中央部に確認された。規模は幅8~25cm・深さ5cmを測る。ピットは12カ所検出され、規模はP1が径34cm・深さ13.5cm、P2が径55cm・深さ9cm、P3が径20cm・深さ21cm、P4が径66cm・深さ17cm、P5が径42cm・深さ6cm、P6が径60cm・深さ29cm、P7が径71cm・深さ12.5cm、P8が径28cm・深さ21cm、P9が径31cm・深さ30cm、P10が径45cm・深さ11cm、P11が径37cm・深さ6cm、P12が径30cm・深さ26cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。カマドは北壁よりに火床面的な焼土が確認された。焼土は硬質化しており、厚さは7cmを測る。

出土遺物は覆土中からの出上りがほとんどであり、図示した遺物も覆土中からの出土である。1は須恵器環、2と3は土師器環で、3は内面黒色処理されている。よって本址はこれらの遺物より不確実ではあるがおおよそ9世紀前半に位置づけられる。



第84図 ⅢH10号住居址出土遺物実測図

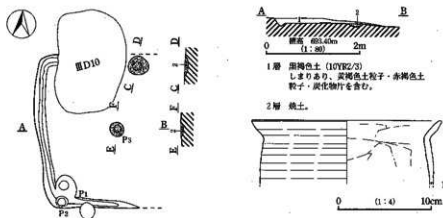
検出 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面・内 面		筋 土
1	須恵器 環	(15.2)	<(5.4)	---	外面	ロクロ成形・底面切り離し後、高台縁付 裏自然釉付着	N6/灰
					内面	ロクロ成形	黒色粒子を微量含む
2	土師器 環	(15.6)	5.0	(9.8)	外面	ロクロ成形・底面切り離し後、手持ちヘ ラクズリ	2.5YR6/8 體
					内面	ナデ後、黒色処理	径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒多量 を含む
3	土師器 環	(15.0)	4.5	(7.8)	外面	ロクロ成形・底面回転未切り?	7.5YR8/4 浅黄橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径2~3mmの赤色粒子微量と砂粒を含む

第37表 ⅢH10号住居址出土遺物観察表

(4)ⅢH11号住居址 (第85図、写真図版三十八②)

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM-オー5・6・M-カー5・6Grに位置する。残存状態は東側が地形により削平されており、また重複するⅢD10号土坑によって北壁が壊されている。重複遺構はⅢD10号土坑で本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁側と住居址中央部に火床部的な焼土が確認されている。規模は北壁0.38m(残存)・南壁1.96m(残存)・西壁3.05mで、壁高さは南西コーナーで14cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-9°-Wを示す。住居址の床面積は残存で4.6㎡を測る。覆土は1層のみであった。床は硬質であり、地山を踏み固めた様な状態であった。壁溝は北壁と西壁・南壁で確認された。規模は幅14~24cm・深さ5cmで、断面の形態はU字形である。ピットは3カ所確認され、規模はP1が径43cm・深さ14cm、P2が径26cm・深さ



第85図 III H11号住居址実測図

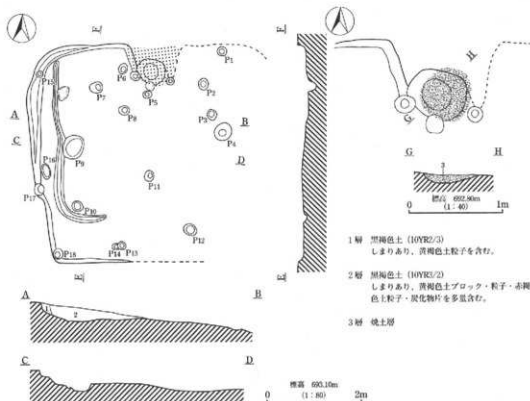
13cm、P3が径30cm・深さ3cmを測る。カマドは北壁際に火床部らしき焼土範囲を確認した。掘り込み規模は径44cm・深さ16cmで、焼上の厚みは6cm程で硬質化していた。

出土遺物は覆土中からであり極少量であった。図示した土師器甕も覆土中からの出土である。1は土師器甕で口径推定20.2cmであり、成形は内外面ロクロ成形である。色調は7.5YR7/4にぶい橙で、胎土は径1～2mmの赤色粒子を含む。本址の所産時期は不明である。

(4) III H12号住居址 (第86・87図、写真図版三十九①)

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM-カー4・5Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

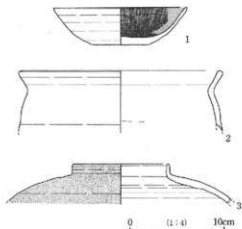
形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られていた。規模は北壁1.80m(残存)・南壁1.66m(残存)・西壁4.42mで、壁高さは北東コーナー付近で30cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。主軸方位はN-3°-Wを示す。住居址の床面積は推定で20.6㎡・残存で8.4㎡を測る。覆土は2層で、床は硬質であるが地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と南西コーナーに検出された。規模は幅8～20cm・深さ8cmで、断面形はU字形を呈する。なお本址の壁溝は南西コーナー部分が壁に沿わず、住居址の内側を巡り間仕切り溝的な様相を示す。このことは或いは本址の拡張による結果とも考えられる。ピットは18カ所検出された。規模はP1が径20cm・深さ13cm、P2が径24cm・深さ11cm、P3が径23cm・深さ8cm、P4が径40cm・深さ16cm、P5が径19cm・深さ13cm、P6が径22cm・深さ11cm、P7が径26cm・深さ18cm、P8が径24cm・深さ13cm、P9が径52cm・深さ14cm、P10が径22cm・深さ18cm、P11が径23cm・深さ10cm、P12が径27cm・深さ16cm、P13が径17cm・深さ8cm、P14が径14cm・深さ7cm、P15が径12cm・深さ15cm、P16が径33cm・深さ31cm、P17が径24cm・深さ16cm、P18が径20cm・深さ19cmを測る。これらピットの内P2・7・10・12が



第86図 ⅢH12号住居址実測図

主柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一であった。

カマドは北壁中央部で検出された。主軸方位は $N-5^{\circ}-W$ を測る。残存状態は左袖の一部と火床面のみ確認できた。袖の形態は粘質土によるもので、火床面はよく焼けており、焼土の厚みは8cmを測る。また、カマド掘り方時に火床面の両脇より袖構築材を立てたと思われるピットが2カ所検出された。



第87図 ⅢH12号住居址出土遺物実測図

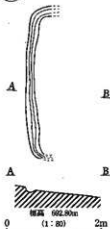
出土遺物は覆土を中心に出土し、図示した遺物もすべて覆土中からの出土である。1は土師器杯で内面黒色処理が施されている。2は土師器甕であり、3は灰釉陶器短頸壺である。

これらの出土遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

押図 番号	器種	法 量(cm)			成形・調整 外 向・内 面	色 調 胎 土
		口径	器高	底径		
1	土師器 杯	(14.2)	4.0	(6.2)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・褐色焼理	7.5YR7/4 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子多量と砂粒を含む
2	土師器 甕	(21.6)	(6.5)	---	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR7/4 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子を多く含む
3	灰 胎 短球蓋	(10.4)	(4.3)	---	外面 ロクロ成形 半胴部に塗粉 内面 ロクロ成形	7.5Y7/1 灰白 良く焼練されているが部分的に小石含む

第38表 III H12号住居址出土遺物観察表

(45) III H14号住居址 (第88図、写真図版三十九②)



第88図 III H14号住居址実測図

本住居址は、調査区上部台地の東斜面である M-キー-5.6Gr に位置する。残存状態は東側の殆どが地形により削平されており、残存部は西壁のみであった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁0.42m(残存)・南壁0.20m(残存)・西壁2.98mで、壁高さは南西コーナーより少し北で10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は N-6°-E を示す。住居址の床面積は計測不能である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は西壁に確認され、規模は10~26cm・深さ6cmを測る。出土遺物は全くなく、本址の帰属時期も不明である。

(46) III H15号住居址 (第89・90図、写真図版四十①)

本住居址は、調査区上部台地の中央部である M-アー-12・13Gr に位置する。残存状態は東側が地形の傾斜により削平されている。重複遺構は III D12号土坑であり新旧関係は本址の方が古い。

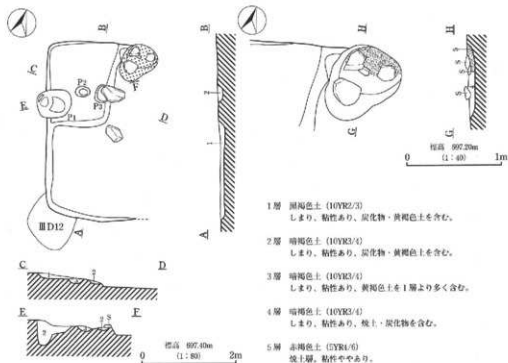
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁に造られている。規模は北壁1.75m(残存)・南壁1.88m(残存)・西壁3.42mで、壁高さは西壁中央で24.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は N-19°-W を示す。住居址の床面積は残存で6.2㎡を測る。覆土は3層に分かれる。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。

ピットは床面で3カ所が確認された。規模は P1 が径72cm・深さ57cm、P2 が径30cm・深さ10cm、P3 が径40cm・深さ6cmを測る。また本址は北西コーナーに一段高くなったテラス状の施設が確認された。床面との比高差は13cmを測る。住居址の掘り方は均一であった。

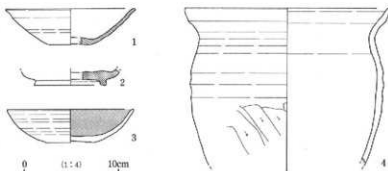
カマドは北壁際に造られている。残存状態は火床部のみで、カマド周辺には人頭大の礫が散乱していた。焼土はよく焼けており厚み7cmを測る。

本址の出土遺物は覆土中からの出土が殆どで、図示した遺物の出土位置は1と3がカマド内でのほかは覆土中である。1は須恵器杯、2は須恵器高台杯であるが口縁部から体部を欠損する。3は土師器杯でロクロ成形で内面は黒色処理が施されている。4は土師器甕でいわゆるロクロ甕の範疇に含まれる。口縁部から胴部はロクロ成形、胴部下半はヘラケズリを施す。

これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。



第89図 ⅢH15号住居址実測図

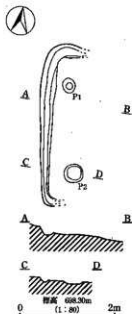


第90図 ⅢH15号住居址出土遺物実測図

押出番号	器種	法量(cm)			成形・調整		色 調	
		口径	密径	口径	外面・内面	胎 土		
1	須恵器 杯	(13.8)	3.8	(4.4)	外面	ロクロ成形・底面回転糸切り	7.5Y6/1 灰	
					内面	ロクロ成形	径1~2mmの黒色粒子と砂粒を含む	
2	須恵器 高内杯	---	(1.8)	(4.6)	外面	ロクロ成形・底面回転糸切り後、高台貼付	7.5Y5/1 灰	
					内面	ロクロ成形	径1~2mmの黒色粒子を多く含む	
3	土師器 杯	(13.4)	3.5	(5.0)	外面	ロクロ成形・底面回転糸切り	5YR6/6 橙	
					内面	ロクロ成形・黒色処理	径1~2mmの赤色粒子を多く含む	
4	土師器 甕	(21.8)	(16.7)	---	外面	ロクロ成形・割下半ヘラケズリ	5YR7/4 に近い橙	
					内面	ロクロ成形・底面ナデ	径2~3mmの赤色粒子を非常に多く含む	

第39表 III H15号住居址出土遺物観察表

(47) III H16号住居址 (第91図、写真図版四十②)



第91図 III H16号住居址実測図

本住居址は、調査区上部台地の中央部斜面であるL-テー10・11Grに位置する。残存状態は東側の殆どが地形の傾斜によって削平されている。また重複遺構はIII H26号住居址とIII F2号掘立柱建物址があるが、いずれも覆土の切り合い等が確認できず新旧関係は不明である。

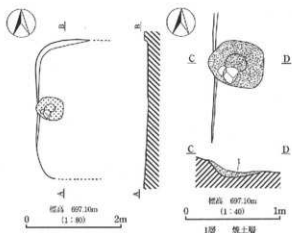
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁0.63m(残存)・南壁0.18m(残存)・西壁3.30mで、壁高さは西壁中央で15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-9°-Wを測る。住居址の床面積は推定で1.9㎡を測る。床は全体的に硬質であった。壁溝は西壁に確認された。規模は14~30cm・深さ5cmであり、溝断面形はU字形を呈する。ピットは床面検出時に2カ所確認され、規模はP1が径32cm・深さ3.5cm、P2が径40cm・深さ3.0cmを測る。

出土遺物は覆土中や壁溝内より土師器杯(内面黒色処理)や土師器ロクロ甕が出土しているがいずれも小片で図示可能なものは無かった。よって本址の帰属時期も不明である。

(48) III H17号住居址 (第92・93図、写真図版四十①)

本住居址は、調査区上部台地のほぼ中央部であるM-ア-5.6Grに位置する。残存状態は東側半分が地形の傾斜によって削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは西壁中央に造られている。規模は北壁0.94m(残存)・南壁0.22m(残存)・西壁3.72m(残存)で、壁高さは北西コーナー付近で12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-87°-Wを示す。住居址の床面積は1.8㎡を測る。床は全

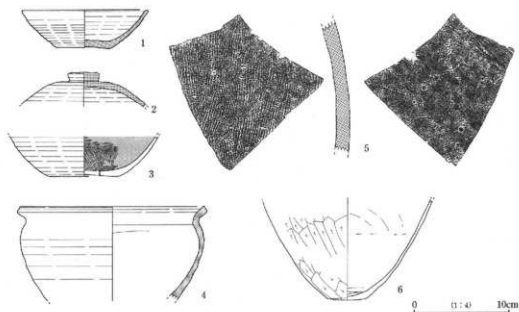


第92図 ■H17号住居址実測図

体的に軟質であった。壁溝・ピットは確認されなかった。
 カマドは西壁中央に造られていた。残存状態は火床面しか残っていなかったが、焼土は硬質化していた。焼土の厚みは8cmを測る。

本址からの出土遺物は殆どが覆土中からのもので、図示した遺物もすべて覆土中からの出土である。1は須恵器環である。底部は回転糸切り離しである。2は須恵器蓋で返りの部分を欠損する。3は土師器環であり口縁部を欠損する。内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。4は須恵器の鉢であり、非常に軟質の焼きで須恵器の範疇として捉えるには疑問が残る品である。5は須恵器甕の胴部破片である。6は土師器甕の胴部下半である。

これら遺物より本址は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

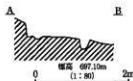
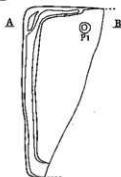


第93図 ■H17号住居址出土遺物実測図

調査番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整		色 調	
		口径	器高	底径	外 面 ・ 内 面		胎 土	
1	須恵器 環	(13.4)	4.1	5.9	外面 内面	ロクロ成形・底面回転糸切り ロクロ成形	2.5GY7/1	オリーブ灰 径1-2mmの白色粒子と砂粒を含む
2	須恵器 蓋	---	(3.7)	3.3	外面 内面	ロクロ成形・天井部回転ヘラケズリ後、 つまみ部貼付 ロクロ成形	2.5GY6/1	オリーブ灰 径1-2mmの黒色粒子を多く含む
3	土師器 環	---	(4.3)	(7.2)	外面 内面	ロクロ成形・底面回転糸切り後、ナデ ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/6	橙 径1-2mmの赤色粒子と砂粒を含む
4	須恵器 (軟質) 鉢	(20.2)	(10.0)	---	外面 内面	ロクロ成形 ロクロ成形・胴部ナデ	7.5YR5/1	褐灰 径1-2mmの黒色粒子を含む
5	須恵器 甕	---	(14.0)	---	外面 内面	平行タタキメ ナデ	7.5Y6/1	灰 黒色の噴出物を多く含む
6	土師器 甕	---	(9.8)	(4.0)	外面 内面	ヘラケズリ ナデ	7.5YR4/3	褐 径1-2mmの赤色粒子多量と砂粒を含む

第40表 ⅢH17号住居址出土遺物観察表

〔49〕ⅢH19号住居址 (第94図、写真図版四十一②)



本住居址は、調査区上部台地の南よりであるM-ウ-18・19Grに位置する。残存状態は東側の殆どが地形により削平されていた。

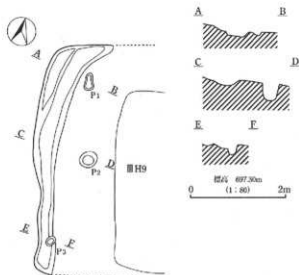
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁1.62m(残存)・南壁0.35m(残存)・西壁3.50m(残存)で、壁高さは北西コーナーで31cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-9°-Wを示す。住居址の床面積は残存部で3.8㎡を測る。床はやや硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と北壁・南壁の一部に確認された。規模は幅14-32cm・深さ8cmで、断面形はU字形を呈する。ピットは1カ所確認され、規模はP1が径22cm・深さ21cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中より土師器環(内面黒色処理)や土師器甕が小片で出土しているが、図示できるものはなかった。よって本址の帰属時期も不明である。

第94図 ⅢH19号住居址実測図

〔50〕ⅢH20号住居址 (第95・96図、写真図版四十二①)

本住居址は、調査区上部台地の中央部であるM-イ-15・16Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。また、東側にはⅢH9号住居址が重複するが本址の方が古い。形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁1.2m(残存)・南壁0.42



第95図 ⅢH20号住居址実測図

36cm・深さ37cm、P3が径22cm・深さ10cmを測る。また本址は住居址北西コーナーにテラス的な部分を確認された。住居址掘り方はほぼ均一であった。

遺物は覆土からの出土が殆どであった。図示した遺物の内1と3は覆土内より出土した。なお3の須恵器長頸瓶はⅡH9号住居址出土の須恵器長頸瓶と接合関係にある。

これらの遺物より本址は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。



第96図 ⅢH20号住居址出土遺物実測図

検出 番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整		色 調	
		口径	器高	底径	外面・内面	外面・内面	動 土	
1	須恵器 杯	---	(1.4)	(8.8)	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	2.5GY6/1	オリブ灰 白色の砂粒を多く含む
					内面	ロクロ成形 ※内外面に火だすき痕あり		
2	須恵器 壺	---	(5.8)	6.7	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付	5Y7/2	灰白 砂粒を多く含む
					内面	ロクロ成形		
3	須恵器 長頸瓶	---	(5.4)	---	外面	ロクロ成形後、旋輪	7.5Y7/1	灰白 灰色粒子を散見含む
					内面	ロクロ成形		

第41表 ⅢH20号住居址出土遺物観察表

5) III H21号住居址 (第97図)

本住居址は、調査区上部台地の東斜面である M-イー-16Gr に位置する。残存状態は III H20号住居址に削平されている。重複遺構は III H20号住居址があり、新旧関係は本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられるが、西壁のみの残存のため不明。規模は北壁0.2m(残存)・南壁0.3m(残存)・西壁3.5mを測る。壁高さは西壁中央で13cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は N-17°-W を測る。

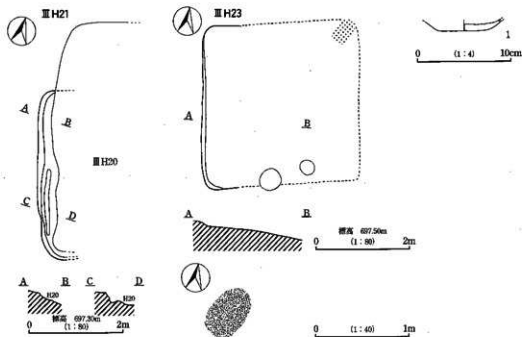
本址の出土遺物は覆土中から土師器片が少量出土したが図示できる物はなかった。よって本址の帰属時期は不明である。

5) III H23号住居址 (第97図、写真図版四十二③)

本住居址は、調査区上部台地の東斜面である M-アー-14・15Gr に位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北東コーナーに焼土範囲が確認された。住居址規模は北壁0.72m(残存)・南壁0.7m(残存)・西壁3.35mで、壁高さは西壁中央で8.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は N-9°-W を示す。住居址の床面積は残存で10.8㎡を測る。

床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝・ピットは確認されなかった。



第97図 III H21・23号住居址実測図

カマドは長軸57cm・幅37cmの火床面のみ残存していた。焼土は硬質化していた。

出土遺物は土師器坏・壺片が少量出土した。図示した1は土師器坏で覆土中からの出土である。底径5.2cmで、色調は7.5YR7/4にぶい橙である。胎土は径1~2mmの赤色粒子を多量に含む。成形はロクロ成形で、底部は回転糸切り離しである。本址の帰属時期は遺物量が少ないため不確実であるがおおよそ9世紀前半に位置づけられる。

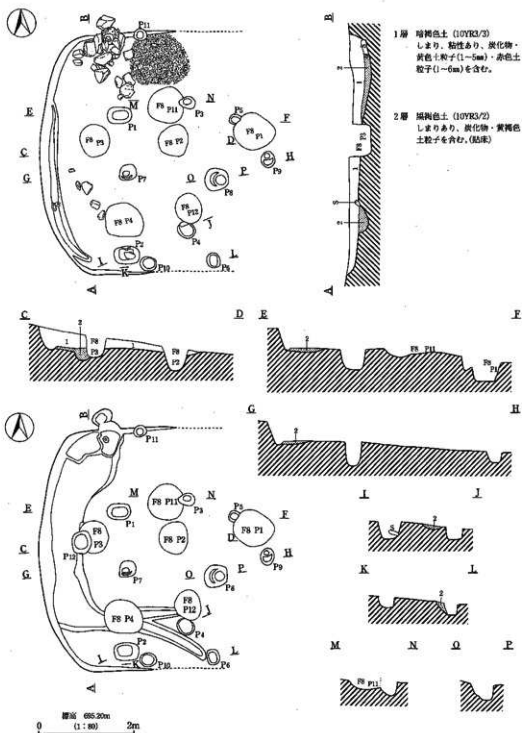
Ⅲ H24号住居址（第98~101図、写真図版四十三）

本住居址は、調査区上部台地の中央部であるM-ウ-6・7、M-エ-6・7Grに位置する。残存状態は東側が地形により削平されており、住居址の半分ほどが残存していた。重複遺構はⅢF8号掘立柱建物址で新旧関係は本址の方が古い。

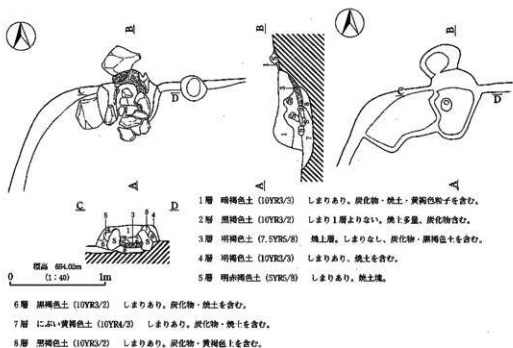
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北西コーナーに造られている。規模は北壁2.30m（残存）・南壁1.37m・西壁4.93mを測る。壁高さは西壁中央より少し北よりで45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居址の床面積は推定で26.7㎡、残存で12.1㎡を測る。覆土は1層であり、炭化物を含む。床は全体的に硬質であり、貼床は厚さ12cmを測る。壁溝は西壁中央から南にかけて確認された。規模は幅17~38cm・深さ6.5cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは12カ所確認され、規模はP1が径51cm・深さ43cm、P2が径54cm・深さ37cm、P3が径35cm・深さ30cm、P4が径39cm・深さ28cm、P5が径22cm・深さ30cm、P6が径31cm・深さ27cm、P7が径34cm・深さ49cm、P8が径50cm・深さ35cm、P9が径34cm・深さ28cm、P10が径34cm・深さ22cm、P11が径25cm・深さ33cm、P12は掘り方時の検出で、規模が径48cm・深さ30cmを測る。また、本址の掘り方は北西コーナーから北壁際にかけて一段深く掘り窪められており、南壁際は壁溝のような状態を呈する。

カマドは北西コーナー近くに造られている。天井部は既になかったが、その他の部分は非常に残りの良い状態を示しており、火床部上には礫が崩落したような状態であった。形態は煙道部があまり壁より出ないタイプで、袖は礫と粘質土によって構築されており、両袖ともに礫が立った状態で検出された。規模は煙道部長さが1.03m・幅65cmで、袖幅は両方ともに20~28cmを測る。火床部はよく焼けており、焼土の厚さは5cmを測る。カマド掘り方は火床部が楕円形であり、中央部に支脚石を立てていたと思われる小ピットが検出された。また、本址はカマド東脇に焼土と炭化物の広がった範囲が確認された。

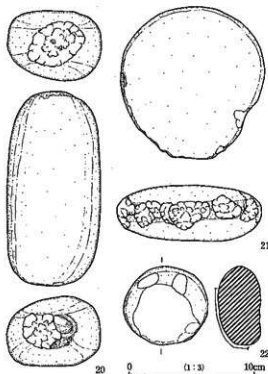
本址からの出土遺物は覆土および壁溝とカマド内からもにも出土した。図示した遺物の出土位置はカマドから出土の遺物が1・2・6・9・10であり、北西コーナーより出土が5、20が西壁壁溝内で、その他の遺物はすべて覆土中である。1~6は土師器坏であり、いずれもロクロ成形で5と6は内面に放射状のミガキと黒色処理が施されている。7~11は土師器碗で7~9と11は内面



第98図 H24号住居址実測図



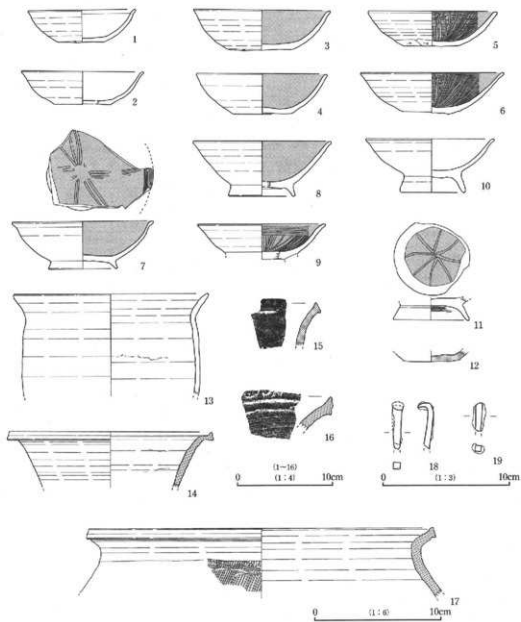
第99図 ⅢH24号住居址カマド実測図



第100図 ⅢH24号住居址出土遺物実測図①

黒色処理が施され、7・9・11は内面に丁寧なミガキによる放射状の暗文がある。13は土師器甕でいわゆるロクロ甕である。胴部下半が欠損する。14～17は須恵器甕である。17は非常に大型品であり、また焼成は生焼け的な赤褐色を呈する。18と19は鉄製品でありいずれも欠損しているが釘と考えられる。20～22は石製品で、20と21は敲き石、22はすり石と考えられる。20は上下両方向に敲き跡が付いている。21は側面半分に敲き跡がある。23は敲き後擦っている。石材は全て輝石安山岩である。

これらの遺物より本址は10世紀前半に位置づけられる。



第101图 ⅢH24号住居址出土遺物実測図②

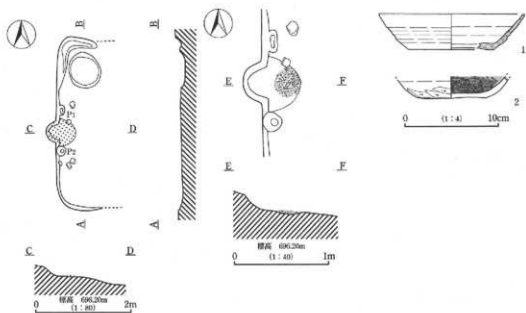
探区 番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整	色 調
		口径	器高	口径		
1	土師器 罎	(11.4)	3.4	4.9	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラズリ 内面 ナデ	7.5YR7/6 橙 径1~2mmの赤色粒と砂粒を多く含む
2	土師器 罎	(13.0)	3.5	(6.0)	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラズリ 内面 みこみ部ナデ	7.5YR5/4 に近い橙 砂粒を含み、ざらざらしている
3	土師器 罎	14.5	4.3	7.0	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラズリ 内面 ナデ後、黒色処理	7.5YR7/6 橙 径2~3mmの赤色粒子を多く含む
4	土師器 罎	13.9	4.3	6.4	外面 ロクロ成形・底部回転承切り 内面 ナデ後、黒色処理	7.5YR5/4 に近い橙 径1~2mmの赤色粒と少量の砂粒を含み、ざらざらしている
5	土師器 罎	(13.6)	3.7	5.9	外面 ロクロ成形・底部回転承切り後、底部および外周手持ちヘラズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6 橙 径1~2mmの赤色粒子を少量含む
6	土師器 罎	15.2	<4.6>	---	外面 ロクロ成形・底部回転承切り後、高台貼付(高台欠損) 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子を少量含む
7	土師器 罎	(15.0)	5.1	7.3	外面 ロクロ成形・底部回転承切り後、高台貼付 内面 暗文風ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子を多く含む
8	土師器 罎	(14.7)	5.9	(7.0)	外面 ロクロ成形・底部回転承切り後、高台貼付 内面 ナデ後、黒色処理	7.5YR5/4 に近い橙 径2~3mmの黒色粒子を含む
9	土師器 罎	(13.6)	<3.8>	---	外面 ロクロ成形・底部回転承切り後、高台貼付(高台欠損) 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6 橙 砂粒多量と径1~2mmの赤色粒子を含む
10	土師器 罎	13.6	5.7	7.0	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR7/6 橙 径1~2mmの赤色粒子を多量に含む
11	土師器 罎	---	<2.4>	8.1	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、高台貼付 内面 珠部(放射状)暗文風ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を含む
12	須恵器 罎	---	<1.2>	(6.0)	外面 ロクロ成形・底部回転承切り 内面 ロクロ成形	7.5Y7/1 灰白 径1~2mmの黒色粒子を含む
13	土師器 罎	(20.6)	<10.8>	---	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR7/4 に近い橙 径1~2mmの赤色粒子を多量に含む
14	須恵器 罎	(21.9)	<5.9>	---	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	N6/灰 径1~2mmの白色の砂粒を含む
15	須恵器 罎	---	<4.5>	---	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	N6/灰(内面) 径1~2mmの赤色粒子を含む
16	須恵器 罎	---	<4.4>	---	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形 自然釉付着	N6/灰 白色の砂粒を多く含む
17	須恵器 罎	(52.8)	<11.0>	---	外面 口縁部ロクロ成形 胴部平行タタキメ文 内面 口唇部に自然釉付着 内面 ロクロ成形	10R3/3 暗赤褐 径2~3mmの小石と砂粒を含む

第42表 ⅡH24号住居址出土遺物観察表

54ⅢH27号住居址(第102図、写真図版四十四)

本住居址は、調査区上部台地の中央部であるM-1-5Grに位置する。残存状態は東側が地形によって削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは西壁中央に造られている。規模は北壁0.7m(残存)・南壁0.78m(残存)・西壁3.53mを測る。壁高さは西壁中央で16cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-86°-Wを示す。住居址の床面積は残存で2.7㎡を測る。覆土は単層であった。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は北西コーナー



第102図 ⅢH27号住居址及び出土遺物実測図

検出 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調	
		口径	器高	底径	外 面	内 面	胎 土	
1	須恵器 環	(15, 5)	3.8	(9, 0)	外面	ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ	2, 5GY 7/1	明オリブ灰
					内面	ロクロ成形	砂粒を含み、ざらざらしている	
2	土師器 環	—	(2, 4)	7.4	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、手持ちヘラケズリ	7, 5YR 7/4	にぶい橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径1-2mmの赤色砂子と砂粒を含む	

第43表 ⅢH27号住居址出土遺物観察表

部のみ検出された。規模は幅18~22cm・深さ7cmで、形態は断面U字形を呈する。ピットは2カ所確認され、規模はP1が径25cm・深さ5cm・P2が径20cm・深さ5cmを測る。ただこのピットはカマド両袖部分より検出されているため、或いはカマド袖構築材のための掘り方とも考えられる。また、本址は北西コーナー部分に円形の土坑が検出された。規模は長軸77cmで深さ10cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一であった。

カマドは火床部のみ検出された。形態は煙道部が壁よりも張り出すタイプのものである。火床部の焼土の厚さは3cmを測る。

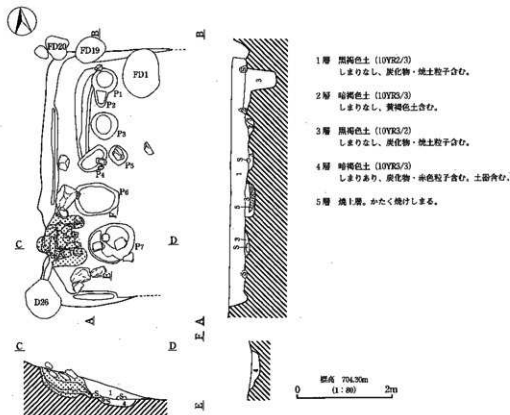
本址からの出土遺物は覆土を中心に出土した。図示した遺物の出土位置は1がカマド右袖脇で2が覆土中である。1は須恵器環でロクロ成形であり、底部は切り離し後手持ちヘラケズリを施している。2は土師器環でロクロ成形であり、底部は回転糸切り離し後手持ちヘラケズリを施す。

これらの遺物により本址は9世紀前半に位置づけられると考える。

図Ⅲ H28号住居址 (第103~106図、写真図版四十五、四十六)

本住居址は、調査区最上部の台地であるL-セー1・2・3、L-ソー1・2・3Grに位置する。残存状態は東側半分が地形と畑地により削平されている。重複遺構は中世墳墓のFD1・19・20とⅢD26号土坑と重複関係にありいずれも本址のほうが古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは西壁南よりに造られている。規模は北壁2.46m(残存)・南壁1.86m(残存)・西壁5.14mを測る。壁高さは西壁中央よりのカマド付近で49cmを測る。壁はほぼ垂直に立ちあがる。主軸方位はN-89°-Eを示す。住居址の床面積は残存で9.8㎡を測る。覆土はほぼ単層であり、炭化物・焼土を含む。床は全体的に硬質であった。壁溝は西壁中央と南壁の一部で確認された。規模は幅25~38cm・深さ5cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは7カ所確認され、規模はP1が径52cm・深さ67cm、P2が径33cm・深さ8cm、P3が径56cm・深さ14cm、P4が径64cm・深さ19cm、P5が径41cm・深さ10cm、P6が径96cm・深さ27cm、P7が径103cm・深さ23cmを測る。これらピットは柱穴にしては規模が大きく、また覆土中に焼土や炭化物を含むことから、土坑的な性格の遺構とも考えられる。また、本址には西壁北よりから間仕切

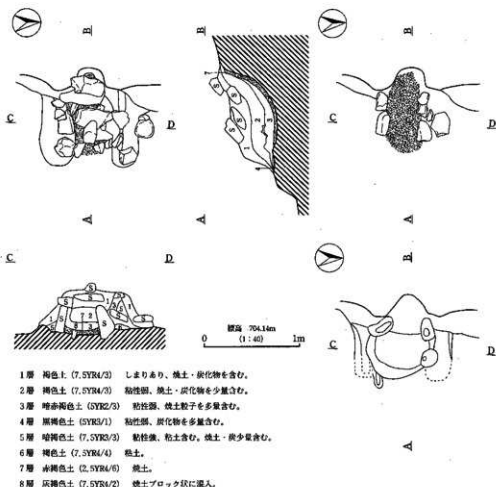


第103図 ⅢH28号住居址実測図

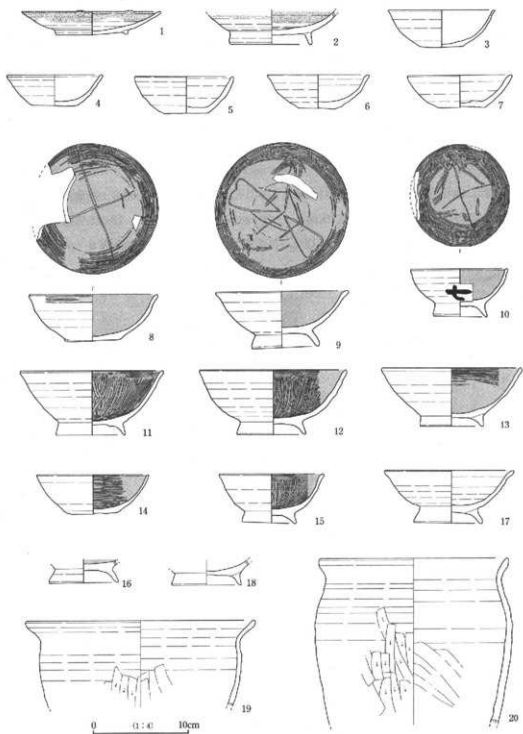
りの溝が検出されている。

カマドは西壁南よりに造られている。本遺跡のなかでは非常に残存状態の良いカマドであった。両袖及び天井部の構造が明瞭に観察できた。カマドの形態は煙道部が住居壁よりもあまり飛び出さないタイプのもので、構築方法は天井部が扁平な石を4枚袖上に高架させている。袖部は両側2本ずつの礎を立て、その石を粘質土によって覆っていた。火床部はよく焼けており焼土の厚みは7cmを測る。また火床部より図示した11の土師器碗が伏せた状態で出土している。この土師器碗はほぼ完形であるが、二次焼成を受けておらず、カマドの使用中止後火床部にいれられたものと考えられる。袖の規模はそれぞれ長さ80cm・幅7~11cmを測る。カマド掘り方は火床部を楕円形に掘り込み、袖部には構築材の礎を立てたと考えられるピットが3カ所確認された。

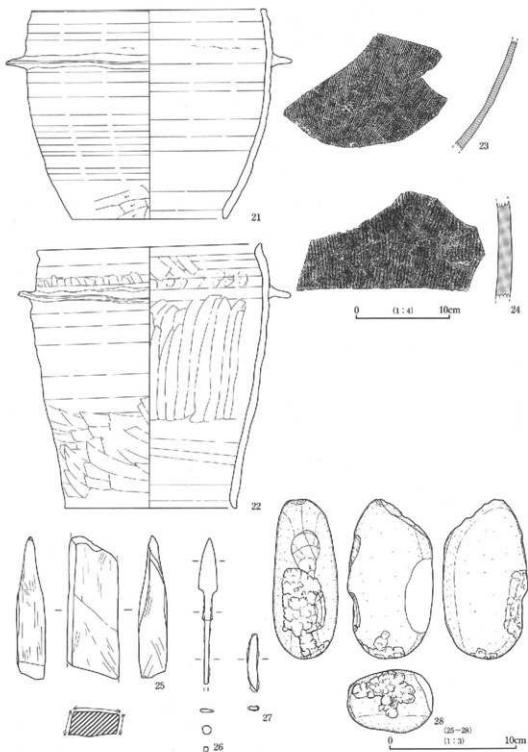
本址からの出土遺物は覆土および床面とカマド内から多量に出土した。図示した遺物の出土位置は1・2・9・13・21が西壁際、3・7・12・23・24が覆土中、4・10・15・17が南西コーナー、5がカ



第104図 III H28号住居跡カマド実測図



第105图 III H28号住居址出土文物实测图①



第106图 IIIH28号住居址出土遺物実測図②

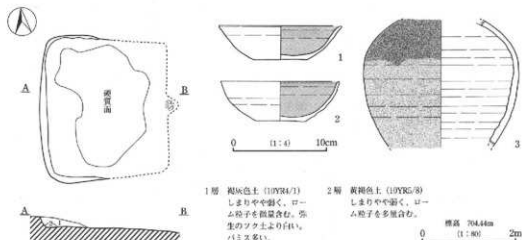
マド前、6がP1上、8・14・16・22がP7上、11がカマド内、18・19・20がP6上である。1と2は灰釉陶器皿と椀である。1はほぼ完形に近い。また1は口唇部四方向に輪花状の窪みを観察できる。釉はいずれも漬け掛けと考えられる。3～7は土師器環である。いずれも小型のロクロ成形の環であり、底部には柱状の粘土から切り離したと考えられる粘土痕が観察できるものがあった。8は土師器環で内面黒色処理されている。また内面みこみ部には「十」の字のミガキによる暗文風の文様がある。9～18は土師器碗であり、17・18以外は内面黒色処理を施す。また9はみこみ部に花卉を象ったようなミガキによる暗文風の模様がある。10は8と同じくみこみ部に「十」の字のミガキによる暗文風の模様と体部外面には正位で「七」と読める墨書がある。19は土師器鉢か甕であり、20は土師器甕である。21と22は土師器甕である。いずれもほぼ完形である。22は外部に黒斑的な部分が見られる。23と24は須恵器甕の胴部破片である。25は砥石であり、よく使い減りが観察できた。26と27は鉄製品で、26は鉄鏃、27は不明品である。28は敲き石でP4脇より出土した。側面と先端に敲き痕が顕著に残っている。石材は輝石安山岩である。

これら遺物より本址は10世紀後半に位置づけられる。

Ⅲ H31号住居址 (第107図、写真図版四十七①)

本住居址は、調査区最上部の台地であるHーセー19・20Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは東壁中央よりに造られている。規模は北壁1.32m(残存)2.5m(推定)・南壁1.23m(残存)2.44m(推定)・西壁2.94m・東壁2.63m(推定)を測る。壁高さは西壁中央で20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ちあがる。主軸方位はEを示す。住居址の床面積は推定で7.3m²を測る。覆土はほぼ単層である。床は中央部が硬質であった。壁溝・ピットは



第107図 Ⅲ H31号住居址及び出土遺物実測図

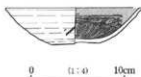
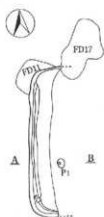
検出されなかった。カマドは東壁中央部に造られていたと考えられるが、火床部しか残存していなかった。また、本址の火床部は焼土が硬質化していなかった。

出土遺物は主に覆土中より出土した。図示した遺物はいずれも住居址中央の床面上より破砕した状態で出土した。1と2は土師器環でいずれも内面黒処理されている。3は灰釉陶器長頸瓶の頸部破片と考えられる。これらの遺物より本址は9世紀前半に位置づけられる。

図号 番号	器種	法量(cm)			成形・調整		色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土	
1	土師器 環	(13.1)	3.6	5.6	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、ヘラケズリ 調整不明・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
2	土師器 環	12.6	4.2	5.2	外面 内面	ロクロ成形・底部回転糸切り ロクロ成形・黒色処理	7.5YR7/1 明褐色 白色の砂粒を多く含む
3	灰釉 長頸瓶	---	(13.4)	---	外面 内面	ロクロ成形後、徳軸 ロクロ成形	7.5Y8/2 灰白 良く精練されている

第45表 III H31号住居址出土遺物観察表

57 III H32号住居址 (第108図、写真図版四十七②)

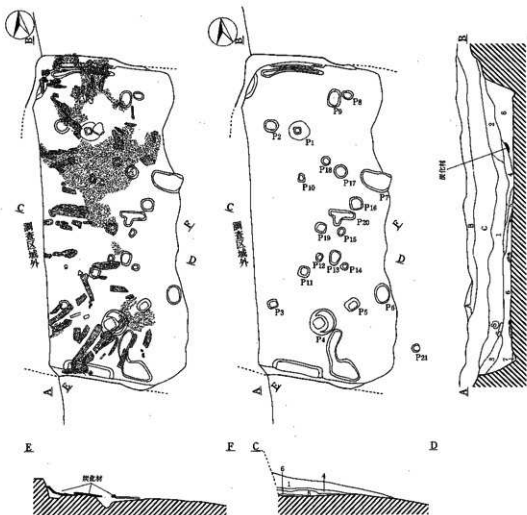


第108図 III H32号住居址及び出土遺物実測図

本住居址は、調査区最上部の台地であるL-セー3Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁0.53m(残存)・南壁0.52m(残存)・西壁2.96mを測る。壁高さは北西コーナーで18cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は残存で0.86㎡を測る。覆土はほぼ単層である。床はやや軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁全体に確認され、規模は幅14~24cm・深さ3cmで、断面の形状はU字形を呈する。ピットは1カ所のみ検出された。規模はP1が径21cm・深さ14cmを測る。

出土遺物は図示した土師器環のみで南西コーナーから出土した。口縁部を一部欠損するがほぼ完形である。口径14.4cm・器高4.1cm・底径5.2cmを測る。胎土は径1~2mmの赤色粒子を多く含み、色調は7.5YR7/4にぶい橙である。調整は底部回転糸切り離して内面は黒色処理されている。また、体部外面に墨痕があるが判読不明である。本址は出土遺物がこの遺物のみなので帰属時期の判断は難しいが、およそ9世紀後半と考えられる。



- A層 黄灰色土 (10YR5/1) 耕作土。しまりあり、ローム・粘土ブロックを含む。
- B層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり、砂厚。
- C層 黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり、褐色土ブロックを含む。1層よりややわらかい。
- 1層 黒褐色土 (10YR3/1) しまり、粘性あり、黄色粒下・赤色粒子をやや多く含む。
- 2層 褐色土 (10YR4/4) しまりあり、粘性あり。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性あり、褐色土ブロックを多量含む。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 3層に似るが、焼土・炭化物をやや多く含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2) 1層よりやや明るく、炭化物を含む。焼土粒子を少量含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3) しまりややあり、炭化物・焼土を多量含む。
- 7層 褐色土 (10YR4/4) しまりややあり、粘性あり、小石を含む。地山に近い。

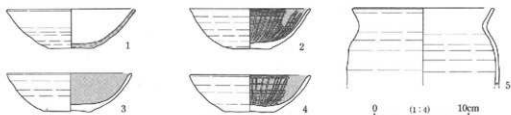
標高 704.90m
(1:40) 2m

第109図 III H44号住居址実測図

Ⅷ H44号住居址 (第109・110図、写真図版四十八)

本住居址は、調査区最上部の台地であるL-シー-10・11、L-スー-10・11Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、また西側は調査区外となる。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁2.32m(残存)・南壁2.30m(残存)・西壁6.60m(推定)を測る。壁高さは北西コーナーで81cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-10°-Wを示す。住居址の床面積は検出部で18.6㎡を測る。覆土は7層に分かれ、下層では焼土と炭化物が顕著に含まれていた。床は全体的に硬質であったが、貼り床は施されていない。壁溝は北壁と南壁の一部に確認された。規模は幅20~24cm・深さ3cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは21カ所確認され、規模はP1が径43cm・深さ69cm、P2が径30cm・深さ5cm、P3が径20cm・深さ31cm、P4が径55cm・深さ22cm、P5が径29cm・深さ13cm、P6が径50cm・深さ6.5cm、P7が径65cm・深さ7cm、P8が径23cm・深さ4cm、P9が径36cm・深さ3cm、P10が径19cm・深さ11cm、P11が径22cm・深さ9cm、P12が径17cm・深さ9cm、P13が径32cm・深さ6cm、P14が径14cm・深さ4cm、P15が径19cm・深さ5cm、P16が径18cm・深さ8cm、P17が径28cm・深さ12cm、P18が径19cm・深さ5cm、P19が径22cm・深さ7cm、P20が径54cm・深さ6.5cm、P21が径16cm・深さ7.5cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一であった。また、本址は屋根材が焼失し崩落したような状態で出土した。これら炭化材は床面に張り付いた状態で検出されているため、



第110図 Ⅷ H44号住居址出土遺物実測図

検出番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径		
1	皿底器 片	(13.5)	4.2	(4.8)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ナデ	7.5YR6/1 灰 径1~2mmの黒色粒子と砂粒を含む
2	土師器 片	12.8	4.3	4.9	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/3 にぶい肌 径1~2mmの赤色粒子を多く含む
3	土師器 片	13.3	4.1	3.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR8/3 洗黄粒 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を含み、 ざらざらしている
4	土師器 片	12.8	3.9	3.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 の物付着 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/8 糖 径1~2mmの赤色粒子微量と砂粒多量 含む
5	土師器 小型器	(13.2)	(8.2)	---	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR8/4 洗黄粒 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を微量含む

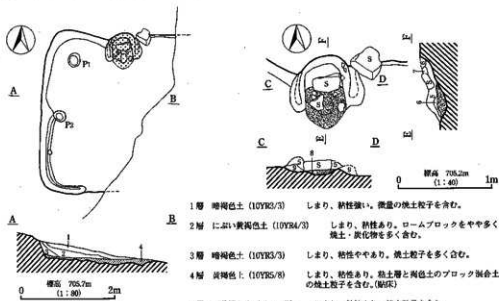
第46表 Ⅷ H44号住居址出土遺物観察表

本址の使用期間中か廃絶直後に焼失したと考えられる。本址からの出土遺物は覆土を中心に P10 付近から集中的に出土した。図示した出土遺物の内 1 と 3 は覆土中でその他に関してはこの P10 付近より出土した。1 は須恵器環で、2～4 は土師器環で内面黒色処理を施している。5 は土師器甕で成形はロクロ成形である。これらの遺物から本址は 9 世紀後半に位置づけられる。

図MH1号住居址（第111・112図、写真図版四十九）

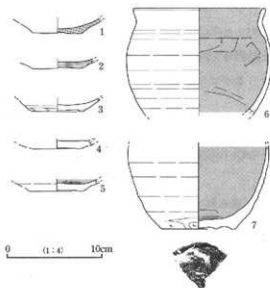
本住居址は、調査区上部の台地である L-サー-20Gr に位置する。残存状態は東側半分が地形と畑地により削平されている。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央部に造られている。規模は北壁2.42m（残存）・南壁1.24m（残存）・西壁3.33mを測る。壁高さは北西コーナーで35cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-3°-Eを示す。住居址の床面積は残存で6.1㎡を測る。覆土は3層に分かれ、焼土炭化物を多く含む。床は全体的に硬質であり、貼床は10cmの厚さで貼られていた。壁溝は南西コーナーの一部で確認された。規模は幅16～28cm・深さ4cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは2カ所確認され、規模はP1が径30cm・深さ11cm、P2が径26cm・深さ27cmを測る。これらピットは検出位置から壁柱穴と考えられる。



- | | | |
|----|------------------|--|
| 1層 | 暗褐色土 (10YR3/3) | しまり、粘性強い。微量の焼土粒子を含む。 |
| 2層 | 濃い黄褐色土 (10YR4/3) | しまり、粘性あり。ロームブロックをやや多く含む。焼土・炭化物を多く含む。 |
| 3層 | 暗褐色土 (10YR3/3) | しまり、粘性ややあり。焼土粒子を多く含む。 |
| 4層 | 灰褐色土 (10YR5/8) | しまり、粘性あり。熟土層と褐色土のブロック混合土。少量の焼土粒子を含む。(貼床) |
| 5層 | 灰黄褐色土 (10YR4/2) | しまり、粘性あり。焼土粒子を含む。 |
| 6層 | 暗褐色土 (10YR3/3) | しまり、粘性あり。炭化物を多く含む。 |
| 7層 | 暗灰色土 (10YR4/1) | しまり、粘性あり。黄色土のブロックを含む。 |
| 8層 | 赤褐色土 (2.5YR4/8) | しまり、粘性弱く、焼土塊よく残っている。(火床面) |
| 9層 | 暗褐色土 (10YR3/3) | しまり、粘性非常にあり。ローム粒子・黒色粒子を多く含む。 |

第111図 MH1号住居址実測図



第112図 NH1号住居址出土遺物実測図

カマドは北壁中央部で確認された。形態は煙道部が壁より僅かに飛び出すタイプである。残存状況は両袖と火床部が検出できた。袖は粘質土で構築されていた。袖の規模は長さがいずれも31~33cm・幅は5~8cmを測る。火床部焼土の厚みは9cmを測る。出土遺物は覆土とカマド内より出土した。図示した遺物の出土位置は3と6がカマドからでその他は覆土中からの出土である。また、図示しなかったが西壁際より小刀子の柄と思われる鉄製品が1点出土している。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

検出番号	器種	法量(cm)			成形・調整		色調
		口径	器高	底径	外面・内面		胎土
1	須恵器 杯	---	(1.7)	(5.8)	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5Y4/1 灰
					内面	ロクロ成形	径1~2mmの黒色粒子多量と砂粒を含む
2	須恵器 杯	---	(1.0)	5.6	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5YR7/1 明褐色
					内面	ロクロ成形	径1~2mmの黒色粒子を多く含む
3	土師器 杯	---	(1.5)	5.5	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、外周「底部柱状作り」の可能性あり	7.5YR8/4 浅黄橙
					内面	ロクロ成形	径1~2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む、ざらざらしている
4	土師器 杯	---	0.9	5.5	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	2.5YR5/6 明赤褐
					内面	ヘラミガキ	径1~2mmの赤色粒子と砂粒多量含む
5	土師器 杯	---	(1.2)	5.8	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5YR8/4 浅黄橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径1~2mmの赤色粒子と砂粒を少量含む
6	土師器 小型甕	(14.0)	(11.4)	---	外面	ロクロ成形後、口縁部コナデ	7.5YR6/6 橙
					内面	口縁部・胴部コナデ、胴部ナデ黒色処理 ※7と同一体の可能性	径1~2mmの赤色粒子と砂粒を少量含む
7	土師器 小型甕	---	(9.8)	(7.8)	外面	ロクロ成形・底部外周手持ヘラケズリ	7.5YR6/6 にぶい橙
					内面	上げ底ぎみに成形 ナデ・黒色処理	径1~2mmの赤色粒子と砂粒を少量含む

第47表 NH1号住居址出土遺物観察表

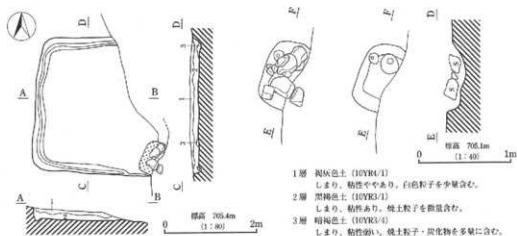
60NH2号住居址(第113・114図、写真図版五十)

本住居址は、調査区上部の台地であるL-サー16・17Grに位置する。残存状態は東側の一部が地形により削平されている。

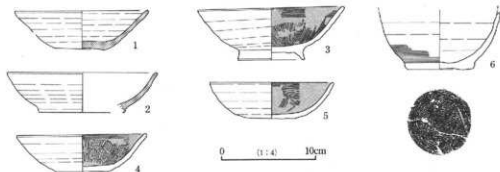
形態はほぼ方形を呈する。カマドは南東コーナーに造られている。規模は北壁1.36m(残存)・南壁3.42m(残存)・西壁2.7mを測る。壁高さは西壁中央で26cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上が

る。主軸方位はN-3°-Eを示す。住居址の床面積は残存で4.8㎡を測る。覆土は3層に分かれ、焼土を少量含む。床は全体的に硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は南東コーナー付近で一部とぎれる他は全周していた。規模は幅12~25cm・深さ7cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは検出されなかった。カマドは南東コーナーに造られていた。カマド使用と考えられる礫がまとまって検出され、礫下に僅かに焼土が検出された。カマド掘り方の規模は長軸73cm・深さ18cmを測る。また、底面よりピット2カ所が確認された。

本址よりの出土遺物は覆土中とカマド内よりおもに出土した。図示した遺物の出土位置は1・23が覆土中、4がカマド左脇、5が北壁際、6がカマド内である。1と2は須恵器坏、3は土師器碗で内面黒色処理が施されている。4と5は土師器坏で内面黒色処理が施されている。6は土師器の小型甕であり、成形はロクロ成形である。底部は回転糸切り離しである。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。



第113図 NH 2号住居址実測図

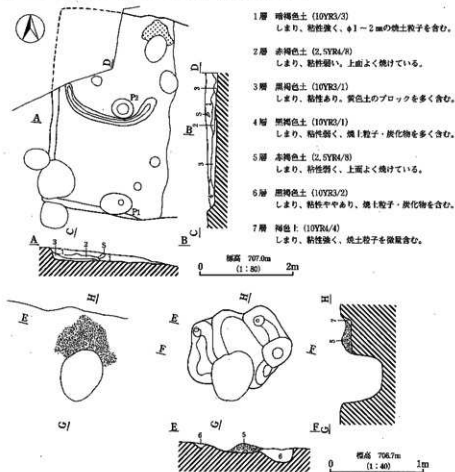


第114図 NH 2号住居址出土遺物実測図

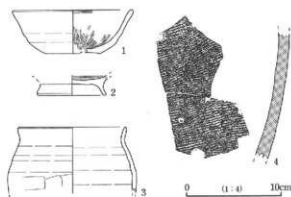
検出 番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整		色 調
		口径	器高	底径	外 面 ・ 内 面		胎 土
1	須恵器 埴輪 (軟質)	(14.2)	4.1	5.3	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5YR 6/1 褐灰
					内面	ロクロ成形	径1-2mmの黒色粒子を含む
2	須恵器 高台埴輪	(15.9)	4.2	(9.1)	外面	ロクロ成形	2.5GY 7/1 明オリブ灰
					内面	ロクロ成形	砂粒を多く含む
3	土師器 鉢	15.6	5.6	7.0	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台粘付	5YR 6/6 橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径1-2mmの赤色粒子を多く含む
4	土師器 埴輪	13.8	4.0	5.5	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5YR 7/8 黄橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径1-2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
5	土師器 杯	(13.2)	3.8	5.4	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5YR 6/8 橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理	径1-2mmの赤色粒子と砂粒を含む
6	土師器 小埴輪	—	(6.3)	(6.9)	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り・割縁下位	7.5YR 7/6 橙
					内面	ロクロ成形	径2-3mmの赤色粒子を含む

第48表 NH2号住居址出土遺物調査表

(6) NH3号住居址 (第115・116図、写真図版五十一)



第115図 NH3号住居址実測図



第116図 NH3号住居址出土遺物実測図

→Eを示す。住居址の床面積は残存で7.9㎡を測る。覆土は基本的に4層に分かれ、2層にはよく焼けている面があった。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかったが、住居址の中央部に「コ」の字状の間仕切りの溝が検出された。規模は幅20cm・深さ4cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは2カ所検出された。規模はP1が径66cm・深さ33cm、P2が径44cm・深さ9cmを測る。

カマドは北壁中央より火床部的な焼土が確認された。袖部や煙道部は既に削平されていた為形態は不明である。火床部はよく焼けており、焼土の厚みは9cmを測る。カマド掘り方は火床部と袖部が掘り穿められており、袖部には構築材を立てたと考えられるピットが確認された。

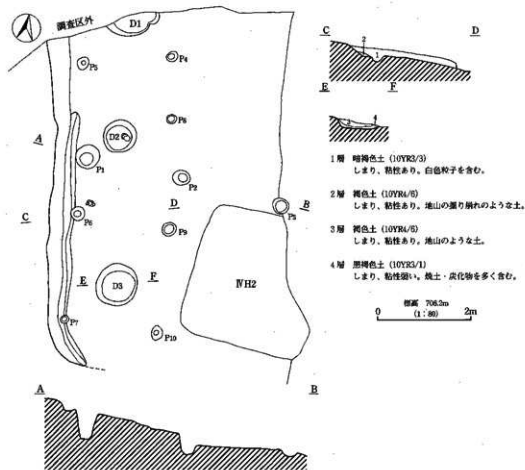
本址よりの出土遺物は覆土中とカマド内よりおもに出土した。図示した遺物の出土位置は1がカマド内、2と4は覆土中、3は南壁際である。1は土師器坏である。底部回転余切り離しで、柱状作りの可能性がある。2は土師器碗で内面黒色処理を施す。3は土師器甕でありロクロ成形である。4は須恵器甕で表面に黒色の噴出物が多い。

これらの遺物より本址は9世紀後半以降に位置づけられる。

検出 番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調	
		口径	器高	底径	外 面・内 面		胎 土	
1	土師器 坏	(12.8)	4.6	(5.8)	外面 内面	ロクロ成形・底部回転余切り 「底部分」の可能性あり ヘラミガキ	2.5YR5/6	明赤褐色
2	土師器 碗	—	(2.1)	7.3	外面	ロクロ成形・底部回転余切り後、高台貼付	5YR6/6	橙
					内面	ヘラミガキ・黒色処理		
3	土師器 小型甕	11.5	(7.0)	—	外面	ロクロコナデ	5YR6/6	橙
					内面	ロクロ成形		
4	須恵器 甕	—	(13.1)	—	外面	平行タタキ後、ナデ	N3/暗灰	
					内面	ヘラナデ		

第49表 NH3号住居址出土遺物観察表

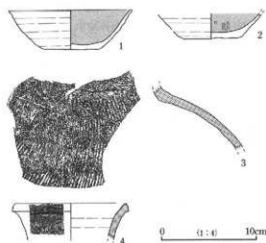
62 NH4号住居址 (第117・118図、写真図版五十二)



第117図 NH4号住居址実測図

本住居址は、調査区上部の台地であるL-コー-15・16・17、L-サー-15・16・17Grに位置する。残存状態は東側の大部分が地形により削平され、また北側は調査区外となる。

形態は全容の把握が難しいがほぼ長方形を呈する。カマドは不明である。規模は南壁0.57m(残存)・西壁6.65m(残存)を測る。壁高さは西壁北よりで26cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-12°-Wを示す。住居址の床面積は残存で28.7m²を測る。覆土は単層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁南よりで確認された。規模は幅12~54cm・深さ5.5cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは10カ所検出された。規模はP1が径50cm・深さ67cm、P2が径38cm・深さ48cm、P3が径34cm・深さ16cm、P4が径24cm・深さ10cm、P5が径28cm・深さ14cm、P6が径30cm・深さ15cm、P7が径15cm・深さ19cm、P8が径18cm・深さ13cm、P9が径30cm・深さ14cm、P10が径31cm・深さ25cmを測る。また本址は西壁側に3カ所の土



第118図 IVH4号住居址出土遺物実測図

置は1がD2からでその他の物は覆土中である。1と2は土師器環、3は須恵器甕、4は須恵器長頸壺の破片と考えられる。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられると考える。

坑が検出された。規模はD1が長軸115cm・短軸46cm・深さ22cm、D2が長軸72cm・短軸64cm・深さ25cm、D3が長軸89cm・短軸85cm・深さ22cmである。これら土坑の内D2からは完形の土師器環が石を入れ込んだ状態で出土し、D3からは焼土塊が検出された。以上、本址の概略を述べたが、本址はピットの形状や壁規模の形態より竪穴住居址の範疇としてではなく、大型建物址的な遺構とも考えられる。

本址よりの出土遺物は覆土中と土坑内よりおもに出土した。図示した遺物の出土位

検出番号	器種	法 量(cm)			成 形・調 整		色 調	
		口径	器高	口径	外 面・内 面		胎 土	
1	土師器環	13.2	4.2	3.8	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5YR7/6 橙	
					内面	調整不明・黒色処理	径1-2mmの赤色粒子を非常に多く含む	
2	土師器環	---	〈2.6〉	6.2	外面	ロクロ成形・底部回転糸切り	7.5YR7/6 橙	
					内面	ヘタミガキ・黒色処理 「底部柱状作り」の可能性あり	径1-2mmの赤色粒子を非常に多く含む	
3	須恵器甕	---	〈6.6〉	---	外面	平行タタキ後、ナデ	2.5GY5/1 オリーブ灰	
					内面	ナデ	径2-3mmの黒色の噴出物あり	
4	須恵器長頸壺?	(12.3)	(4.0)	---	外面	ロクロ成形	N2/黒(内面)	
					内面	ロクロ成形	砂粒を含む	

第50表 IVH4号住居址出土遺物観察表

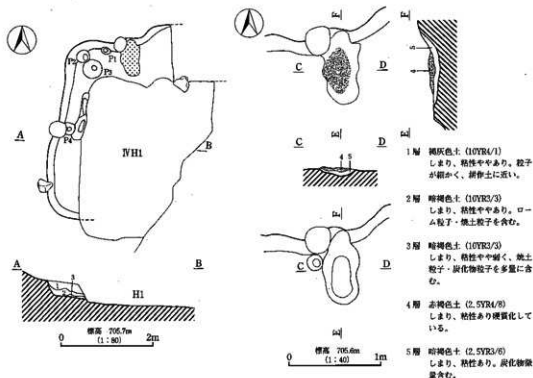
63) IVH9号住居址 (第119図、写真図版五十三①)

本住居址は、調査区上部の台地であるL-コー19・20、L-サー19・20Grに位置する。残存状態は東側が地形により削平され、また南東コーナーはIVH1号住居址により切られている。

形態は方形を呈する。カマドは北壁中央部に造られている。規模は北壁2.08m(残存)・南壁0.47m(残存)・西壁3.56mを測る。壁高さは西壁中央で19cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居址の床面積は残存で2.6㎡を測る。覆土は3層に分かれる。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは4カ所検出された。規模はP1が径18cm・深さ24cm、P2が径25cm・深さ14cm、P3が径40cm・深さ10cm、P4が径25cm・深さ14cmを測る。カマドは北壁中央に造られており、火床面のみ残存していた。火床部の焼

土はよく焼けており焼土の厚みは7cmを測る。火床部掘り方の規模は長さ78cm・幅38cmを測る。

本址からの出土遺物は土師器・甕片が少量と図示した砾石があったのみである。砾石は砂岩で2.8kgあった。これらの事から本址の帰属時期は不明である。

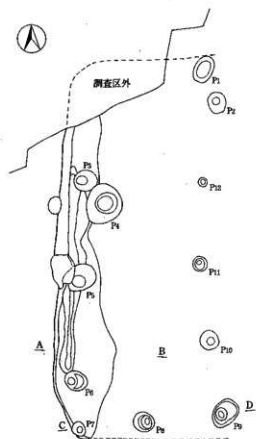


第119図 IVH9号住居址実測図

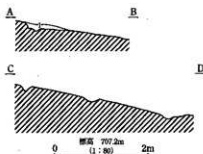
64IVH17号住居址 (第120・121図、写真図版五十三②)

本住居址は、調査区上部の台地であるL-ケー17・18・19、L-コー19Grに位置する。残存状態は東側が地形により削平されている。また、本址はIVH3号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。

形態は長方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は西壁6.60m(残存)7.77m(推定)を測る。壁高さは西壁中央で20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居址の床面積は残存で4.32㎡を測る。覆土は単層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁の一部に確認された。規模は幅24~70cm・深さ8cmを測り、断面形はU字形を呈する。ピットは12カ所検出された。規模はP1が径57cm・深さ43cm、P2が径44cm・深さ20cm、P3が径50cm・深さ62cm、P4が径85cm・深さ25cm、P5が径66cm・深さ60



第120図 NH17号住居址実測図

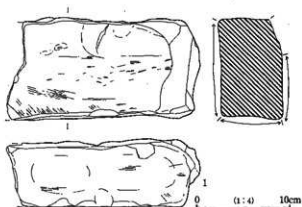


1層 暗褐色土 (10YR3/3)
しりぞく、粘性あり。炭化物を微量含む。

cm、P6が径50cm・深さ61cm、P7が径30cm・深さ16cm、P8が径46cm・深さ58cm、P9が径66cm・深さ19cm、P10が径42cm・深さ35cm、P11が径11cm・深さ56cm、P12が径18cm・深さ20cmを測る。これらピットは壁際に沿うように並んでおり壁柱穴の様相を示す。

本址の形態は先に述べたNH4号住居址とよく似る。この形態から考えると本址も竪穴住居址の範疇というよりは、掘立柱を構造の基本とする大型建物址的な遺構と考えられる。

本址からの出土遺物は土師器坏・破片が少量あったのみである。よって本址の帰属時期は不明である。



第121図 NH9号住居址出土遺物実測図

第2節 掘立柱建物址と柵列

(1) IF4号掘立柱建物址 (第122図)

本址は、調査区北よりの低地部分であるB-キー-17、B-クー-17-18、B-ケー-17Grに位置する。残存状態はほぼ良好で、IH31号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は東西方向に長い1間×1間の側柱式建物址である。長軸方位はN-61°-Eを示す。規模は桁行4.03m(P1~P2)・梁間3.00m(P1~P4)で、桁行柱間は3.35~4.03m・梁間柱間は2.95~3.00mを測る。ピット間に囲まれた面積は10.8㎡を測る。柱穴の形態はほぼいずれも円形である。ピットの規模はP1が径31cm・深さ24cm、P2が径33cm・深さ24cm、P3が径32cm・深さ21cm、P4が径32cm・深さ33cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址よりの出土遺物はなかった。

(2) IF6号掘立柱建物址 (第122図、写真図版五十四①)

本址は、調査区最北端の北斜面であるZ-ウ-15、Z-エ-15・16Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。

形態は南北方向に長い2間×1間の側柱式建物址である。長軸方位はN-34°-Wを示す。規模は桁行3.03m(P2~P4)・梁間2.20m(P1~P2)で、桁行柱間は1.41~1.61m・梁間柱間は2.18~2.20mを測る。ピット間に囲まれた面積は6.6㎡を測る。柱穴の形態はいずれも円形であり、中段にテラスを持つピットもある。ピットの規模はP1が径33cm・深さ22cm、P2が径42cm・深さ27cm、P3が径36cm・深さ23.5cm、P4が径31cm・深さ24cm、P5が径36cm・深さ23cm、P6が径42cm・深さ23cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

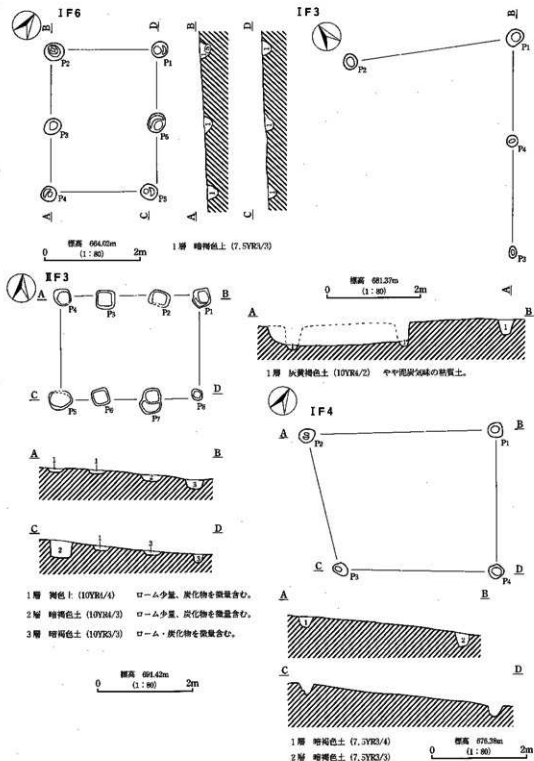
本址よりの出土遺物はP4より土師器坏(黒色処理)片が出土しているのみである。

(3) IF3号掘立柱建物址 (第122図、写真図版五十四②)

本址は、調査区中央台地のほぼ真ん中であるI-オー-1Grに位置する。残存状態はほぼ良好であるが、周辺部は中世のピットが密集しており、調査時に覆土より古代の掘立柱建物址と判断された。

形態は東西方向に長い3間×1間の側柱式建物址である。長軸方位はN-85°-Eを示す。規模は桁行2.94m(P1~P4)・梁間2.16m(P4~P5)で、桁行柱間は0.83~1.17m・梁間柱間は2.14~2.16mを測る。ピット間に囲まれた面積は6.3㎡を測る。柱穴の形態は方形を基調としている。ピットの規模はP1が径37cm・深さ22cm、P2が径42cm・深さ14cm、P3が径40cm・深さ7cm、P4が径49cm・深さ9cmをP5が径50cm・深さ36cm、P6が径35cm・深さ12cm、P7が径52cm・深さ8cm、P8が径22cm・深さ16cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址よりの出土遺物はなかった。



第122図 IF3・IF4・IF6号・IF3号掘立柱建物址実測図

(4)ⅢF2号掘立柱建物址 (第123図、写真図版五十五①)

本址は、調査区上部台地の中央部であるL-ツ-10・11、L-テ-10・11Grに位置する。残存状態はほぼ良好で、ⅢH26号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は東西方向に長い2間×2間の総柱式建物址と考えられるが、P3とP4間にはピットが検出できなかった。長軸方位はN-67°-Eを示す。規模は桁行3.50m(P1~P6)・梁間3.36m(P1~P3)で、桁行柱間は1.20~3.26m・梁間柱間は1.45~1.90mを測る。ピット間に囲まれた面積は11.3㎡を測る。柱穴の形態はいずれも円形であり、二段掘りのピットもある。ピットの規模はP1が径58cm・深さ30cm、P2が径54cm・深さ40cm、P3が径60cm・深さ35cm、P4が径63cm・深さ16cm、P5が径53cm・深さ32cm、P6が径65cm・深さ18cm、P7が径45cm・深さ12cm、P8が径24cm・深さ9cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址よりの出土遺物はP1より土師器甕片が1点、P6より須恵器坏片1点がそれぞれ出土したのみであった。

(5)ⅢF3号掘立柱建物址 (第123図、写真図版五十五②)

本址は、調査区上部台地の南よりであるL-ツ-14・15、L-テ-14・15Grに位置する。残存状態は良好である。ⅢH16号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は南北方向に長い2間×1間の側柱式建物址である。長軸方位はN-9°-Wを示す。規模は桁行3.76m(P1~P5)・梁間3.10m(P4~P5)で、桁行柱間は1.82~1.94m・梁間柱間は3.08~3.10mを測る。ピット間に囲まれた面積は11.6㎡を測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径49cm・深さ45cm、P2が径47cm・深さ31cm、P3が径60cm・深さ37cm、P4が径47cm・深さ48cm、P5が径45cm・深さ36cm、P6が径38cm・深さ27cmをそれぞれ測る。ピット内でP3~P5は顕著な柱痕を確認できた。

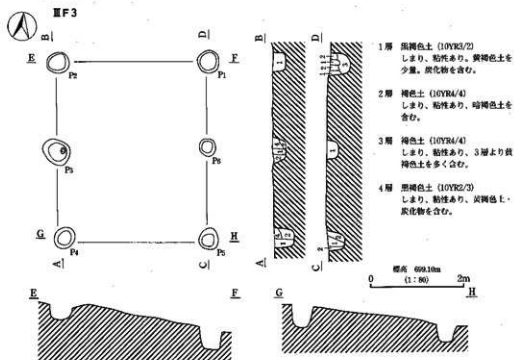
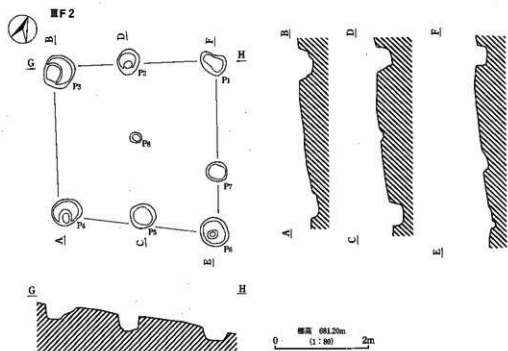
本址よりの出土遺物はなかった。

(6)ⅠF3号掘立柱建物址 (第122図)

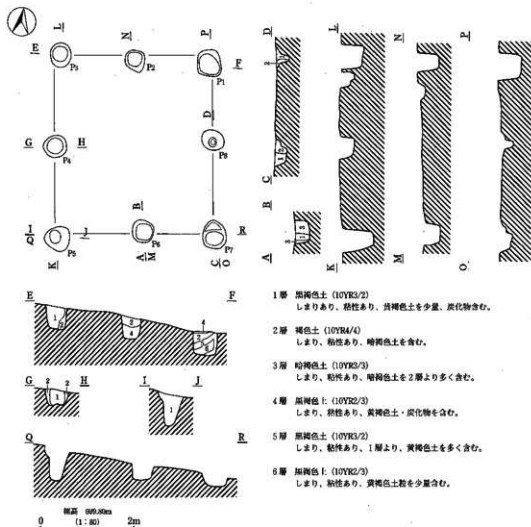
本址は、調査区東端のJ区埋没谷であるJ-サー-19・20、J-シー-19・20Grに位置する。残存状態は不良で西と南辺は確認できなかった。ⅠH36号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は南北方向に長い2間×1間の側柱式建物址と考えられる。規模は桁行4.55m(P1~P3)・梁間3.54m(P1~P2)で、桁行柱間は2.20~2.35m・梁間柱間は3.54mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径38cm・深さ33cm、P2が径32cm・深さ42cm、P3が径25cm・深さ10cm、P4が径24cm・深さ12cmをそれぞれ測る。

本址よりの出土遺物はなかった。



第123図 ■F2・■F3号独立柱建物址実測図

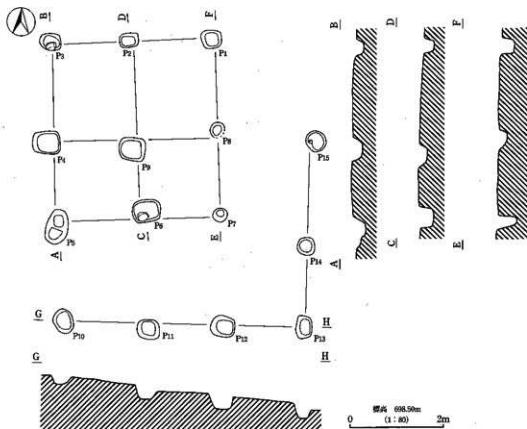


第124図 III F 4号掘立柱建物址実測図

(7) III F 4号掘立柱建物址 (第124図、写真図版五十六①)

本址は、調査区上部台地の南よりであるLーチー14・15、Lーーツ14・15Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。形態は南北方向に長い2間×2間の掘立柱建物址である。長軸方位はN-12°-Eを示す。規模は桁行3.80m (P1~P7)・梁間3.33m (P1~P3)で、桁行柱間は1.75~2.03m・梁間柱間は1.64~1.70mを測る。ピット間に囲まれた面積は12.6㎡を測る。柱穴の形態は円状を基調としている。ピットの規模はP1が径56cm・深さ50cm、P2が径48cm・深さ48cm、P3が径53cm・深さ52cm、P4が径50cm・深さ32cm、P5が径53cm・深さ71cm、P6が径47cm・深さ36cm、P7が径55cm・深さ28cm、P8が径49cm・深さ28cmをそれぞれ測る。ピット内でP4とP6に柱痕を確認できた。

本址よりの出土遺物はピット内より土師器坏片5点があったのみである。

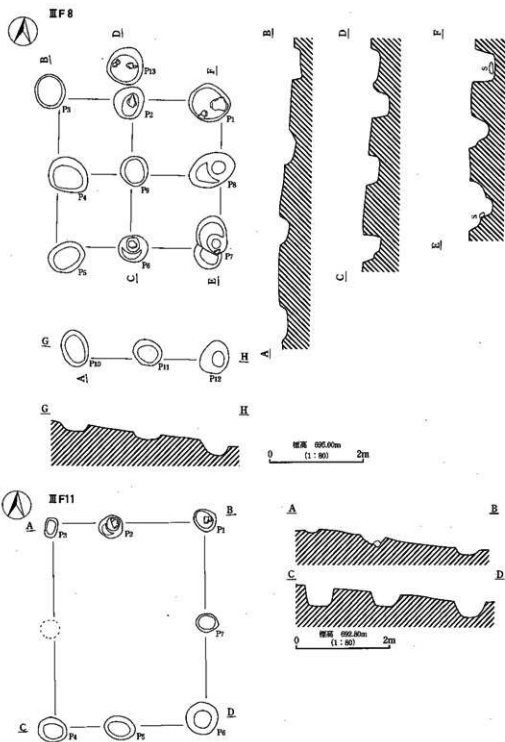


第125図 ⅢF5号掘立柱建物址実測図

(8)ⅢF5号掘立柱建物址 (第125図、写真図版五十六②)

本址は、調査区上部台地の南よりであるL-テ-13・14、L-ト-13・14・15、M-ア-14・15Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北方向に長い2間×2間の総柱式建物址であり、南と西にそれぞれ庇が付けられている。長軸方位はN-9°-Wを示す。規模は桁行3.80m (P3~P5)・梁間3.47m (P5~P7)で、桁行柱間は1.60~2.20m・梁間柱間は1.63~1.84mを測る。庇間は5.16m (P10~P13)と3.96m (P13~P15)を測る。ピット間に囲まれた面積は13.0㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径43cm・深さ30cm、P2が径40cm・深さ26cm、P3が径43cm・深さ22cm、P4が径60cm・深さ24cm、P5が径73cm・深さ42cm、P6が径60cm・深さ34cm、P7が径32cm・深さ49cm、P8が径34cm・深さ18cm、P9が径56cm・深さ25cm、P10が径50cm・深さ19cm、P11が径47cm・深さ29cm、P12が径50cm・深さ34cm、P13が径46cm・深さ25cm、P14が径38cm・深さ13cm、P15が径45cm・深さ41cmを測る。また、P3とP6にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。

本址よりの出土遺物はなかった。



第126图 ⅢF8·ⅢF11号掘立柱建物址实测图

(9)ⅢF8号掘立柱建物址 (第126図、写真図版五十七①)

本址は、調査区上部台地のほぼ中央部であるM-ウ-6・7・8、M-エ-6・7・8Grに位置する。残存状態は良好である。ⅢH24号住居址と重複関係にあるが本址の方が新しい。

形態は南北方向にやや長い2間×2間の総柱式建物址であり南に庇が付けられている。また、北側に入り口施設と考えられるようなピットが検出されている。長軸方位はN-7°-Wを示す。規模は桁行3.40m(P1~P3)・梁間3.34m(P1~P7)で、桁行柱間は1.63~1.77m・梁間柱間は1.52~1.82mを測る。庇間は3.02m(P10~P12)を測る。ピット間に囲まれた面積は10.7㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径81cm・深さ53cm、P2が径70cm・深さ42cm、P3が径71cm・深さ19cm、P4が径83cm・深さ26cm、P5が径76cm・深さ26cm、P6が径60cm・深さ44cm、P7が径80cm・深さ58cm、P8が径100cm・深さ43cm、P9が径64cm・深さ27cm、P10が径78cm・深さ18cm、P11が径62cm・深さ17cm、P12が径70cm・深さ31cm、P13が径80cm・深さ17cmを測る。また、P1・P2・P6・P7にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。

本址よりの出土遺物はP1から土師器小型ロクロ甕片1・土師器坏片1、P3より内面黒色処理された土師器坏片6、P11より土師器甕片2・土師器坏片1(内面黒色処理)、P12より土師器甕片2などが出土しているが図示できるものはなかった。

(10)ⅢF11号掘立柱建物址 (第126図)

本址は、調査区上部台地の東よりであるM-ク-9・10、M-ケ-10Grに位置する。残存状態は西側中央のピットが検出できなかつた他は良好である。

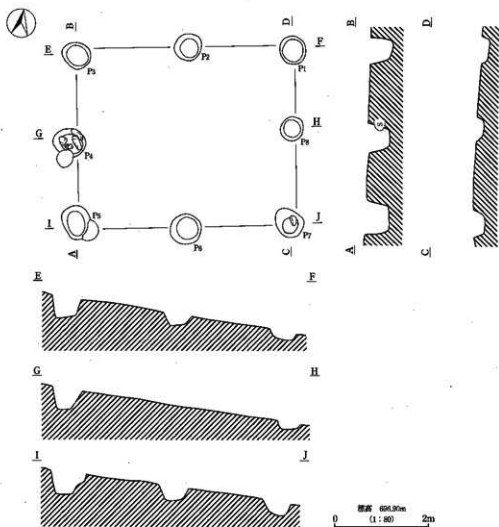
形態は南北方向に長い2間×2間の側柱式建物址であり、長軸方位はN-8°-Wを示す。規模は桁行4.33m(P3~P4)・梁間3.22m(P1~P3)で、桁行柱間は2.15~4.33m・梁間柱間は1.30~1.92mを測る。ピット間に囲まれた面積は13.9㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径50cm・深さ13cm、P2が径51cm・深さ20cm、P3が径41cm・深さ10cm、P4が径60cm・深さ45cm、P5が径63cm・深さ30cm、P6が径70cm・深さ33cm、P7が径43cm・深さ10cmを測る。また、P1とP2にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。

本址よりの出土遺物はP4とP5からそれぞれ土師器甕が1点ずつ出土しているのみであり図示できる物はなかった。

(11)ⅢF9号掘立柱建物址 (第127図、写真図版五十七②)

本址は、調査区上部台地の南よりであるM-イ-13・14、M-ウ-13・14Grに位置する。残存状態は良好である。

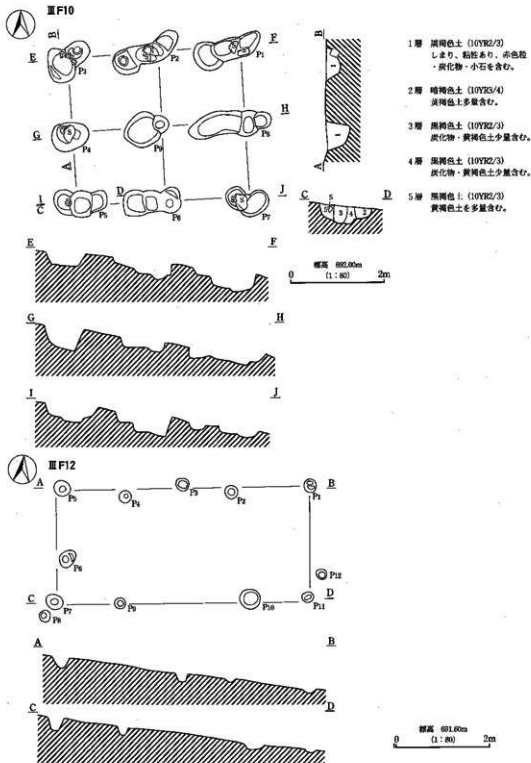
形態は東西方向に長い2間×2間の側柱式建物址であり、長軸方位はN-80°-Eを示す。規



第127図 ■F9号掘立柱建物址実測図

横は桁行4.60m (P1~P3)・梁間3.74m (P1~P7)で、桁行柱間は2.19~2.42m・梁間柱間は1.68~2.06mを測る。ピット間に囲まれた面積は17.1㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径60cm・深さ19cm、P2が径48cm・深さ27cm、P3が径63cm・深さ48cm、P4が径68cm・深さ49cm、P5が径72cm・深さ48cm、P6が径65cm・深さ33cm、P7が径63cm・深さ33cm、P8が径50cm・深さ17cmを測る。また、P4にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。

本址よりの出土遺物はP2より器種不明の土師器が2点出土しているのみであり図示できる物はなかった。



第128図 ⅢF10・ⅢF12号掘立柱建物址実測図

(2)ⅢF10号掘立柱建物址 (第128図、写真図版五十八①)

本址は、調査区上部台地の南東よりである M-ク-4・5、M-チ-4・5Gr に位置する。残存状態は比較的良好であった。

形態は東西方向にやや長い 2 間×2 間の総柱式建物址である。長軸方位は N-88°-E を示す。規模は桁行 3.54 m (P1~P3)・梁間 3.30 m (P3~P5) で、桁行柱間は 1.58~1.96 m・梁間柱間は 1.53~1.77 m を測る。ピット間に囲まれた面積は 11.6 m² を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模は P1 が径 145 cm・深さ 44 cm、P2 が径 151 cm・深さ 40 cm、P3 が径 103 cm・深さ 30 cm、P4 が径 78 cm・深さ 45 cm、P5 が径 111 cm・深さ 37 cm、P6 が径 123 cm・深さ 37 cm、P7 が径 80 cm・深さ 17 cm、P8 が径 175 cm・深さ 28 cm、P9 が径 96 cm・深さ 26 cm を測る。また、P1・P3・P7 にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。また、本址は北側の柱列と南側の柱列がそれぞれ 3 個を基準とする柱穴となる形態であった。これらは掘立柱建物址の立て替えを示すのか、或いは柱穴を支えるための補助ピットであるのか調査段階では不明であった。

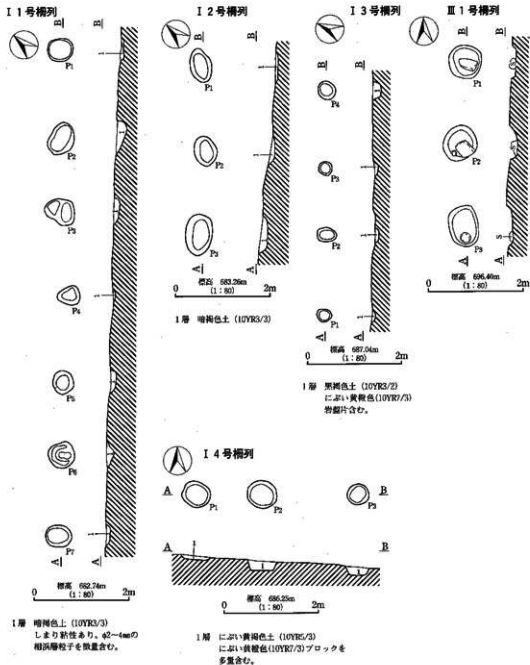
本址よりの出土遺物は P1 から内面黒色処理された土師器坏片 2、P4 より須恵器甕片 1、P6 より土師器甕片 4・土師器椀片 1 などが出土しているが図示できるものはなかった。

(3)ⅢF12号掘立柱建物址 (第128図、写真図版五十八②)

本址は、調査区上部台地の東よりである M-コ-8・9、M-サ-8・9Gr に位置する。残存状態は良好であった。形態は東西方向に長い 2 間×4 間の側柱式建物址と考えられるが、南側柱列と東側柱列に不規則な柱列の並びがある。長軸方位は N-81°-E を示す。規模は桁行 5.37 m (P7~P11)・梁間 2.37 m (P5~P7) で、桁行柱間は 1.04~2.80 m・梁間柱間は 0.92~2.36 m を測る。ピット間に囲まれた面積は 12.8 m² を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模は P1 が径 29 cm・深さ 10 cm、P2 が径 26 cm・深さ 16 cm、P3 が径 28 cm・深さ 18 cm、P4 が径 26 cm・深さ 17 cm、P5 が径 36 cm・深さ 26 cm、P6 が径 40 cm・深さ 26 cm、P7 が径 37 cm・深さ 30 cm、P8 が径 23 cm・深さ 8 cm、P9 が径 23 cm・深さ 18 cm、P10 が径 52 cm・深さ 12 cm を測る。本址よりの出土遺物はなかった。

(4)Ⅰ1号櫛列 (第129図、写真図版五十九①)

本址は、調査区中央台地の先端部である F-ツ-12、F-テ-11、F-ト-10Gr に位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い 6 間の櫛列であり、長軸方位は N-49°-E を示す。規模は P1~P7 が 10.30 m で、柱間は 1.54~1.88 m を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模は P1 が径 52 cm・深さ 8 cm、P2 が径 70 cm・深さ 12 cm、P3 が径 64 cm・深さ 14 cm、P4 が径 49 cm・深さ 8 cm、P5 が径 47 cm・深さ 10 cm、P6 が径 56 cm・深さ 15 cm、P7 が径 53 cm・深さ 10 cm を測る。本址よりの出土遺物はなかった。



第129図 I 1・I 2・I 3・I 4号・III 1号横列実測図

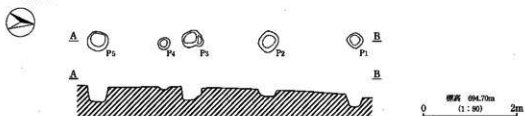
(15) I 2号横列 (第129図)

本址は、調査区中央台地の先端部であるF-ター13、F-ター13Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い2間の横列であり、長軸方位はN-47°-Eを示す。規模は

Ⅱ 2号柵列



Ⅱ 3号柵列



第130図 Ⅱ 2・Ⅱ 3号柵列実測図

P1～P3が3.62mで、柱間は1.80～1.82mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径75cm・深さ8cm、P2が径64cm・深さ18cm、P3が径86cm・深さ20cmを測る。本址よりの出土遺物はP2から土師器燹片4点が出土している。また本址は検出位置よりⅠ1号柵列と同列の柵と考えられる。

(16) Ⅰ 3号柵列 (第129図)

本址は、調査区中央台地上であるJ-ソー10、J-ター10Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は東西方向に長い3間の柵列であり、長軸方位はN-56°-Eを示す。規模はP1～P4が4.80mで、柱間は1.42～1.72mを測る。ピットの規模はP1が径31cm・深さ8.5cm、P2が径41cm・深さ9cm、P3が径27cm・深さ12cm、P4が径39cm・深さ15cmを測る。本址よりの出土遺物は土師器燹片2点がピット内より出土している。

(17) Ⅰ 4号柵列 (第129図)

本址は、調査区中央台地の先端部であるK-アー3、K-イー3Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は東西方向に長い2間の柵列であり、長軸方位はN-87°-Wを示す。ピットの形態は円形を基調としている。規模はP1～P3が3.44mで、柱間は1.40～2.04mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径58cm・深さ9cm、P2が径65cm・深さ23cm、P3が径47cm・深さ18cmを測る。柱痕等は観察できなかった。本址よりの出土遺物は無かった。

(18)Ⅱ 1号櫛列 (第129図、写真図版五十九②)

本址は、調査区上部台地のほぼ真ん中であるM-イ-3Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い2間の櫛列であり、長軸方位はN-2°-Eを示す。規模はP1-P3が3.5mで、柱間は1.72~1.78mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径70cm・深さ16cm、P2が径73cm・深さ15cm、P3が径87cm・深さ12cmを測る。また本址はそれぞれのピット底面に扁平な川原石が1点ずつ検出された。これら礫は柱受けの根石と考えられ、とすると本址は掘立柱建物址の一部が残存した結果とも考えられる。本址よりの出土遺物は無かった。

(19)Ⅱ 2号櫛列 (第130図、写真図版六十①)

本址は、調査区上部台地の東斜面であるM-カー-2・3Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い3間の櫛列であり、長軸方位はN-3°-Eを示す。規模はP1-P4が6.23mで、柱間は2.04~2.10mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径21cm・深さ36cm、P2が径23cm・深さ22cm、P3が径21cm・深さ11cm、P4が径22cm・深さ22cmを測る。本址よりの出土遺物は無かった。

(20)Ⅱ 3号櫛列 (第130図)

本址は、調査区上部台地の南よりであるM-オー-14・15・16Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い4間の櫛列であり、長軸方位はN-10°-Wを示す。規模はP1-P5が5.48mで、柱間は0.54~1.84mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径30cm・深さ28cm、P2が径43cm・深さ22cm、P3が径42cm・深さ29cm、P4が径26cm・深さ5cm、P5が径42cm・深さ35cmを測る。本址よりの出土遺物は無かった。